
ピースの冒険

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピースの冒険

【Nコード】

N2695H

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

ここはポケモン達だけが暮らす平和な世界ポケモンワールド。しかし、その平和はある日の出来事を境に徐々に崩壊していくのであった……

第1話 ピース

ここはポケモン達だけ暮らす、人間が存在しない世界。この世界では、炎、水、草とそれぞれのタイプで統一した国が存在する。それぞれの国は他国と協力し合いながら平和に暮らしていた。

「…………ふあ…………あ…………気持ち良いなあ……………」

ノーマルタイプで統一された国、ノーマルの国にある一つの民家の屋根の上でぽかぽか陽気の中、日向ぼっこひなたしている一人のポケモンが。ウサギのような長い耳と首の周りを覆う襟巻きえりのようなフサフサの毛が特徴的なそのポケモンはイーブイ。名前はピース、である。

「こつこつという晴れた日は日向ぼっこに限るよね〜」

まったりとしながら呟くピース。あまりの気持ち良さに今にも眠りそうな感じだ。

「おーい、ピース!」

その時、何やら下の方からピースを呼ぶ声が。

「この声は……………」

ピースは屋根から身を乗り出して下を覗いてみる。ピースが見つめる先には一人のポケモンがいた。身体にジグザグとした模様を持つタヌキのような姿をしたポケモン、それはジグザグマだった。

「あつやっぱりジグザグマだ！」

このジグザグマはピースの友達なのだ。友達のジグザグマが来た事が嬉しいのかピースは笑顔になる。

「やっぱりまだそこにいたな？ 今日の夜は中心街で祭りがあるから、ガルーラおばさんの店の準備を手伝うって事になってただろ」

少々呆れた感じでジグザグマはそう言った。このノーマルの国では年に一度、国を挙げての大きな祭りが開かれるのだ。

「あつ忘れてた……」

苦笑いするピース。

「だと思ったよ……ほら、急いで行こうぜ！」

「解った、今行くよ！」

ピースは下に続く階段を駆け足で下^{くだ}っていく。そしてジグザグマの所へ。二人は一緒に中心街に向かって走り出した。

「あつそうだジグザグマ、今日の夜の祭りのメインイベントのポケモンバトル、出るの？」

中心街に向かって走りながら、ピースはジグザグマにバトル大会に出るのか聞いた。

「俺は出ないよ」

即答で出ないと答えるジグザグマ。

「えっ何で？」

首を傾げるピース。

「だってさ、バトルには毎年決勝に必ず勝ち残るザングースがいるし……俺の兄ちゃんも出るんだぜ？俺何かが出たって勝てっこないだろ」

ジグザグマが言う兄ちゃんとはマツスグマの事である。

「ピースはどうすんだよ？出るのか？」

今度はジグザグマがピースに質問する。

「どうしようかなあ？出てみたいけど……ザングースやジグザグマのお兄さんがいるし……」

考え込んでしまうピース。大会に出るか出ないか……それを考えているうちにピース達は街の中心街に到着した。中心街には様々なノーマルタイプのポケモン達が今日開かれる祭りの準備をしていた。

「うわぁ……結構大掛かりな作業してるねえ！」

ピースが見つめる先には今夜のメインイベントのポケモンバトル大会の為のバトルフィールドを作っている最中の現場だった。

「年に一度の祭りのメインイベントなんだ、そりゃ大掛かりになるさ。んで、結局大会に出んのか？」

再び質問するジグザグマ。ピースはしばらく考えてから……

「やっぱり出るのは止めよ、見てる方が楽しそうだし」

結局出ないようだ。

「それが良いよ。さあ、早くガルーラおばさんの所に行こうぜ！」

再びジグザグマは走り出した。

「あっ待ってよジグザグマ！」

ピースは慌ててジグザグマを追いかけようとした。その時、ピースの前を横切ろうとしたポケモンにピースはぶつかってしまった。ピースはぶつかった衝撃で後ろに軽く吹き飛び、尻餅をつく。

「痛たたた…… あっごめんなさい！」

ピースはすぐにぶつかってしまったポケモンに謝った。そのポケモンは沈黙したまま、ピースを見つめている。そのポケモンはフードを被っていてピースは顔を確認する事は出来なかったが、そのポケモンから放たれる冷たい視線に思わず身震いしてしまう。

(な、何だろ……この人……怖い……)

心の中でそう呟くピース。そしてフードを被ったポケモンは結局何も喋らずにその場を去ってしまった。ピースはそのポケモンの後ろ姿を呆然としながら見つめていた。

「な、何だったんだろあの人？」

首を傾げるピース。

「おいピース！ 何してんだよ、早く来いよー！」

遠くの方でジグザグマがピースを呼んでいる。

「あつ今行くよー！」

ピースは急いでジグザグマの所へと向かって走っていった。

それからしばらくして、ピースとジグザグマはようやく目的地のガルーラおばさんがいる家にやってきた。家の前にはリンゴや木の実などが並べられていた。どうやら祭りに出す店の商品のようだ。

「ガルーラおばさん！ 手伝いに来たよー！」

家の中に向かってジグザグマが大きな声で叫ぶ。すると家の中から、カンガルーの姿に良く似ていてお腹にはポケットのような物が付いているポケモン、ガルーラがやって来た。

「あらジグザグマちゃんにピースちゃん！ 待ってたわよ」

優しく微笑みながらガルーラはそう言った。

「ごめんねガルーラおばさん遅くなって……ピースがいつもの場所で日向ぼっこしててさ……」

横目でピースを見ながらジグザグマは少し呆れた感じでガルーラに謝る。ピースは苦笑いする。

「良いのよ、おばちゃんは気にしてないから。さあ、早速始めましょうか！ ジグザグマちゃんとピースちゃん、私と一緒にここにある果物をそこに用意してある荷車に乗せておくれ」

「解った！ やるぞ、ピース！」

「うん！」

ジグザグマとピースはガルーラと一緒にバナナやリンゴなどの果物を次々と運び、荷車にどんどん乗せていった。作業を開始してからおよそ十分が経過……

「ガルーラおばさん、これで良いの？」

ある程度果物を荷車に乗せたジグザグマとピース。ジグザグマがこれで良いのかガルーラに確認する。

「うん、もう充分よ。ありがとう二人共、おかげで助かったわ。はい、これは手伝ってくれたお礼よ」

そう言ってガルーラはジグザグマとピースにリンゴを一つずつ手渡した。

「これ良いの!?!」

「良いのよジグザグマちゃん。手伝ってくれたんだからね」

優しく微笑みながらガルーラは言う。

「ありがとうガルーラおばさん！」

本当に嬉しそうにしながら、ジグザグマとピースはガルーラにお礼を言った。

「これくらいしか渡せなくてごめんね。じゃあ、私はそろそろ行くわね。今日は本当にありがとうね」

そう言っただけでガルーラは荷車を引いてその場を去って行った。

「へへへ、リンゴ貰っちゃったよ」

嬉しそうにしてリンゴを見つめるジグザグマ。ジグザグマがそうしている時、街の中心街の方で花火が打ち上がった。

「げっもうこんな時間だったのかよ!? 急ぐぞピース! メインイベントが始まっちゃう!」

リンゴを口に銜え、中心街に向かって全力疾走するジグザグマ。

「あっ待ってよジグザグマ!」

ピースもリンゴを口に銜えて急いでジグザグマを追いかけた。

「本日お集まりの皆さん！ お待たせしました、本日のメインイベント、ポケモンバトル大会の開幕です！」

街の中心街に特別に作られたバトルフィールドの中心でバトル大会の司会進行を務める、体毛が白く背中には茶色い横縞よこしまがあり、頭には赤い毛がある密林に住む猿のようなポケモン、ヤルキモノが集まった街のポケモン達に向けて大きな声でポケモンバトル大会の開幕を宣言した。

バトル大会を観戦しに来た大勢のポケモン達はそれを聞くと待ってましたと言わんばかりの歓声を上げた。

「うわぁかなり集まってるねえ！」

その時ようやくピースとジグザグマが到着した。だが、大勢のポケモン達がいる為バトルフィールドが見えないでいる。

「仕方ない、ついてこいピース！」

そう言っただけでジグザグマはポケモン達の足下を潜り始めた。ピースもジグザグマを追いかけられるように潜り始める。身体が小さい彼らだから出来る事である。そしてしばらくしてようやくバトルフィールドが良く見える先頭にたどり着いた二人。

「それではまず、我らが王で有らせられるレジギガス様よりお言葉を……」

ヤルキモノがそう言うと一緒にポケモン達が静まり返った。そし

て、今まで席に座っていた白と黄色の体色を持ち、体中の随所に黒いボデイラインが走り、両肩と両脚には植物のような緑色の物体が付着している、見た目が巨人のような姿をしたポケモン、レジギガスが立ち上がった。

各国にはレジギガスのようにその国を治める王が存在しているのだ。

「……………」

立ち上がったのは良いが、なかなか喋らないレジギガス。しばらく沈黙が続く……………」

「……………レジギガス様？」

なかなか喋らないレジギガスに思わずヤルキモノは声を掛ける。

「……………楽しもう……………」

ようやく喋り出したと思ったたらたつたその一言だけ言つとレジギガスはまた座ってしまった。

(……………相変わらずだなあレジギガス様は……………)

苦笑いしながらヤルキモノは心の中でそう呟くのであった。

「あ、ありがとうございますましたレジギガス様。さ、さあそれでは、今宵こよひのバトル大会に参加する選手はバトルフィールドへ集まって下さい！」

ヤルキモノの呼び掛けでバトルフィールドに続々と大会に参加す

るポケモン達が集まって来た。集まったポケモンは全員で三十二人である。

「バトル方法はシングルでのタイムマン勝負！ トーナメント式で行っていきます！ そして、今宵の大会で優勝したポケモンには……このノーマル・オーブを守る、守護者になる事が出来ます！」

ヤルキモノは手に持っていた真っ白な宝玉を掲げ、皆に見えるようにした。このノーマル・オーブはノーマルの国を災いから守ってくれている不思議な宝玉で、このノーマルの国だけではなく他国にもこのような宝玉が存在する。そしてこのバトル大会で優勝したポケモンはこの宝玉を守る、ガーディアンの役目を与えられるのだ。

「もぐもぐ……いつ見ても綺麗な玉だね」

リンゴを食べながらピースはそう呟く。

「むしゃむしゃ……だな」

隣で同じくリンゴを食べているジグザグマが頷いて答えた。

「それではお待たせしました！ 早速バトル大会第一回戦を始めましょう！ ザングース選手、ラッタ選手はバトルフィールドに残って下さい。それ以外の選手はフィールド外に用意してあるベンチで待機して下さい」

ヤルキモノの指示に従い、体に赤い色をした稲妻のような模様がありマングースに似たポケモン、ザングースと大きな前歯が特徴的な鼠のようなポケモン、ラッタはバトルフィールドに残り、それ以外のポケモン達はベンチに向かった。

「最初からいきなりザングースと当たるなんて……あのラッタはついてないな」

ザングースは毎年このバトル大会で必ず決勝に残る優勝候補なのだ。そんなザングースと当たるラッタを哀れむジグザグマ。

「解らないよ？　もしかしたらラッタがザングースに勝つかも……ん？」

そこまで言いかけた時、ピースの視界の中にあるポケモンの姿が入った。それは、ピースがぶつかってしまったあのフードを被った謎のポケモンだった。

（あの人……）

「ん？　おい、どうしたピース？」

顔を覗き込むようにしてジグザグマが聞いた。

「え？　あ、いや何でもないよ」

「変なピースだな」

首を傾げるジグザグマ。

（何でかな……あの人……凄く嫌な感じがする……いや、きっと気のせいだよな、うん）

そう心の中で自分に言い聞かせるピース。

「では、ザングース選手VSラッタ選手！ バトル開始！」

ヤルキモノの合図と共に遂に大会が始まった。

第1話 ピース（後書き）

調子に乗って新しい小説を連載してしまいました（汗）

ピース

「初めまして！ この小説の主人公のピースです、よろしく願いします！」

おっちゃんと挨拶出来たね！

ピース

「挨拶は基本ですからね。バクフーン先輩やアスカ先輩に負けられないように頑張っていきますよ！」

さすが新人は元気が良いね（笑）あっそうだ、連載小説がこれで4つになったから……更新スピードが遅くなりますんでそれはお許しを（汗）

ピース

「出だしからいきなり謝罪ですか!？」

第2話 激戦！ バトル大会！（前書き）

やばい、新作を執筆するの凄じ楽しい（笑）

ピース

「作者さんが変なテンションになってる（汗）」

最近熱いバトルっていうのを執筆してなかったような……今回はバトルに力を入れてみたけど果たして受け入れてもらえるのか……

ピース

「とにかく、第2話どうぞ！」

あっ言われた（汗）

第2話 激戦！ バトル大会！

「あんたを倒して俺が優勝してやる！ 電光石火！」

ラッタは素早い身の熟しこなでザングースに突進していった。そのスピードはまさに電光石火だ。

「俺を倒す？ 寝言は寝て言いな！ 見切り！」

ザングースは集中力を高め、己の動体視力を向上させた。今のザングースにはラッタがゆっくり歩いているように見えている。余裕の表情で向かってきたラッタを回避するザングース。

「このっ必殺前歯！」

すぐに身を翻してラッタは自慢の鋭い前歯ひるがえをザングースに直撃させようと突っ込んでいく。しかし、まだザングースは見切りを使っ
ていて、ラッタの攻撃を余裕で回避した。

「こいつー！」

ラッタは意地になつて連続で必殺前歯を繰り出したが、ザングースに攻撃が直撃せず必殺前歯は空を切る。次第に攻め疲れてきたのか、ラッタの動きが徐々に鈍くなっていった。

「そろそろ反撃させてもらっぜ！ 乱れ引かつ掻きから連続切り！」

動きが鈍くなったラッタにザングースは両手の鋭い爪で引かつ掻いた。

しかし、これはただの引っ掻く攻撃ではない。連続切り……それは攻撃が一発当たる毎に威力が倍増する技なのだ。

ザングースは乱れ引っ掻きと連続切りの合わせ技を使い、一気に勝負を終わらせるつもりだ。

ラッタにザングースの鋭い爪が一回、二回、三回と連続で直撃する。

「四発目！」

ザングースの四発目の攻撃がラッタに直撃した。四発目にもなる威力はかなりのものとなり、ラッタはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされてしまった。ラッタはバトルフィールドの外で倒れたまま動かなくなった。そこに審判も務めているヤルキモノがやって来てラッタの様子を確認する。

「……ラッタ選手、戦闘不能！ よって勝者、ザングース選手！」

ラッタを戦闘不能とみなし、ヤルキモノはザングースの勝利を高々と宣言した。その瞬間、バトルを見ていた観客達が大きな歓声を上げた。

ザングースは何事も無かったかのように涼しい顔をしてバトルフィールドを離れ、ベンチに向かった。そしてザングースとすれ違いに二人のポケモンが担架たんかを待つて気絶しているラッタの所へ。そのポケモンの外見は薄桃色の丸い体で、腹部にはポケットがあり、そのポケットには卵がある。ラッキーと言われるポケモンである。

この二人のラッキーは姉妹で、このノーマルの国で医者をしているのだ。今回のバトル大会で敗れ、傷ついたポケモンをラッキー達がバトルフィールドから運び出し、治療をしてあげるのだ。

「さあ次のバトルにいきましょうー！」

この後様々なポケモン達のバトルが展開され、大会を見に来た多くのポケモン達は熱狂、大いに盛り上がった。そして大会は順調に進み、一回戦は残り一組を残すのみとなった。

「マッスグマ選手とニアルマー選手、バトルフィールドに入って下さい」

ヤルキモノに呼ばれ二人のポケモンがバトルフィールドにやってきた。一人はアナグマのような姿をし、身体には茶色の模様が体の流れにあわせ直線的に入っているジグザグマの兄、マッスグマだ。もう一人は螺旋状に曲がった長い尻尾を持った猫のようなポケモン、ニアルマーだ。

「あつ兄ちゃんだ！ 頑張れー兄ちゃん！」

自分の兄の登場にジグザグマは嬉しそうにしている。そんなジグザグマにバトルフィールドにいたマッスグマは気がついた。

「よう！ 応援よろしくなジグにピース！」

右手を上げ、ジグザグマとピースに笑顔で言うマッスグマ。マッスグマは弟の事をジグと呼んでいるようだ。

「ずいぶんと余裕じゃないのよ？ 私が弱そうだから余裕なのかしらっ？」

マッスグマを睨みつけるニアルマー。どうやらさっきのマッスグマの行動が気に入らなかつたみたいだ。

「な、何で怒ってるの?」

ニアルマーが何故怒っているのか解らないマツスグマは戸惑っている。

「二人共、そろそろバトルを始めようと思うが……良いかな?」

ヤルキモノが二人にバトルを開始しても良いか聞く。

「あつ良いぜ!」

「いつでも良いわ」

二人は戦闘体勢に入る。

「解った。それではマツスグマ選手VSニアルマー選手、バトル開始……」

「電光石火!」

フライング寸前でニアルマーは電光石火でマツスグマに向かっていった。

「おっと!」

ニアルマーの体当たりをマツスグマは紙一重で回避した。

「これで終わりじゃないわよ!」

素早く身を翻してニアルマーはマツスグマの背中に体当たりを決

めた。

「くっやったな！ 切り裂く！」

マツスグマは右手の鋭い爪でニアルマーを引っ掻こうとした。

「させないわ！」

ニアルマーはその特徴的な螺旋状に曲がった尻尾をマツスグマの右腕に絡ませ、切り裂く攻撃を防いだ。

「10万ボルト！」

尻尾を右腕に絡ませたまま、ニアルマーは身体から強力な電撃を放出させた。

「ぐっ!?!」

苦痛で表情を歪めるマツスグマ。

「次で決めるわ！」

ニアルマーは尻尾を器用に使い、マツスグマを空中に投げ飛ばした。

その後ニアルマーは尻尾をバネのように使い高くジャンプしてマツスグマの真上を取る。

「アイアンテール！」

ニアルマーは尻尾を鋼のように硬くし、マツスグマの頭にアイア

ンテールを直撃させた。アイアンテールを受けたマツスグマは地上に落下、地面に身体を打ちつけた。

その衝撃で辺りに砂塵さじんが舞う。

「ふん、優勝候補って割には大した事ないわね」

地上に着地したニアルマーは少し呆れた表情をしている……砂塵が少しずつ収まっていく。

「うお〜痛ってえ〜……頭割れるかと思っただぜ」

なんとマツスグマはまだ倒れていなかった。だがアイアンテールは効いたみたいで両手で頭を押さえている。

「わ、私のフルパワーのアイアンテールを受けてまだ倒れないなんて!?!」

自分の持てる力を全て込めた渾身のアイアンテールだったのに、それを受けても倒れなかったマツスグマに驚愕きょうわくするニアルマー。

「ようやく身体が暖まってきたぜ。さあ、これから本番だ! 水の波動!」

両手を使って周囲の空気中の水分を集め、水のボールを作り出したマツスグマ。そしてマツスグマはその水のボールをニアルマーに向けて放つ。

「で、電光石火!」

慌てながらもニアルマーは電光石火で水の波動を回避した。そし

て一旦マツスグマから離れようとする。

(お、落ち着くのよ……私のアイアンテールは効いてない訳じゃない……とにかく奴から離れて大勢を立て直して……)

「逃がさないよ」

ニアルマーの背後から声が。ニアルマーが振り向くとそこにはマツスグマの姿があった。すでに攻撃する体勢に入っている。

「なっ!?!」

「ギガインパクト!」

マツスグマの渾身の突進がニアルマーに直撃した。ギガインパクトを受けたニアルマーは大きく吹き飛ばされ、地面に倒れた。

「ニアルマー選手戦闘不能! マツスグマ選手の勝利!」

ヤルキモノが高々とマツスグマの勝利宣言をした。観客達はマツスグマの勝利に大きな歓声を上げる。そしてマツスグマは嬉しそうにガッツポーズを取る。

「ふう〜……もう、相変わらず兄ちゃんのバトルはハラハラするよ……」

最初のバトル展開からマツスグマが負けると思ったジグザグマは一つ大きいため息を吐き、ホツとした表情をする。

「でも勝って良かったよね!」

笑顔でピースはジグザグマに言った。ジグザグマも笑顔になり、頷いて応えた。

「さあ、これで全ての一回戦が終了！ この調子でバトル大会、盛り上がっていきましょう！」

ヤルキモノの言葉を聞いて観客達は再び大きな歓声を上げる。

「さあ皆さん！ バトル大会いよいよも大詰め！ 只今より決勝戦を開始致します！」

盛り上がったバトル大会もついに決勝戦まできていた。観客達のボルテージも急上昇、凄い熱気に包まれた。

「では決勝まで勝ち残ったポケモンを紹介しましょう！ まずはザングース選手！」

ヤルキモノに呼ばれ、ザングースが腕組みしながらバトルフィールドにやってきた。

「続きましてマッスグマ選手！」

次にマッスグマが呼ばれた。マッスグマは元気良くバトルフィールドにやってきた。

「やっぱり今年もお前との対戦になったな」

腕組みしたままザングースがマッスグマに向けて言った。しかし、表情は何処か嬉しそうな感じだ。笑みを浮かべている。

「そうだな……去年はお前に負けたが、今年は俺が勝たせてもらおうぜザングース！」

闘志を漲みなぎらせるマッスグマ。このマッスグマとザングースは毎年この大会の決勝でぶつかり合う、言わばライバル同士なのだ。

「二人共準備は良いですね？ では、ザングース選手VSマッスグマ選手！ バトル開始！」

『切り裂く！』

試合開始と同時にマッスグマとザングースは互いの鋭い爪をぶつけ合った。両者のパワーは互角、鏢つばざり競合いが始まった。

「ぶっ」

急に笑みを浮かべるザングース。刹那^{せつな}、ザングースの身体からバチバチと音を立てながら電気が放出され始めた。

『10万ボルト!』

鏢競合いを続けながらザングースは10万ボルトを放ったが、マツグマも同じ技で対抗、両者の10万ボルトはぶつかり合い爆発が発生した。

爆発の衝撃で両者は後方へと吹き飛ばされる。

「ちっ! マツグマも同じ事を考えてやがったか!」

「水の波動!」

すぐに体勢を立て直したマツグマはザングースに向けて水の波動を放った。

「冷凍ビーム!」

ザングースも体勢を立て直し、両手を使って超低温のビームを放ち、水の波動にぶつけた。

冷凍ビームを受けた水の波動は氷の塊となり地面に落下。落下した衝撃で碎け散った。

『乱れ引っ掻き!』

両者は再び接近戦を始め、互いの鋭い爪を何回もぶつけ合った。互いの爪がぶつかり合う度に閃光が走る。

「連続切り!」

ここでザングースは得意の乱れ引つ掻きと連続切りのコンビネーション攻撃に切り替えた。一回、二回と攻撃を繰り返す度にザングースの技の威力が倍増していく。

最初は互角だった技のぶつかり合いも、徐々にマツスグマが力負けし始めた。

「おらぁ！」

そしてザングースの渾身の一撃で、マツスグマは攻撃を弾かれ大きく体勢を崩した。

「くっ！？」

「もらったぁぁぁ！」

ザングースの鋭い爪がマツスグマに迫る。

「守る！」

ここでマツスグマは自分の身体をバリアーのようなもので包み、ザングースの攻撃を防御した。そして今度は守るで攻撃を弾かれたザングースが大きく体勢を崩す。

「くらえ、切り裂く！」

「見切り！」

マツスグマの反撃の切り裂く攻撃をザングースは見切りを使って回避、バックステップして一旦マツスグマから離れた。

「はあ……はあ……さ、さすがだマツスグマ……」

「はあ……はあ……あ、あんたもな……」

互いに息切れを起こしている。

「次で……決めるぞ！」

ザングースが右手に力を込め始めた。

「嗚呼……勝負だ！」

マツスグマは突進する体勢に入る……両者は攻撃する体勢を維持したまましばしお互いを睨み続ける。観客達はバトルの決着が付くのを固唾かたすを呑んで見守っている。

「……はっ！」

「……うおおおお！」

両者同時に走り出した。

「気合いパンチ！！」

「ギガインパクト！！」

ザングースの渾身の右ストレートとマツスグマの最大パワーの突進がぶつかり合った。刹那、二つの強力な技のぶつかり合いで凄まじい爆発が発生、二人を爆発が包み込んだ。

しばらくしてようやく爆煙が収まってきた。バトルフィールドが確認出来るようになった時、観客達がざわめき始めた。何故なら……

「りよ、両者戦闘不能！」

ヤルキモノが高々と宣言した。そう、ザングースとマツスグマは二人揃って倒れていたのだ。

この勝負は引き分けだ。

(引き分け……この大会で引き分けなんて初めてだぞ……この場合どうすんだ……?)

心の中で呟くヤルキモノ。彼が言うように、このバトル大会で引き分けが起きた事は今まで無かったのだ。この場合どうすれば良いのかを考えるヤルキモノ。彼が考えてる間にザングースとマツスグマを治療する為に二人のラッキーがバトルフィールドにやってきた。

「え……今大会初の引き分けが発生してしまいました……レジギガス様、これは如何いかいたしましょうか？」

ヤルキモノはレジギガスにどうするかを尋ねた。観客達全員の視線がレジギガスに集中する。

「……………」

だがレジギガスはしばらく沈黙したままただ席に座っていた。

「……………レジギガス様？」

首を傾げながら聞くヤルキモノ。

「……………両者の優勝とする……………」

ようやく喋ったと思ったならレジギガスはザンゲースとマツスグマの二人を優勝という事にしようと言い出した。

(え〜！？ い、良いのかそんなんで！？)

心の中でレジギガスの決定に驚いているヤルキモノ。

「……………皆の者、異論はあるか……………」

レジギガスが観客達に今の決定に言いたい事があるかを尋ねた。観客達は何も言わず、ただ首を左右に振って異論ありませんとアピールした。

「……………決まりだ……………」

ザンゲースとマツスグマ、二人の優勝という事に決まった。丁度その時、ラッキー達の治療を受けて少し回復した二人が起き上がった。

「まさか、俺とあなたの優勝になるなんて……………予想しなかったな」

「確かに……………」

さすがにこのレジギガスの決定を予想出来なかった二人は苦笑いする。

「え、え〜レジギガス様の決定により、ザングース選手とマッスグマ選手の二人での優勝になりました！ 皆さん、この二人に大きな拍手を！」

ヤルキモノが二人を指しながらそう言うと、観客達は二人に拍手した。

「凄いね二人で優勝なんて！ それに良いバトルだったよね！」

二人のバトルに感動したのか目をキラキラさせているピース。

「だよな！」

ジグザグマもピースと同じように感動したようだ。

「それでは、ザングース選手とマッスグマ選手にノーマル・オーブを……」

大会優勝者の二人にノーマル・オーブを手渡そうとヤルキモノがノーマル・オーブを手に二人に向かっていく。その時、観客席の中から突然一人のポケモンが飛び出し、ヤルキモノの前に立ちはだかつた。そのポケモンとは、例のフードを被った謎のポケモンだ。

「な、何だ君は!?!」

「……それは頂くぞ……波動弾！」

謎のポケモンはヤルキモノの腹部に右手を翳し、青いエネルギー弾を作り出してヤルキモノの腹部に直撃させた。ヤルキモノは吹き飛ばされ、手に持っていたノーマル・オーブを放してしまった。そしてノーマル・オーブは謎のポケモンが奪ってしまふ。

「貴様、それを返すんだ！」

謎のポケモンに向かってザングースとマッスグマが突っ込んでいった。

「……サイコキネシス！」

謎のポケモンは右手を翳し、強く念じた。そしてサイコキネシスで二人を捕縛、動きを封じた。

「ぐっ!?!」

「……雑魚が……吹き飛ばべ！」

謎のポケモンがまたさらに強く念じると、ザングースとマッスグマはバトルフィールド外まで吹き飛ばされた。

「兄ちゃん!?!」

「ジグザグマの兄さん!?!」

ピースとジグザグマは慌ててマッスグマ達の所へ駆け寄る。

「……貴様……一体何者だ?」

レジギガスが立ち上がり、戦闘体勢に入る。

「……俺の名はヘル……世界を地獄に変える者……」

第2話 激戦！バトル大会！（後書き）

ピース

「ヘルって確か地獄って意味じゃ……作者さん、あのポケモンは一体何者なんですか？」

謎のポケモンです。

正体？ 皆で考えてみましょう（笑）

バクフーン

「誰だろうなあ？」

って何で君がここに！？

ピース

「あっ先輩だ」

バクフーン

「可愛い後輩を見に来たぜ（笑）皆、ピースはまだデビューしたばかりだけど、応援よろしくな！」

後輩思いなのは良いけど、作品の枠を越えるのは……（汗）

バクフーン

「気にすんなって（笑）」

ピース

「気にしたら負けってやつですね先輩（笑）」

バクフーン

「おっ良く解ってんじゃんピース(笑)」

……はあ、もういいや(汗)

第3話 死闘！ レジギガスVSヘル！（前書き）

ピース

「今回はレジギガス様とヘルの対決ですね！」

その通り！

そしてヘルの正体が今回で解っちゃいます！

ピース

「もうですか!?!」

いや、僕隠し事ってどうも苦手だね（汗）

予定では正体ばらすのはもっと先だったんだけど……今回で出しちゃえ！ みたいなノリでつい（汗）

ピース

「あゝらら（汗）まあとにかく第3話、どうぞ！」

あつまた言われた（汗）

第3話 死闘！ レジギガスVSヘル！

「……世界を……地獄に変えるだと？　それが貴様の目的か？」

戦闘体勢を維持したまま、フードを被ったポケモン、ヘルに問うレジギガス。

「そうだ……もうここに用はない……物は手に入ったからな」

手に持っているノーマル・オーブを見つめるヘル。

「……貴様は逃さん……この場で貴様を倒し、ノーマル・オーブを返してもらおうぞ」

「俺を……倒す？　ふっ……やれるもんならやってみろ」

レジギガスを挑発するヘル。仮にもレジギガスはこのノーマルの国を治める王……実力はかなりのものだ。そんなレジギガスを挑発する者を今まで見た事など無い大会を観戦していたポケモン達は騒然としている。

「……行くぞ……メガトンパンチ！」

レジギガスはその巨大な右手でヘルに殴りかかった。しかし、ヘルは空高く浮遊してメガトンパンチをあっさり回避。

メガトンパンチは地面に直撃する。

レジギガスのパワーが強すぎるせいで、メガトンパンチが直撃した地面には地割れが。

「波動弾！」

上空からヘルは両手を使い、一つの青いエネルギー弾を作り出してレジギガスに向け放った。

「ふん！」

レジギガスは左手を使い、波動弾を弾き飛ばした。弾き飛ばされた波動弾は遙か上空へと飛んでいった。

「苦手な格闘タイプの技を弾くか……さすが王様と言ったところか……」

腕組みをして地上のレジギガスを見下ろすヘル。

(……………この者、強い……………)

波動弾を弾き飛ばしたレジギガスだが、波動弾の威力が想像以上に高かったらしく、左手を痛めてしまったようだ。

だがヘルに悟^{さと}られないよう平静^{へいせい}を装^{まか}うレジギガス。

「……………破壊光線！」

痛みを堪え、レジギガスは両手をヘルに向けて翳^{かざ}し、極太の光線を放った。

「破壊光線か……………」

ヘルは向かってくる破壊光線を回避しようとはせず、静かに右手を前に翳した。その刹那^{せつな}、破壊光線はヘルに直撃し、凄まじい爆発

が発生した。その爆発で発生した衝撃波は凄まじく、地上にいたポケモン達を吹き飛ばす程だ。

……ゆっくりと爆発で発生した爆煙が収まっていく……

「……やはり防御していたか……」

なんとヘルは無傷だった。破壊光線が直撃する寸前でサイコキネシスで生み出したバリアーを張り、自分の身を守っていたのだ。

(あの者相手に力を抑えていては勝てんな……仕方ない……)

レジギガスは何かを決意したようだ。

「……皆の者、今すぐここから避難するのだ……本気でやる」

本気……そのレジギガスの言葉を聞いたポケモン達は急に慌て始めた。

何故ならレジギガスが本気を出すと、今いる中心街……いや、下手をしたら国そのものが壊滅してしまう危険があるからだ。

「に、逃げるー!?!?」

その場にいたポケモン達は一斉に逃げ出した。

「俺達も逃げよう! 兄ちゃん達、立てる?」

ジグザグマがマツスグマとザングースに聞いた。

「くっ……ダメだ……身体に力が入らない……」

マッスグマとザングースはヘルにやられた時に怪我をってしまったらしく、立ち上がれないでいる。

「ど、どうしよう……僕達じゃ身体が小さいからザングースさんやジグザグマの兄さんを支えられないし……」

ピースはどうやってたらザングース達と一緒に避難出来るのかを必死に考えた。そんな時、ピースの視線にあるポケモンが飛び込んできた。

「あっガルーラおばさん！ 皆、ここで待っててね！ すぐに戻るから！」

そのポケモンはガルーラだった。ピースは急いでガルーラの所へ走る。

「ピースちゃん！」

「お願いガルーラおばさん、力を貸して！ ザングースさんとジグザグマの兄さんが怪我してて動けないんだ！」

「何だつて！？ 二人は今何処にいるの？」

「こっちだよ！」

ピースはガルーラと一緒にザングース達の所へと向かった。

「破壊光線！」

「波動弾！」

ポケモン達が避難をしている時、レジギガスとヘルの戦いは熾烈しれつをきわめていた。

レジギガスの破壊光線とヘルの波動弾はぶつかり合い凄まじい爆発が発生した。その爆発の衝撃波で周りに建ち並ぶ建物の外装が吹き飛んでしまった。

「メガトンパンチ！」

爆発の衝撃を物ともしないでレジギガスはヘルに接近、殴りかかった。

「守る！」

ヘルは自身をバリアーで覆い、メガトンパンチに備える。レジギガスは構わずバリアーの上からヘルを殴った。

レジギガスのパワーは凄まじく、ヘルは吹っ飛ばされて建物の壁に激突。だがヘルはバリアーで覆われているのでダメージは無い。

「破壊光線！」

攻撃の手を緩めないレジギガス。すかさず破壊光線を放った。だがヘルはすぐに空高く浮遊して破壊光線を回避した。

破壊光線は建物に直撃し、建物は木っ端微塵こっぱみじんに吹き飛んでしまった。

「な、なんて戦いなんだ……同じポケモンの戦いとは思えない……」
まだ近くにいたザングースとマツグマ、それにジグザグマはレジギガスとヘルムの戦いに驚愕している。

「彼処だよガルーラおばさん！」

その時、ようやくガルーラを連れてピースがやって来た。

「待たせたわね！ さあ、すぐにここから離れるわよ！」

『うわっ！？』

ガルーラはザングースとマツグマをひょいと持ち上げて両脇に抱えた。

「さ、さすがガルーラおばさん力持ちだね……」

苦笑いするジグザグマ。

「ピースちゃんにジグザグマちゃん、逃げるわよ！」

『うん！』

ピース達は急いでレジギガス達の所から離れていった。

「そろそろ終わらせてやる……波動弾」

空高く浮遊したヘルは波動弾を作り始めた。しかし、作っている数は一つではない。大きさは通常の波動弾に比べ、野球ボール程に小さくになっているがその数が尋常じゃない程多いのだ。

「更にサイコネシス」

無数の小さな波動弾をサイコネシスでコントロールし始めたヘル。

そして両手を上に翳すと無数の波動弾が空に向かって上昇を始めた。

「くらえ！ メテオ・インフィニティー!!!」

ヘルが両手を下に向けて振り翳す。すると、上空に停滞していた無数の波動弾がレジギガスに向かって落下していった。

「……………我を見縊^{みくび}るな……………」

レジギガスは右手と左手のそれぞれの手の平にエネルギーを集め、エネルギー弾を生み出した。そして今度はその二つのエネルギー弾を合体させて一つの巨大なエネルギー弾を作り出した。

「……………破壊光線・改！」

レジギガスは自分の身体と同じ位の巨大な破壊光線を放った。互いの技はぶつかり合い、今まで以上に凄まじい爆発が発生した。

爆煙が少しずつ収まっていく……

「はあ……はあ……」

レジギガスは今の攻撃で力を出し切ってしまったようで、ひやみず跪いて苦しそうに息をしている。

「はあ……はあ……や、やった……のか……？」

レジギガスはゆっくりとヘルがいた上空を見上げようとした。

「……ドレインパンチ！」

刹那、いつの間にかレジギガスの懐にまで接近していたヘルは右ストレートをレジギガスの腹部に直撃させた。

「がつ！？」

「はあ……はあ……この俺に、まさかここまでのダメージを負わせるとは正直驚いた……だが、この勝負は俺の勝ちだ……お前の残りの体力……俺が頂くぞ」

ヘルがそう言い終わった刹那、レジギガスは身体から力が抜ける感覚に襲われた。ドレインパンチは相手の体力を吸い取る技なのだ。

「……おの……れ……」

レジギガスは遂に力尽きて倒れた。

「……少しは回復出来たか……」

「レジギガス様!？」

突然ヘルの背後から声が。ヘルが振り向くとそこにはピース達
がいた。

レジギガスが心配で戻ってきてしまったようだ。

「……お前はあの時の……」

ピースを見つめるヘル。レジギガスとの激しい戦闘でフードは何
処かへ無くしてしまったようで、ピースには今のヘルの姿がはつき
りと解る。

人型に近い姿で尻尾が長くて太腿ふとももが太く、体色は薄い紫色をした
ポケモン……それはミュウツーといわれるポケモンだった。

「そんな……レジギガス様が……負けた……」

レジギガスの敗北が信じらんないといった表情をするマッスグマ
達。

「……お前達もこいつのようになりたいか？」

倒れているレジギガスを指しながらマッスグマ達を睨むヘル。へ
ルから放たれる威圧感に思わず後退りするマッスグマ達……だが、
一人だけ動じないポケモンがいた。ピースである。

「許せない……レジギガス様をあんな目にあわせて……皆が住む街
をこんなにして……」

怒りで身体を震わせるピース。刹那、ピースの身体から突如白いオーラが出現した。

「むっ！」

ピースの変化に思わず戦闘体勢に入るヘル。

このピースの変化にジグザグマ達は驚いた表情をしている。

「お前……お前だけは……許さない！ 電光石火！」

怒りに任せてピースは電光石火のスピードでヘルに突進していった。

「電光石火如き、技を使うまでもない」

ヘルは両手を交差させて攻撃を受け止める体勢に入る。

「うおおおお！」

「ぐっ！？」

ピースの攻撃を受け止めたヘルだが、あまりに強い力で後方に吹き飛ばされてしまった。

（こ、こいつの力は一体なんだ！？）

予想以上のピースの力に驚愕するヘル。

「もう一発だ！」

再びピースは電光石火でヘルに突っ込んでいった。

(くっ今の俺の体力ではこいつのパワーに対抗出来ない……仕方ない！)

ヘルはピースの攻撃を紙一重で回避、そして空へと浮遊した。

「悪いがお前と遊んでいる暇は無いんでな」

そう一言だけ言ってヘルは何処かへと飛んでいってしまった。

空を飛べないピースはただヘルが飛んでいく姿を見る事しか出来なかった……ヘルの姿が見えなくなると、ピースの身体から白いオーラが消え去った。

「……ううっ……」

白いオーラが消えた途端にピースはその場に倒れてしまった。

「あっおいピース!？」

慌ててジグザグマがピースの所に駆け寄る。何回かピースに呼びかけるジグザグマだが、ピースは返事をしなかった。

どうやら気絶してしまったようだ。

「ジグ、ピースは？」

ガルーラに支えてもらいながら、マッスグマはジグザグマにピースの事を聞いた。

「大丈夫、気を失ってるだけみたい」

「そうか……しかし、さっきの白いオーラは一体……」

「今はそれよりもまず、ピースちゃんとレジギガス様の方が先決なんじゃないのかい？」

両手を腰に当て、ガルーラはマツグマに言った。

「……そうですね。ジグ、避難した街の皆を呼んできてくれないか？ 俺達だけじゃレジギガス様を運べないからさ」

「解ったよ兄ちゃん」

ジグザグマは避難した街のポケモン達を呼びに走り出した。

第3話 死闘！ レジギガスVSヘル！（後書き）

ピース

「作者さん、これポケモンですか？（汗）」

ポケモンです。

まあ多少ド ンボールの影響はあるかな（汗）

ピース

「レジギガス様の最後に使った破壊光線・改なんてかは 波ですよね（汗）」

まあこれが僕、バクフーン流って事で（笑）

ピース

「え〜（汗）」

バクフーン

「バクフーンの名を聞いてやってきたぜ！」

ピース

「あつ先輩」

また君は勝手に（汗）

バクフーン

「気にすんなって（笑）」

それよりさ、ピースが何か特殊能力っぽい出したよな？」

ピース

「あっそういえば」

僕ですから（笑）

当然主人公には特殊能力持たせるさ。

まあこの能力が詳しく解るのはかなり先になるけどね。

バクフーン

「今言えよ」

嫌だ。

ピース

「お願いします作者さん」

そ、そんな可愛くされたってダメなんだからね!?

「 〓 〓 (・ ー ・) 」

バクフーン

「あっ久しぶりに走って逃げた（汗）」

第4話 旅立ち

ヘルが去ってから一日が経過、ヘルとレジギガスの激しい戦闘で、ノーマルの国は壊滅的ダメージを負ってしまった。

だが、ノーマルの国に住むポケモン達は力を合わせ、壊れてしまった建物を直すなど、復興作業を始めていた。

その頃、ヘルとの戦闘で傷つき、倒れてしまったレジギガスとピースはノーマルの国で一番大きな病院の病室で静かに眠っていた。ちなみにレジギガスだけは、特別に作られた特大の病室にいる。体長が3.7メートルあるレジギガスだと、その病室にしか入れないからだ。

「……ピース……」

一般の病室に用意されているベッドで、眠っているピースを心配そうにしながら見つめているジグザグマ。

「……うーん……あれ、ここは？」

ピースが意識を取り戻した。ゆっくりと上体を起こして、周囲を確認する。

「ピースー！」

「うわっ!？」

ジグザグマが嬉しそうにしてピースに飛びついた。突然だったので、飛びつかれた時の衝撃に踏ん張る事が出来なかったピースは、ジグザグマと一緒にベッドから落下してしまった。

「痛たたた……もう、いきなり何なのジグザグマ」

「あはは……ごめんごめん、お前が目を覚ました事が嬉しくてさ」
苦笑いするジグザグマ。

「ねえジグザグマ、ここ何処なの？」

部屋を見回しながら、ジグザグマにここは何処なのか質問するピース。

「ここは病院だ」

「病院？ 何で僕病院にいるの？」

首を傾げるピース。

何故自分が病院に運び込まれたのか、解っていないようだ。

「覚えてないのか？ お前、あのヘルって奴とのバトルで凄い力出したんだぜ？ その後すぐに倒れちまって、急いでこの病院に運んだんだ」

今までの事をピースに説明するジグザグマ。

「うーん……バトルしたのは覚えてるけど……本当に僕、凄い力を出したの？」

再び首を傾げるピース。ヘルとの戦闘時に出したあの力の事は覚えてないようだ。ジグザグマはピースの問いに、出したぞと言いな

がら頷いた。

「お邪魔するわよ〜」

その時、病院に三人のポケモンが入ってきた。ガルーラにジグザグマの兄であるマッスグマ、そしてザングースだ。

マッスグマとザングースは怪我の手当てをしてもらったばかりのようで、身体中に包帯が巻かれている。ザングースは足に怪我をしてしまったようで、松葉杖を使っている。

「あつガルーラおばさん！ それにジグザグマの兄さんにザングースさんも！」

「ようピース！ 元気になったみたいだな」

右手を上げ、軽く挨拶するマッスグマ。

「兄ちゃん、もう身体は大丈夫なの？」

「おう！ もうすっかり良くなったぜ！ ほら、この通り！」

良くなったとアピールする為に、マッスグマはマッスルポーズをする。

「な〜に言ってるんだい？ 手当てしてる時なんか、痛い痛い！
って叫んで泣きそうになってたくせに」

そう言ってガルーラは、マッスグマの背中をポンと叩く。

「ぐっ！？ お、おばさん、加減してくれよ……」

「どうやらまだ治ってないようだ。痛みで泣きそうになっているマッスグマ。」

「弟の前でカツコつけようとするからだ」

呆れた表情を浮かべるザングース。

「あっそうそう。ピースちゃん、さっきレジギガス様が目を覚ましたんだけど、ピースちゃんの事を呼んでたわよ？」

「えっレジギガス様が？ 何だろ？」

「解らないけど、私達が、ピースちゃんが不思議な力でヘルを追い返したって事をレジギガス様に話したら、急にピースちゃんを呼んでくれてってレジギガス様が言い出してね。とにかく、レジギガス様が待ってるから行った方が良いわよ」

「うん、解った」

ピースは病室から出て、レジギガスがいる特別な病室に向かった……のだが、またすぐにガルーラ達の所へ戻ってきてしまった。

「レジギガス様がいる病室って……何処？」

『がくっ！？』

皆、レジギガスがいる場所をピースは知ってると思っていたので、今の質問を聞いて思わずその場で転けてしまった。

「ピ、ピース……レジギガス様がこの病院に入れる病室は一つしかないだろうが」

「だから何処？」

『目の前のあれ』

ジグザグマ達が指した方向、そこはピースが寝ていた病室を出てすぐ目の前にある巨大な扉だった。

「あっあれか。じゃあ行つてきまゝす」

ピースは今度こそ、レジギガスがいる病室に向かった。

「失礼します」

ピースはレジギガスがいる病室に入った。

病室の中では、レジギガスが病院の医者であるハピナスとラッキーに看病してもらっていた。

「……来たか。ハピナス、ラッキー、すまないが二人だけにしてくれぬか？」

「解りました」

ハピナスとラッキーは病室から出ていった。

病室にはピースとレジギガスの二人だけだ。

「あの、レジギガス様、話とは？」

今までレジギガスと二人だけで話した事がないピースはかなり緊張していた。

「……そんなに緊張する事はない。普段通りで良いぞ」

ピースが緊張している事を見抜いたレジギガスは、優しい口調でそう言った。

「は、はあ……」

「……ガルーラ達から聞いたぞ。ヘルを追い返したそうだな？」

レジギガスの問いに、ピースは頷いて応えた。

「あの時は必死でしたから」

「……そなたに頼みがある。ヘルを追い返す事が出来たそなたにしか頼めない事だ」

「頼み、ですか？」

まさかレジギガスから頼み事をされるとは思ってもみなかったの
で、驚いているピース。

「……ヘルから、ノーマル・オーブを取り返してほしい」

「……ええー！？」

ヘルからノーマル・オーブを取り返す……当然ピースはこの頼みを聞いて驚く。

「ちよつ！？ ちよつと待ってくださいよ！？ 何で僕なんですか？ ザングースさんやマツスグマさんの方が……」

「……そなたも知っているだろう。あの者達は怪我をして、満足に動けぬ状態……他の者も国の復興の為、離れる訳にはいかぬのだ」

「そ、それはそうですけど……でも、何で僕が……」

納得がいかないピース。

「……そなたなら出来る、ヘルを退ける事が出来たそなたなら……頼む」

レジギガスが頭を下げて、ピースに頼んだ。

ピースはしばらく悩み、考えた……レジギガスの頼みを受けるか受けないかを。

「……解りました、やってみます」

ピースはレジギガスの頼みを引き受ける事にした。

「待った待った待ったー！」

いきなり大きな声を上げて一人のポケモンが病室に入ってきた。ピースの親友、ジグザグマだ。

「ジグザグマ!？」

「レジギガス様！ 俺もピースと一緒に行かせてください！」

どうやら今までの会話をジグザグマは盗み聞きしていたらしい。

自分もピースと一緒に行かせてほしいとレジギガスに頼むジグザグマ。

「……これは遊びに行くのではないのだぞ？」

「んな事は解ってます。ただ、俺はピースを一人で行かせるなんて事は出来ません！ こいつ、こつ見えて寂しがり屋で、俺と一緒にいなきゃ何も出来ないんです……だから、お願いです！ 俺もこつと一緒に行かせてください！」

深く頭を下げて、お願いするジグザグマ。

「……仕方ない、良いだろう」

ピースと一緒に行く事を許可したレジギガス。

「ありがとうございます！」

「ちょっとジグザグマ、本当に良いの？ 凄く危険な旅になるんだよ？」

「親友のお前を、一人に出来るかってんだよ」

笑顔でジグザグマは言った。

「ジグザグマ……」

ジグザグマの気持ちが嬉しいピースは、思わず涙を流してしまっ
た。

「泣くなよ。さあ、そうと決まったら早速出発の準備をしようぜ！」

「……うん！」

ピースとジグザグマは、出発する準備をする為、一度自分の家に
戻る事にした。

「……これで良しっ！」

自宅に戻ったピースは、ショルダーバッグに最低限必要な物を入
れた。準備が出来たピースはショルダーバッグを肩に掛け、家から

出ようとした。

「ピース……本当に行ってしまうの？」

その時、ピースを呼び止めたのは彼の母親だ。母親もピースと同じイブイである。

「うん……レジガス様と約束しちゃったし、ジグザグマが待つてるから……」

「……絶対、無事に帰ってきなさいね」

「解ったよ。じゃあ……行ってきます！」

母親と別れを告げたピースは、ジグザグマと待ち合わせを約束した場所に向かって走り出した。

「おっ来たか！ 遅いぞピース！」

約束した場所にはすでにジグザグマがやってきていた。そしてザングース、マツグマ、ガルーラが見送りにやってきていた。

「ごめんジグザグマ」

「ピースちゃん、これ店の商品の売れ残りだけど……良かったら貰っておくれ」

ガルーラがピースに、体力を回復してくれるオレンの実やオボンの実、そして身体の悪い状態を治してくれるラムの実をピースのシヨルダーバッグに入れた。

「ありがとうガルーラおばさん」

「これ位しか出来なくてごめんね……」

「うんうん、充分だよ」

笑顔で言うピース。

「ジグ、これを持っていきな」

マツグマがジグザグマに小さな宝玉のような物を渡した。

「これは？」

「命の玉だ。いざという時に使え。きっとバトルで役にたつ筈だ」

命の玉、それは自分の体力を消費する代わりに技の威力を高めてくれる道具なのだ。

「解った、ありがとう兄ちゃん」

ジグザグマは自分が待っているリュックに命の玉を入れた。

「じゃあ、そろそろ行くかピース」

「うん……だけど、一体何処に行くの？」

「まずは雷の国へ行った方が良い。彼処なら、ヘルに関しての情報が手に入る筈だ」

雷の国、そこは電気タイプが暮らす国で、全ての国の中で一番技術が発展している国なのだ。

まずそこに行くようにと、ザンゲースがアドバイスした。

「解ったよザンゲースさん。じゃあピース、まずは雷の国目指して出発だ！」

「うん！ ガルーラおばさん、ザンゲースさんにジグザグマの兄さん……行ってきます！」

ピースとジグザグマは、ガルーラ達に別れを告げ、雷の国目指して出発した。

第4話 旅立ち（後書き）

ピース

「ついに旅立ちですか……寂しいよ」（泣）「

もうホームシック？（汗）

ピース

「相方がジグザグマってところが」（泣）「

ジグザグマ

「おい（怒）「

まあまあ（汗）

ピース

「雷の国って一体どんな所なんです？」

うーん……いろいろ最新の機械があったり……いわゆる未来都市ってやつかな？

第5話 未来都市、雷の国（前書き）

ピース

「アス力先輩達に続けて連続投稿ですね」

思ってたよりも早く執筆出来たよ。

ピース

「今回は雷の国ですか」

あっそうだ。

もしかしたら雷をかみなりって読んでる読者さんがいるかもしれないですが、これ実はいかずちです。

ピース

「かみなりじゃないんですか!？」

……かみなりって読んでたの？

ピース

「だって、一般的にかみなりって読むでしょ？」

まあ確かにね（汗）

最初僕もかみなりにしようと思ってたけど、いかずちの方が格好良
いかなあって思ってね（笑）

ピース

「あっそうですか（汗）」

第5話 未来都市、雷の国

ミュウツリーのヘルに奪われてしまった、ノーマル・オーブ。それを取り返す為に、ノーマルの国の王、レジガスに頼まれ旅立つ事になったイーブイのピース、そしてピースの親友ジグザグマ。

今彼らが向かっているのは雷の国と言われる、電気タイプのポケモン達が暮らす国だ。

そこは他国よりも技術が発達していて、いわば未来都市なのだ。そして、様々な情報が集まる場所でもある。

そんな雷の国で、ピースとジグザグマはヘルに関しての情報を得ようとしていたのだ。

「いや〜しかし良い天気だよな　　雲一つない快晴で、太陽の光が気持ち良いし」

雷の国へ向かう道中、気持ち良い天気にご機嫌なジグザグマ。

「ジグザグマ、これはピクニックじゃないんだよ？　ヘルに奪われたノーマル・オーブを取り返す為の旅なんだからね！」

まるで緊張感が無いジグザグマに少し怒りを覚えたピースは思わず怒鳴ってしまった。

「解ってるさピース。だけどよ、そのヘルはまだ見つからない。それに、ずっと張り詰めていたら身体が持たないぜ？　リラックス

出来る時にはリラックスしとかないとさ！ な〜んて、これはいつも兄ちゃんが言ってた事なんだけどさ」

笑顔で兄であるマツグマの教えをピースに言うジグザグマ。

「リラックス出来る時にはリラックス……確かに、ずっと緊張してたら身体が持たないよね。ごめんねジグザグマ、怒鳴ったりなんかして」

頭を下げ、ジグザグマに謝るピース。

「気にすんなよピース。ほら、雷の国まであと少しの筈だ。行こうぜ」

「うん！」

ピースとジグザグマは雷の国目指して走り出した。

それからしばらくして、ようやく二人は雷の国への入り口である門にたどり着いた。

「やっと着いたね」

「だな。よし、早速中に入ろうぜ」

二人は雷の国へ入ろうとした。

「ちょっと待った！ 君達、この雷の国者ではないな？」

二人が入ろうとしたところに一人のポケモンが立ちはだかった。

まるでUFOのような姿をしたそのポケモンはジバコイルだ。この雷の国の出入り口を守るガードマンのようだ。

「えっあ、はい。僕達は……」

「悪いが雷の国者でないのであれば、入国を許す訳にはいかない」

ピースが自分達の事を説明しようとしたが、ジバコイルは最後まで説明を聞かず、入国出来ないと言いながらピース達を追い出そうとした。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！？ 俺達は雷の国に入らないといけないんだよ！」

「悪いがそれは認められない。ノーマルの国でオーブが盗まれたという事件が起きているからな。我が国でもオーブが盗まれる危険性がある。よってこの国の者でない者を入れる訳にはいかないのだ……」

…もしこれ以上君達が抵抗すると言つのであれば、実力行使で君達を追い出させてもらう」

身体から電気をバチバチと放出し、ピース達を威嚇するジバコイル。

「わ、解ったよ！ 行くぞ、ピース」

「えっでも……」

「良いから！ 攻撃されたくないだろ？」

「……解った」

ピースとジグザグマは仕方なく門から離れていった。

門から少し離れた場所にある草原にやって来たピース達はこれからどうしようか考え込んでいた。

「どうしようジグザグマ……このままじゃ、雷の国に入れないうよ」

「……こうなったら、ジバコイルに気づかれないように忍び込んで……」

ジグザグマは不法入国しようと考えているようだ。

「ダ、ダメだよそんなの!? 僕達捕まっちゃっよ!?」

慌てた様子でそれはダメだと言うピース。

「じよ、冗談だよ冗談。そんなに大きな声出すなよ」

ジグザグマは苦笑いする。その後、二人はいろいろと考えたが結局何も思いつかず、時間だけが過ぎていった。

「イヤッホー」

『ん?』

二人が途方に暮れていた時、突然何処からか声が。二人は声が聞こえてきた方に振り向く。

そこには、何やらスケートボードのような物に乗り、気持ち良さそうに滑っている、体色が黄色で雷をイメージさせるような尻尾を持ち、頬には赤色の電気袋を持ったネズミのようなポケモン、ピカチュウがいた。

ピカチュウはピース達に向かって滑ってきた。

「よつとー!」

ピカチュウはボードから飛び降り、ピース達の前に着地した。良く見ると、そのピカチュウはゴーグルをしていて、首には青いスカーフを巻いている。

「は〜気持ち良かった〜 我ながら、なかなか良く出来たなこれ

」

満足そうな笑みを浮かべながら自分が乗っていたボードを見つめるピカチュウ。そんなピカチュウをポカンとした表情で見つめるピースとジグザグマ。そんなピース達に、ピカチュウが気づいた。

「ん？ 君達、いつからそこに？」

『ずっといたよ！？』

声を揃えてピカチュウにツツコム二人。

「と、ところでそれは一体なんなんですか？」

ピースはピカチュウが持っているボードを見つめながら質問した。

「あゝこれ？ これは僕が作ったスケートボードの改造版さ。」

自慢気に言うピカチュウ。良く見るとそのスケートボード、車輪が付いてなかった。

「車輪が付いてないのに、どうやって滑ってたんだ？」

首を傾げながら、質問するジグザグマ。

「あゝそれは簡単さ。ここを見てみてよ。」

ピカチュウはボードの裏側をピース達に見せた。なにやら黒い物が二つ付いていた。

「このボードはね、僕の電気を使って浮く事が出来るんだ。僕が身

体の電気を軽く放出すると、ここの黒い部分から磁力が出るんだ。まあ、もの凄く簡単に言えば、ポケモンの技である電磁浮遊がこのボードで出来るんだよ」

ボードの事をピース達に簡単に説明したピカチュウ。

「……凄い」

目をキラキラとさせて、感動しているピース。

「ははは、これくらいで感動してちゃダメだよ。雷の国ではもっと凄い物がたくさんあるんだからね！」

「そうなんだ！ 見てみたいな」

「だったら見に行こうよ。僕が案内してあげるからさ」

ピカチュウが雷の国を案内を買って出た。

「嬉しいけど、俺達雷の国には入れないみたいなんだ。さっきガードマンに追い出されちゃったし……」

「あゝジバコイルね？ 大丈夫、僕と一緒にいれば入れてもらえるよ」

入れてもらえる。その言葉を聞いてピース達は驚きの表情を浮かべた。

「本当！？」

「本当だよ。ほら、早速行こうよ」

ピカチュウはボードを背中に背負って、ジバコイルがいる門に向かっていった。ピース達も慌ててあとを追いかける。

再びピース達は門にやって来た。やはりそこにはガードマンのジバコイルがいた。

「また来たのかお前達！ さっきも言ったが、この雷の国には……」

「まあまあ、そう堅いこと言わないでよジバコイル。彼らは僕の友達なんだ」

ジバコイルとピース達の間でピカチュウが割って入った。

「あっテイル坊ちゃん！ いやしかし……」

困った表情を浮かべるジバコイル。このピカチュウ、テイルというようだ。

「頼むよジバコイル」

両手を合わせてジバコイルに頼み込むピカチュウのテイル。

「……はあ、仕方ありませんね……今回だけですよ？ 次また別の方々を連れてこられても、私は通しませんからね。ブロックロボッ

ト、来てくれ」

ジバコイルが叫ぶと、何処からか四角い形をしたブロックみたいなロボットがピース達の所へやってきた。

「な、なんだこいつ!？」

見た事がないブロックロボットに驚いているジグザグマ。

「そんなに驚かなくて良いよ。これはブロックロボット。ジバコイルみたいにこの雷の国を守っているんだ。それより、二人共笑顔を作って」

「笑顔ですか？」

「良いから早く」

ピース達は訳が解らなかつたが、とりあえず笑顔を作つた。すると、ブロックロボットの身体の一部がパカッと開いた。中からカメラが飛び出した。

「ハイ、チーズ!」

ブロックロボットがそう言った刹那^{せつな}、カメラのシャッターが切られ、眩しいフラッシュが発せられた。

「カメラ……だよね、今の」

「カメラ……だな」

しばらくすると、ブロックロボットが二枚のカードをピースとジグザグマに渡した。

「ご苦労様ブロックロボット、もう良いぞ」

ジバコイルがそう言うと、ブロックロボットはその場から去っていった。

「あの、このカードはなんですか？ 僕達の写真が載ってるみたいですけど……」

「それはパスポートだよ。この国では、そのパスポートが無いと自由には動けないからね。ありがとうねジバコイル」

笑顔でジバコイルにお礼を言うティル。

「さっ行くよ二人共」

「あっうん」

ピース達はティルと一緒に雷の国へようやく入国する事が出来た。

「うわ〜！ 凄い！」

雷の国へ入国して早速ピースは驚きの声を上げた。国内には、先程のブロックロボット以外にも様々なロボットが存在していたり、

動く歩道があったりと、ノーマルの国では絶対見る事が出来ない光景が雷の国にはあったのだ。

「あっそういえばまだ君達の名前を聞いてなかったね？」

「僕はイーブイのピースって言います」

「俺はジグザグマだ」

テイルに改めて挨拶した二人。

「僕の名前はさっきジバコイルが言ってたけど、僕はテイルって言うんだ。よろしくねピース君、ジグザグマ君」

テイルも改めて挨拶をする。

「さて、早速案内してあげたいんだけど、パスポートの発行が思ってたよりも時間が掛かって、もうこんな時間だし僕の家に来るかい？ 今日親とか誰もいないから、泊めてあげられるけど」

テイルはピース達を自分の家に泊めてくれるみたいだ。

「えっ良いの!？」

「もちろんだよ」

「でもテイル、初対面の僕達になんでこんなに親切にしてくれるの？」

首を傾げながら、テイルに質問するピース。

「うーん……何故かは解らないけど、ピース君を見てるとなんか力を貸してあげたいって思っちゃうんだよね」

ティルは自分でもピース達に親切に接する理由があまり良く解らないらしい。

「ほら、僕の家はあっちだよ。早く行こう」

「うん」

ピース達はティルと一緒に彼が住む家に向かった。

『家であつ！？』

ティルの家の前まで来たピースとジグザグマ。ティルの家はとても大きな大豪邸だった。

「テイル、君つてもしかしてお金持ち？」

「まあね。僕の親が発明家でね、この国のロボットや動く歩道なんかも僕の親が開発したんだ。さあ、僕の家の入り口はここだよ」

そう言って、テイルはある場所に立った。

テイルが立っている場所の足下には丸いパネルがあった。

「ここって……扉も何も無いじゃんかよ」

「良いからおいでよ」

訳が解らないピース達だが、テイルの言う通り丸いパネルの所へ。

「動かないですよ。ワープパネル、起動」

テイルがそう言った刹那、丸いパネルが光り輝きだした。そして光は一気に強くなり、ピース達を包み込んだ。

「はい到着だよ二人共」

『……何、今の？』

ポカンとした表情を浮かべる二人。そして気がついたらピース達は部屋の中にいた。

「あれはワイプパネル。まあ簡単に言えば、あの場所からテレポータルして家の中にやって来たんだよ」

簡単な説明をすると、テイルは背中に背負っていたボードと、付けていたゴーグルとスカーフをテーブルに置いた。

「なんか……雷の国って凄いやな」

「……そうだね」

最新技術を目の当たりにして圧倒されっぱなしのピースとジグザグマであった。

第5話 未来都市、雷の国（後書き）

ピース

「雷の国ってハイテクですね！」

一応雷の国は、劇場版ポケットモンスターアドバンス・ジェネレーション、裂空の訪問者 デオキシスに登場するラルースシティを参考にしたんだよね。

ピース

「あゝ通りでブロックロボットとか映画で見覚えがあるやつが」

テイル

「この小説では、僕の親が開発したって設定になってるけどね」

おっ新キャラのテイル君じゃないか。

テイル

「ピカチュウのテイルだよ。某タケシ風のピカチュウとは違うからよろしくね」

ちよつとトゲのある言い方だね（汗）

テイル

「趣味はメカの開発とか、あとはスケートボードかな」

彼、超が付く程のメカオタクです（笑）

テイル

「オタクとは失礼な！ メカが大好きなだけだよ」

どう違うのやら（汗）

テイル

「さて、ちょっとアバに行つて買い物でも……」

聖地っすか（汗）

第6話 情報探し、雷の国に迫る影

ノーマル・オーブを奪ったヘルの情報を求め、雷の国にやってきたピースとジグザグマ。

途中、ガードマンのジバコイルに入国を拒否されてしまったが、雷の国出身のテイルの協力で無事に入国する事が出来た。そして今彼らは、テイルの家に泊めてもらっていた。

ピース達が雷の国にやってきてから翌日の朝。

「……うーん……良く寝た……」

ベッドで寝ていたピースが目を覚ました。しかし、起きたばかりのせいかまだ目がとろんとしている。

「……俺のリンゴ……ムニヤムニヤ……」

ピースの隣にはまだ気持ち良さそうに寝ているジグザグマがいた。夢の中でリンゴを食べているのであろうか、口からはだらしなく涎よだれを出している。

そんなジグザグマを見て、思わず苦笑いを浮かべてしまうピース。

「やあ、おはようピース君」

その時、部屋の奥からテイルがやって来た。

右手でマグカップを持って、コーヒーを飲んでいる。

「あっおはようテイル」

「あれ？ 彼はまだ寝てるのかい？」

気持ち良さそうに寝ているジグザグマを見ながら、テイルは質問した。

「うん。ジグザグマって朝早く起きれないタイプなんだよね」

苦笑いを浮かべながら言うピース。

「そうなんだ……あっ君もコーヒー飲む？ それともミルクが良い？」

「あっじゃあミルクをお願いして良いかな？」

「解った。じゃあ用意するから、リビングで待っていてくれる？」

「うん解った」

頷きながら答え、ピースはリビングへ向かった。

「はいお待ちせ〜」

それからしばらくして、ミルクが入った器うつわを持ってリビングにやってきたテイル。

器にしたのは、四足のピースではマグカップを握れないからである。

ピースの前にミルクが入った器を置くテイル。

「ありがとうございます。じゃ、いただきます」

ミルクに口を付けて、ゆっくりと飲み始めるピース。

「あっそういえば、まだピース君達がこの雷の国に来た理由を聞いてなかったね？」

コーヒを一口飲んだ後、ピースにこの国に来た理由を質問するテイル。

「そういえばそうだったね。実は……」

ピースは自分とジグザグマがノーマルの国出身である事、ヘルと名乗るミュウツにノーマル・オーブを奪われてしまった事、ノーマル・オーブを取り返す為に旅に出た事、そしてこの雷の国へはヘルに関する情報を探す為に来た事、全てをテイルに説明した。

「……ネットでもノーマルの国でオーブが奪われたってニュースが流れてたけど……本当だったんだね」

「ネット？」

ピースはテイルが言ったネットという言葉が気になったらしく、首を傾げる。

「あれ？ インターネットの事知らないの？」

テイルの問いに、ピースは頷いて応えた。

ノーマルの国は雷の国程技術が発展していない為、インターネットが存在していないのだ。

「インターネットっていうのは……あゝ言葉で説明するより実際に見た方が早いね。ちょっと僕の部屋についてきて」

「あっうん」

ピースはテイルと一緒に彼の部屋へ。

「……うわゝ……なんか機械がいっぱいあるね……」

ピースはテイルの部屋を見回しながらそう言った。

「これ全部、僕が作った物なんだ。さてっと……」

テイルは部屋に用意してある椅子に腰掛ける。

「音声認識、テイルロボット起動」

テイルがそう言うと、部屋に置いてある機械の一つが動き出し、テイルの前にやって来た。

見た目はブロックロボットと同じだ。

「これはブロックロボットを改造した僕だけのロボットなんだ。テイルロボット、ネットに接続してくれ」

テイルがそう指示すると、ロボットからモニターが出て来た。

「まずは、最近起きた事件を表示して」

テイルがそう言うと、画面にはノーマルの国で起きた事が表示された。

「凄い！」

目をキラキラさせて感動しているピース。

「これがインターネット。現地になくても、各国で起きた事なんかもこれで調べられるんだ」

「へ〜！ あっじゃあヘルに関しても何か解るかな？」

「ちょっと待ってて……検索、ヘル」

テイルがそう言うと、ロボットがヘルについて検索し始めた。

「……おっ検索ヒット！ ヘル、ノーマルの国に現れ、オーブを奪った謎のポケモン……ってこれだけ？」

ヒット件数の少なさに首を傾げるテイル。

「テイル、他には無いの？」

「うーん……あっねえピース、そのヘルってポケモンのタイプは解るっ？」

「えっ？ うーん…… そういえば、翼も無いのに空を飛んでたよう
な…… あとはサイコキネシスとか使って……」

テイルの問いに答えるピース。

「……もしかしたらエスパータイプかも……ならこれでヒットする
かも。 検索、超の国、ヘル」

再びロボットが検索を始めた。

「……えっアクセス拒否？」

どういふ訳かアクセスが出来ないようだ。

「なんでアクセス出来ないの？」

「どうやら、世間には公おおやけにしたくない事情があるみたいだね。 セキ
ユリティーシステムでしっかりガードしてるよ」

「じゃあヘルに関しては何も解らないの？」

少し困った表情をしながらピースは言った。

「……いや、僕一人じゃ無理だけど、僕の親友の力を借りれば調べ
られるかもしれない」

腕組みをしながらテイルは言った。

「テレフォンスシステム起動、リックに繋げて」

テイルがそう言うと、今までアクセス拒否と表示された画面が消え、ロボットからは電話を掛ける時に聴こえるコール音が。

「これ電話にもなるの!？」

思わず叫んでしまったピース。

「僕が作ったロボットだからね。いろんな機能があるよ」

笑顔で答えるテイル。

その時、コール音が消え、画面にあるポケモンが映し出された。姿は少し子供のライオンに近く、体色は青と黒、尻尾の先が星のような形をしているそのポケモンはコリンクと呼ばれるポケモンだ。

『おーテイルじゃん! どうしたんだ、こんな朝早くに?』

「やあリック。ちょっと君に協力してほしい事があってね」

テイルは笑顔でコリンク、リックにそう言う。

『テイルが頼み事って事は……ハッキングか?』

リックの問いに、テイルは頷いて応えた。

「今日会える?」

『もちろんだ! じゃあ準備して待つてるからな!』

「解ったよ」

二人の会話が終わると、通信が切れた。

「よし、じゃあ行こうかピース君」

「今のリックっていうポケモンの所？」

「そうだよ。リックとなら、さっきの見れなかった情報が見れるから」

「解った。じゃあ僕ジグザグマを起こしてくるね」

ピースはジグザグマが寝ている部屋に向かった。

「ジグザグマー！ 起きて、出掛けるよ！」

「……………く……………く……………」

大きな声でピースは叫んだが、ジグザグマは全く起きる気配が無い。

「なら…………ジグザグマ、起きないならこのリンゴ食べちゃっよ？」

「リンゴ…?」

リンゴという言葉聞いた途端、飛び上がって目を覚ましたジグザグマ。

「リンゴ！ 俺のリンゴは何処だ？」

辺りをキョロキョロとしながらリンゴを探すジグザグマ。余程リンゴを食べたいのか、口からは涎が。

「本当に食いしん坊さんなんだからジグザグマは……」

苦笑いを浮かべるピースであった。

ジグザグマを起こした後、ピースはテイルと一緒に彼の親友であるリックの家に向かっていた。

今は三人揃って動く歩道に乗っている。

「……って事なんだ」

「なるほど。んで、その見れなかった情報を見る為に、テイルの親友の家に向かっているって事か」

動く歩道に乗っている最中に、ピースはジグザグマに今何処に向かっているのかを説明していた。説明を聞いたジグザグマは納得したのか頷いている。

「二人共、そろそろ降りるよ」

テイルに言われ、ピース達は動く歩道から降りた。

「ここにリックが住んでるんだよ」

テイルが指す先には大きなマンションが建っていた。

「ここにパスポートを置いて」

テイルはマンションの入り口にある機械を指した。テイルはもちろん、ピースとジグザグマもその機械にパスポートを置く。

「……パスポート認証……認証を確認。どうぞお入り下さい」

マンションの扉が開いた。

『凄い』

目をキラキラさせて感動しているピースとジグザグマ。

「さあ、行くよ。リックはこのマンションの最上階の五十階に住んでるんだ」

テイルとピース達はマンションの中へ。だが、中には上に登る為

のエレベーターも無ければ階段もなかった。

「あれ？　ねえテイル、どうやって上に登るの？」

「あれだよ」

テイルが指す先にはあのワープパネルが。

「二人共乗って」

テイルと一緒にワープパネルに乗るピース達。

「ワープパネル起動。五十階へ」

テイルがそう言うと、ワープパネルが強く光り輝き出した。その光はピース達を包み込む。

「はい到着」

ピース達はあっという間に五十階に到着した。
ピース達の前には、ワープする時には無かった大きな扉が。

「あの扉の向こうにリックが？」

「そうだよ。さあ、行くよ」

ピース達は扉の前へ向かった。そしてテイルは扉の横にあったボタンを押す。刹那、辺りにベルの音が鳴り響いた。しばらくすると、扉が開いた。

「リックくお邪魔するよ」

「おーこっちだテイル！ もう準備出来てるぜ！」

部屋の奥からひょっこりとリックが現れた。

「おや？ そっちの二人は見ない顔だな？」

「僕の新しい友達さ。こっちはピース君でそっちはジグザグマ君」

テイルが二人をリックに紹介する。

「初めまして、イーブイのピースです」

「ジグザグマだ」

二人は軽く挨拶する。

「俺はコリンクのリックだ。よろしくなお二人さん。テイル、早速始めるか？」

「もちろんだよ」

頷きながらテイルがそう答えると、リックと一緒に奥の方へと歩き出した。ピースとジグザグマも二人を追いかける。

「うわっここも機械がいっぱいだ」

奥のリックの部屋は、テイルの部屋と同じ位に機械がたくさん置いてあった。それを見てピースは思わず声を上げる。

「リックも僕と同じでメカを弄いじるのが好きだね。いろんなメカを發明したりするんだよ」

「テイル程凄いのは作れないけどな。そんじゃ、早速始めようぜ！」

「オッケー！」

テイルとリックは部屋に用意されていた少し大きめのパソコンの前へ座る。そしてリックは徐に、パソコンの近くに置いてあったヘルメットのような物を頭に被る。

テイルはキーボードを自分の前に持ってくる。

「リック、その被ってるのは何？」

ピースがリックに質問した。

「これを被る事で、コンピューターを操作出来るのさ。俺やお前のように四足だと、テイルが使ってるキーボードを打てないだろ？
だけど、これを被れば……画面を見てなよ」

リックに言われ、ピースはパソコン画面を見る。すると、画面に文字がどんどん打ち込まれていく。もちろんテイルは何もしていない。

「こんな感じに、自分が考えた事をこれを読み取って、操作出来るのさ。俺とテイルの合作だ！」

ヘルメットを指しながら自慢気に言うリック。

「へへ凄いな」

「リック。そろそろ始めようよ」

「おゝ悪い悪いテイル。そんじゃ、行くぜ！」

リックがそう言うと、テイルはもの凄いスピードでキーボードを打ち込み始めた。そしてリックも意識を集中する。

パソコン画面には様々な画像が次々と映し出されていく。

その時、雷の国の門がある場所で……

「くっ……」

「ふん、相手にならないな。ハイテク技術を誇る雷の国が発明したロボットも、国を守るガードマンもこの程度か」

ジバコイルとブロックロボットが数体倒れていた。そして、倒れているジバコイル達を冷たい眼差しで見つめるのはあのヘルだ。

「この国のオーブはもらうぞ」

そう言ってヘルはもの凄いスピードでその場を飛び去り、雷の国へ侵入した。

「……不覚……」

ジバコイルはそのまま気を失ってしまった。

その頃、雷の国の中心に聳え立つ巨大タワーでは騒ぎが起きていた。このタワーは雷の国全てのブロックロボットなどの機械を管理している、いわば雷の国の心臓部なのだ。そして、雷の国を治める王が住む場所でもある。

「第一、第二ブロックロボットの反応が消えたぞ!? どうなっている!」

「解りません! 近辺にいたジバコイルとも連絡が取れません!」

ここで働いているエレキブルやデンリュウなどの電気タイプのポケモン達が慌ただしく動いている。

「どうした? 何があったんだ?」

その時、一人のポケモンが制御室に入ってきた。そのポケモンは全身が黄色い羽毛に包まれていて、翼や尾の先は鋭く尖っており、嘴は長く伸びているとても大きな鳥のようなポケモン、サンダーだった。

「サンダー様! 突然ブロックロボットの反応が数体消えてしまっただんです!」

エレキブルがサンダーに現状を報告した。

「反応が消えただと? なら、その消えたブロックロボットが最後に見た映像をスクリーンに映せ。それで何があったのかが解る!」

「解りました。映像、出ます!」

デンリュウがコンピュータを操作して、制御室にある巨大スクリーンに壊されたブロックロボットが見た映像が映し出された。その映像には今まさに攻撃しようとしているヘルの姿が。

「こいつは！？ あのノーマルの国を襲ったヘル！？」

思わず声を上げてしまったエレキブル。

「……やはり来たか。恐らく奴は真つ直ぐこつちに向かって来るだろつ……デンリュウ、国民達を避難させる為に警報を鳴らせ」

「は、はい！」

デンリュウは目の前にあった赤いボタンを押す。すると、国中に警報音が鳴り響いた。

「さて、俺は屋上で奴を迎え撃つとするか……エレキブル、屋上にライチュウを連れてきてくれ。屋上にあるあの装置を動かせるのは彼だけだからな」

「わ、解りました！」

エレキブルは制御室から出て行った。そしてサンダーはタワーの屋上へと向かった。

第6話 情報探し、雷の国に迫る影（後書き）

ピース

「ヘルが！」

来たね（笑）

ジグザグマ

「笑ってる場合じゃねえっての!？」

ピース

「あっそういえば、途中超の国って名前が出ましたよね？ あれってエスパータイプのポケモンが集まった国ですか？」

ご名答。

ポケモンカードでは、エスパーを越って言うでしょ？ それを参考に……

ジグザグマ

「そういえばカードでは超だったな」

ピース

「次話ではサンダーとヘルがバトルですか？」

その予定。

ジグザグマ

「俺達はヘルの情報を掴めるのか？」

秘密(笑)

第7話 サンダーVSヘル！（前書き）

ピース

「サンダーとヘルが戦うんですね！」

その通り。

あっそういえば……おいテイル〜！

テイル

「は〜い！」

ピース

「あっあのボードに乗ってやってきた！」

テイル

「作者さん、何の用？」

いやね、君が乗ってるそれ。まだ名前が明かされてないからさ。丁度良いからこの場で言ってもらおうかなって思ってたさ。

テイル

「あ〜そういえばそうでしたね。これはサンダーボルト。僕が流す電気エネルギーの量によっては、空を飛べたりも出来ちゃう僕の力作さ」

ピース

「えっこれ飛べるの!?!」

テイル

「もちろん。なんなら、乗せてあげようか？」

ピース

「わっい 乗る乗る」

おっい、これから本編始まるんだからそれは後。乗るんだったら後書きにしなさい。

ピース

「はっい……」

そんなに残念がらないでよ(汗)

第7話 サンダーVSヘル!

ピース達が雷の国で知り合ったポケモン、ピカチュウのテイルとコリンクのリック。この二人に協力してもらい、ヘルについてを調べていたのだが、そのヘルが雷の国に現れてしまう。

ヘルの出現により国中に避難警報が発令され、国民達は避難を始めていた。国民達が避難を始めた時、ピース達はまだリックの家にいた。

「な、なんだよこの音？」

国中に鳴り響く避難警報に気づいたジグザグマはパソコンを操作しているテイル達に聞いた。

「避難警報だよ。何か起きたみたいだね」

キーボードを高速で打ち込みながらテイルは答える。

「避難警報!? だったら、早く俺達も逃げねえとやばいじゃんか!?」

「確かにね……だけど、あと少しでこのセキュリティを突破出来そうなんだ。そしたら、君達を知りたがっているヘルの情報が手に入る。もうちょっと待ってて。リック、ペース上げるよ」

「解ってるぞ」

テイルとリックはハッキングを続けた。

テイル達がハッキングを続けている時、雷の国の中心に聳え立つ
タワーの屋上ではサンダーがヘルを待ち受けていた。

「……ライチュウ、準備は出来てるか？」

タワーの屋上に設置されている大きな機械を弄っているライチュウに聞くサンダー。

「準備万端、いつでもアシスト出来るぞサンダー様」

親指を突き立てて、笑顔で答えるライチュウ。

「……来たみたいだな」

サンダーが見つめる先には、空中に浮かんでいるヘルがいた。ゆったりとサンダー達がいるタワーに向かってくる。

「行くか……アシスト頼むぞライチュウ」

そう言ってサンダーは自分の翼を大きく羽ばたかせ、ヘルの下もとへ向かって飛び立った。

「……お前が王か……この国のオーブ、サンダー・オーブを渡してもらおうか」

「ふっそう言われて、素直に渡すと思うか？」

若干笑みを浮かべながら答えるサンダー。

「……それもそうだな。ならば、力づくで奪うまでだ」

戦闘体勢に入るヘル。

「やれるもんならやってみな。10万ボルト！」

先制したのはサンダーだ。身体から強力な電気を放出、ヘルに向けて放った。

「シャドーボール！」

ヘルは両手を使い、黒いエネルギー弾を作り出し、10万ボルトに向けて放った。二つの技はぶつかり合い、大きな爆発が発生した。しかしその刹那せつな、爆煙の中から新たなシャドーボールが現れた。へ

ルはもう一発シャドーボールを放っていたのだ。
シャドーボールがサンダーに向かっていく。

「鋼の翼！」

サンダーは鋼のように硬くした翼でシャドーボールを攻撃、一刀両断にってしまった。

「この程度の攻撃で俺を倒せると思ったら間違い……」

「その位承知だ」

いつの間にかヘルはサンダーの目の前まで接近していた。

「ストーンエッジ！」

ヘルは周囲にエネルギー弾を作り出した。そのエネルギー弾は鋭く尖った岩に変化、無数の岩がサンダーに襲いかかる。

「高速移動！」

サンダーは高速移動を使い素早く急上昇、回避行動を取る。

「逃がさん！」

ヘルはストーンエッジをコントロールして、サンダーを追尾させる。

サンダーは急降下や急上昇を繰り返して振り切ろうとするが、ストーンエッジは追いかけてくる。

「回避出来ないなら、打ち消してやる！ 雷！」

サンダーは先程の10万ボルトよりもさらに強力な電撃を放った。雷を受けたストーンエッジは粉々に砕け散る。

「もう一発！」

今度はヘルに向かって雷を放つサンダー。

ヘルは焦る事なく、右手を前に翳す。

刹那、ヘルの眼が青く光り輝く。すると、目の前にバリアーのようなエネルギーの壁が出現した。サイコネシスの力でバリアーを作り出したのだ。雷はバリアーに阻まれ、ヘルに直撃する事はなかった。

「サイコカッター！」

雷を防いだ後、ヘルは左手から三日月型のエネルギー波を放った。

「鋼の翼！」

サンダーは再び鋼の翼を使い、サイコカッターを打ち消した。

「ならば、この攻撃はどう対処するかな……シャドーボール」

ヘルは両手を広げ、シャドーボールを十個作り出した。

「そして……サイコネシス！」

ヘルの眼が青く光り輝く。そして、横に広げていた両手を前に翳す。

刹那、十個のシャドーボールが一斉にサンダーに向かって突っ込んでいった。シャドーボール一個一個をサイコキネシスでコントロールしているのだ。

「見切り！」

サンダーは集中力を高め、自らの動体視力を高めた。今のサンダーには向かってくるシャドーボールがスローモーションに見えていく。

サンダーはシャドーボールを次々と回避していく。

「その方法で俺のシャドーボールは避けきれないぞ？ はっ！」

一度回避したシャドーボールが再びサンダーに襲いかかってきた。これもなんとかサンダーは紙一重で回避するが、見切りは長く使う事が出来ない。次第にサンダーの集中力が切れていく。

「このままじゃまずい……なら、放電だ！」

サンダーは身体から電気を放出、周囲全てのシャドーボールに攻撃した。放電がシャドーボールに直撃した瞬間大きな爆発が発生、爆煙がその場に立ち込める。

「……雷！」

爆煙の中からサンダーは強力な雷をヘルに向けて放った。

「くっ波動弾！」

ヘルはとっさに両手で青いエネルギー弾を作り出し、雷に向けて

放った。二つの技はぶつかり合い大きな爆発が発生した。爆発の衝撃波で、ヘルは後方へ吹き飛ばされ、バランスを崩した。

その瞬間をサンダーは見逃さなかった。

「今だライチュウ！」

「了解つと！ プラズマ粒子砲、発射！」

屋上で待機していたライチュウが機械のボタンを押す。すると、機械の隣にある巨大な大砲のような物から強力なレーザーが放たれ、ヘルに向かっていった。

「なっ！？」

レーザーはヘルに直撃し、凄まじい爆発が発生した。辺りに爆煙が立ち込める。

「よっしゃ命中 いや〜にしても凄い威力だなやっぱり。国の電力を半分消費するだけあるわ」

プラズマ粒子砲、これはこのライチュウが開発した兵器。いざという時の為にサンダーが作らせた物で、攻めてきた敵を迎撃する物なのだ。

「確かに凄い威力だが、国の電力を半分消費するんだ。本当はあまり使いたくなくなっただがな……」

サンダーがタワー屋上に着地した。

「そうは言ってもサンダー様、これを使わなきゃあのヘルは倒せな

かっただろ？」

「まあ、確かにそうだが……」

「……勝手に終わらせるな貴様ら……」

爆煙の中から声が。

サンダー達が振り向くと、爆煙の中からヘルが現れた。プラズマ粒子砲が直撃する寸前で、サイコキネシスを使いバリアーを作り出して身を守っていたのだ。

「な、何!？」

プラズマ粒子砲を防がれた事に驚愕しているサンダー。

「……もう遊びは終わりだ……本気でやらせてもらっぞ」

「あゝ!? こんな時に停電かよ!?」

その頃ピース達はまだリックの家にいた。

そして今叫んだのはリック。ハッキング成功まであと一歩というところで、サンダー達が使ったプラズマ粒子砲のせいで停電になってしまったのだ。

「くそっあとちょっとだったのに!」

今までハッキングで失敗した事がなかったリックは相当悔しそうにしている。

「お、おい皆! あれ見てみるよ!」

ジグザグマがピース達を呼んだ。ジグザグマが見つめている先をピース達も見てみる。

そこには、タワー付近でバトルをしているサンダーとヘルの姿が。

「サンダー様が……戦ってる!? 相手は……」

「……ヘル!」

ピースはヘルを見た瞬間険しい表情に変わった。

「あれがヘル……ん? タワーにいるのはもしかして……リック、ちょっと双眼鏡借りるよ」

テイルはリックの部屋にあった双眼鏡を使い、タワーの屋上を見る。

「父さん!？」

テイルは思わず声を上げる。実はあのライチュウ、テイルの父親なのだ。

「何やってんだよ父さんはあんなどこで……ってそれよりも、父さんが危ない! リック、窓開けて!」

リックにそう言った後、テイルは持ってきていた自分のボードに乗る。

「お前!？ まさかそれであのタワーまで飛ぶ気か!？ 無茶だろ!」

「僕が作ったこのサンダーボルトなら、飛べるよ! 良いから早く窓開けて!」

首に掛けていたゴーグルを目につけるテイル。
本気で飛ぶつもりらしい。

「僕も行くよテイル!」

そう言ってピースはテイルの背中にしがみつく。

「解ったよピース君。リック、頼むよ!」

「……あゝもうしゃあねえな! 絶対無理すんじゃないぞ!」

リックは窓を開ける。

「しっかり掴まっててよピース君！ サンダーボルト、出力全開！」

テイルがサンダーボルトに電気を流し、起動させる。そして次の瞬間、テイルとピースを乗せたままサンダーボルトは外に向かつて飛び出した。

「凄い！ 僕達空飛んでるよ！」

「一気に行くよ！ 落ちないでよピース君！」

「うん！」

ピース達はスピードを上げ、サンダー達がいるタワーに向かった。

第7話 サンダーVSヘル！（後書き）

って本編で飛んじやったね（汗）

ピース

「凄かったよ〜空から見える景色って最高だね」

テイル

「でしょ？」

あのね二人共、今大変な場面なの解ってる？（汗）

ピース

「解ってますよ。そういえば、テイルのお父さんって凄いのを発明してるんだね！」

テイル

「父さんは僕以上のメカ好きだからね」

なるほど……親が親なら子も子って事か……プラズマ粒子砲は、ガム
ム
のビームライフルを参考にちよつと考えてみたけど……

ピース

「ねえ作者さん、ヘルからチートの臭いがプンプンするんだけど（汗）
明らかにレジギガス様と戦った時より強くなってるよね？」

あの強さには秘密があるのです。

テイル

「へ〜どんな秘密ですか？」

それ言ったら秘密じゃないじゃん。

ピース

「教えてよ作者さ〜ん」

うっそんなつぶらな瞳で僕を見ないで！
可愛いすぎるから！

〓 〓 () () ()

ピース

「あっ待ってよ〜！」

テイル

「あ〜あ、行っちゃったよ(汗) あっそうだ。次回はピース君と僕
がヘルと戦う事に……なるかもって作者さんが言っていました(汗)

……絶対負ける気がする(汗)」

第8話 ピース&amp;ニールVSヘル！ 秘められしピースの力、覚醒！

ピース

「久しぶりの更新ですね（汗）」

いや〜仕事が忙しくてね（汗）皆夏休みやらお盆休みなのに僕は仕事……なんでなんだ〜（泣）

ピース

「な、泣かないくださいよ作者さん（汗）」

……仕事なんかに負けてたまるか！ 気合いで乗り切ったる！

ピース

「復活早いですね（汗）あの……今回のタイトルって……」

ピースの力が覚醒しちゃうんです（笑）
前編と後編に分けてやっちゃおうよ〜。

ピース

「本当ですか!？」

本当です。

第8話 ピース& amp・ニールVSヘル！ 秘められしピースの力、覚醒！

「くっ……っ、強い……」

雷の国の中心に聳え立つタワーの屋上で、本気を出したヘルに敗れ、倒れているサンダーがいた。

「ふっ…… 凄い力だ…… 身体中から溢れてくる……」

両手を見つめ、自分の力に酔い痴れるヘル。ヘルの身体からは紫色をしたオーラが発せられていた。

「貴様、まさかノーマルの国から奪ったオーブの力を取り込んだのか？」

倒れながらもヘルを睨みつけ、強い口調で言うサンダー。

「そうだ。一個でこれ程の力だ。全てのオーブの力を俺に取り込む事が出来れば……俺は最強になり、世界を地獄に変える事が出来る……ふふふ…… ははははは！……」

狂喜するヘル。

「そんな事…… させるか！」

満身創痍まんしんそつじのサンダーはなんとか立ち上がり、再び戦闘体勢に入る。だが、ダメージが大きいせいか身体が震えている。

「まだ立てたか…… さすがは王だな。だが、もうお前とのバトルは

飽きた……消える」

ヘルは右手を上にかざす。すると、ヘルの頭上に巨大な黒いエネルギー弾が現れた。

それはサンダーより一回りも大きなシャドーボールだ。

「あ、ありやばい！？ サンダー様、逃げて下さい！」

サンダーと共に戦っていたライチュウが逃げるよう叫ぶ。

「遅い！」

ヘルが巨大なシャドーボールをサンダーに向けて放とうとした。

「雷！」

刹那、ヘルの背中に雷が直撃した。

ダメージを受け、集中力が切れてしまった為に巨大なシャドーボールが消滅した。

「くっ！？ 何者だ！」

怒りに満ちた表情をしながらヘルは振り向く。

振り向いた先には、サンダーボルトに乗って空に浮いているティールとピースがいた。

「お前は……あの時のイーブイか！」

「ヘル！ ノーマル・オーブを返してもらおうよ！」

そう言うと、ピースはサンダーボルトから飛び降り、タワーの屋上に着地した。

「ノーマル・オーブを取り戻す為にわざわざ国を出てきたのか？
ご苦労な事だな」

「ノーマルの国だけじゃなく雷の国まで襲って……許さないぞヘル！」

ヘルの悪行に怒り心頭のピース。すると、ピースの身体から白いオーラが発せられた。

「あ、あのオーラは……まさか……」

ピースの白いオーラを見て、驚きの表情を浮かべるサンダー。このピースから発せられるオーラの事を何か知っているようだ。

「ふっ……今回はレジガスとの戦闘で体力を消耗していて仕方なく退散したが……今回はそうはいかないぞ」

戦闘体勢に入るヘル。

「電光石火！」

先に先制したのはピースだ。素早い身の熟^{こな}しでヘルに接近している。

「あつ待つんだピース君！ 父さん、サンダー様と一緒にここから離れて！ 僕達が時間を稼ぐから！」

ライチュウにそう言つとテイルはサンダーボルトに乗ったままピースの援護に向かった。

「サンダー様、今のうちにここから離れましょう!」

「……いや、俺は残る」

何故かサンダーはここに残ると言いだした。

「な、なんで!?!」

「……あのイーブイ……もしかしたらあのヘルを倒すかもしれない」

ヘルと戦うピースの姿を見つめながら、サンダーはそんな事を呟いた。

118

サンダー達が見つめるなか、ピースとテイルはヘルと戦っていた。

「突進!」

電光石火のスピードを了解して、ピースはヘルに突っ込んだ。

「バリアー!」

ヘルは右手を前に翳し、目の前にエネルギーの壁を作り出した。ピースは構わずバリアーに突進する。

「ぐっ!？」

バリアーで防御したヘルだが、ピースの強力な突進はバリアー越しでも充分に衝撃が伝わってきた。

(やはり凄いパワーだ……この小さな身体の何処にこんなパワーが……)

改めてピースの力に驚くヘル。

「……だが、俺を倒すにはまだ甘いな！」

ヘルが左手にエネルギーを集め始めた。

「あれは……コンピューター、分析開始」

テイルは顔に掛けていたゴーグルについている小さなボタンを押す。

このゴーグルはテイルが発明した物で、相手の戦闘力や今相手が使おうとしている技、そして相手の攻撃をどうすれば回避出来るのかなどを速やかに調べる事が出来るハイテクマシンなのだ。

「分析結果、波動弾の確率100%……まずい、ノーマルタイプのピース君には効果抜群だ!? 間に合え、サンダーボルト出力全開！」

テイルはサンダーボルトに強く電気を流し、加速する。

「くられ、波動弾！」

ヘルは左手で作り出した波動弾をピースに向けて放とうとした。

「ピース君！」

「うわっ!？」

ヘルの波動弾が放たれる寸前で、テイルはピースを両手でしっかり掴み、ヘルから離れる。

刹那、ヘルの波動弾が放たれ、空高く飛んでいった。

「た、助かった〜……ありがとうテイル！」

「危なかったねピース君。次からは一人で突っ込まないですよ？ 僕もいるんだからさ」

「う、うん。ごめんねテイル」

申し訳なさそうにして謝るピース。

「飛び回って鬱陶^{うっとう}しいな……撃ち落としてやる！」

ヘルは右手と左手、それぞれで波動弾を作り出し、飛んでいるピース達に向けて連続で放った。

「その程度の攻撃なら、僕のテクで避けられる！ しっかり掴まっ
ててよピース君！」

「わわわ!？」

テイルはまるでサーフィンをするような動きで次々と襲いかかる波動弾を回避していく。

ピースは落ちないように必死にテイルの身体にしがみつく。

「ほう、なかなかやるな。だが……これならどうだ！サイコキネシス！」

ヘルは放った波動弾にサイコキネシスを使い波動弾をコントロール。

テイル達を追尾させる。

「くっ！サンダーボルト、出力全開！」

テイルはサンダーボルトに強い電気を流し込み、波動弾を振り切る為に加速する。だが、何処までも波動弾はしつこく追いかけてくる。

「振り切るのは無理か……だったら打ち消すしかない！雷！」

テイルは追ってくる波動弾に向けて雷を放った。テイルが放った雷は波動弾に直撃する。

だが、ヘルが放った波動弾は強力で、打ち消すどころか雷が押し返されていく。

「くっ僕の攻撃じゃ、打ち消せないのか!？」

ヘルの波動弾がどんどんテイル達に接近してくる。

(このままじゃ二人共やられる……こうなったら!)

何かを決意したテイルは、いきなりピースをサンダーボルトから突き飛ばした。突き飛ばされたピースはタワーの屋上になんとか着地した。

その刹那、ヘルが放った波動弾がテイルに直撃、爆発が発生した。

「テイル!？」

波動弾をまともに受けてしまったテイルはサンダーボルトと共にタワー屋上に落下、身体を強く打ちつけた。

ピースは急いでテイルの所へ駆け寄る。

「テイル! テイルしっかりして!」

「……ううっ……ピ、ピース君……大丈夫かい？」

自分が一番傷ついているにも拘らず、ピースの心配をするテイル。

「僕を助ける為に……ごめん……テイル……」

ピースは思わず涙を流す。

「ふん……仲間を助ける為に自分を犠牲にする……くだ下らないな。そんな事をしてなんになる? なんの得がある?」

「……下らない……だと……? 僕を助ける為に自分を犠牲にしてくれたテイルが下らないだと? ふざけるな!」

ヘルを睨みつけながら怒鳴るピース。刹那、ピースの身体から発せられた白いオーラが黄色に変化した。

「僕はお前を許さない……なんの罪も無いポケモン達を傷つけ、僕の友達をバカにしたお前を……僕は絶対に許さない！」

ピースの身体から発せられた黄色いオーラが色濃くなっていく……そしてピースの身体に変化が起き始めた。

まず体色が茶色から黄色に変化、そしてイーブイの特徴でもあるフサフサとした首の周りや腰の毛が鋭く尖^{とが}っていく。そして体長も一回り大きくなり、そこで変化が終わった。

そこにいたのはイーブイのピースではなく、黄色いオーラを纏^{まと}ったサンダースのピースだ。身体中から電気をバチバチと放出するピース。

「進化しただと!？」

これにはさすがのヘルも驚愕する。いや、ヘルだけじゃない。その場にいたテイルやテイルの父親、ライチュウも驚いていた。だがただ一人、サンダーだけは驚きもせず冷静にしている。

「あ、あのイーブイ、雷の石も無いのに進化したぞ!？」

驚きの声を上げるライチュウ。雷の石とは、イーブイがサンダースに進化する為に必要な特別な道具なのだ。

本来はその石が無ければサンダースにはなれないのだが、ピースは石無しでサンダースに進化したのだ。

「……白きオーラを纏いしポケモン、世界の平和を守る為、七つの姿に変身し、悪を滅ぼす……」

突然サンダーがそのような事を呟いた。

「な、なんですかそれは？」

「古い伝承の一つだ。その昔、世界は滅びの危機に陥った事がある。とある一人のポケモンによってな……そのポケモンと戦い、そして勝ったのが白きオーラを纏いしポケモンだ」

「白きオーラ……まさか、あのイーブイが!？」

「恐らくその子孫だろ……石も無しにサンダースに進化したのがその証拠……まだ子供のようだが、その力は強大だ。あの子なら……へルを倒せる！」

第8話 ピース&テイルVSヘル！ 秘められしピースの力、覚醒！

テイル

「ピースがサンダースになっちゃった!？」

はい、ピースの力が覚醒です。サンダーが語った伝承の通り、白きオーラを纏ったポケモンは七つの姿に変身しちゃうのさっ(笑)

ピース

「……驚きだな」

テイル

「あ、あれ？ ピース君の口調が変わってる(汗)」

それぞれの姿になると口調や性格が変わる事があるのです。

ピース

「……俺はサンダースよりグレイシアが良かったな……」

テイル

「あっそこは変わらないのね(汗)」

まあいつかはグレイシアにさせてあげるよ(汗) 今回のこのピースの能力はポケスペのブイを参考にしています。

ピース

「……みたいだな。それより作者、テイルが付けていたあのゴーグル、ずいぶん凄いな?」

ティル

「そりゃ僕の力作だからね」

あれはいつかアドバンスジェネレーションで放送された作品で、タツベイ使いのトレーナーが使ってた物を参考にしたんだよ。

ティル

「確かその時の話は、空を飛びたい夢を持っているタツベイを中心にしたものだっただよな？　んで、まだその当時はジュカインもキモリだった筈」

その通りです。

ピース

「……良くそのストーリーを覚えていたな？」

伊達にポケモンファンやってませんから（笑）
ってか、なんかピースがその口調なのは違和感が……今だけイーブイに戻って。

ピース

「あつ戻った。やっぱりこの姿が落ち着くな」

やっぱりピースはこれだね

第9話 ピース& a m p・テイルVSヘル！ 秘められしピースの力、覚醒！

ピース

「もう作者さん遅いよ〜！」

ごめんごめんピース（汗）

今度ポフィンあげるから許して（汗）

ピース

「許す〜」

テイル

「ってそんな簡単に許しちゃうの!?!」

第9話 ピース& amp・ニールVSヘル！ 秘められしピースの力、覚醒！

自分の中にある秘められし力を目覚めさせ、サンダースへと進化したピース。黄色いオーラを身に纏い、電気をバチバチと放出しながらヘルを睨みつけている。

「石も無しに進化するとは……お前、一体何者なんだ？」

戦闘体勢に入ったまま、ヘルはピースに聞いた。

「……俺か？ 俺はお前を倒す者だ」

サンダースに進化した事により、今までの子供っぽさが無くなってしまったピース。身体から放出されている電気が先程よりもさらに強力になっていく。

「……電光石火！」

ピースが動いた。

素早い身の熟しでヘルに急接近していく。

「バリアー！」

ヘルは右手を前に翳し、自身の目の前にエネルギーの壁を作り出した。だが、ヘルの前まで来たピースは方向転換、バリアーが張られていないヘルの背後に素早く回り込んだ。

（くっつい！？）

ピースのスピードに驚きながらも、ヘルは振り向き、もう一度バリアを展開しようとする。

「……10万ボルト！」

ピースは身体から強力な電撃をヘルに向けて放出した。

「守る！」

ヘルは咄嗟とっさに自身の身体をエネルギーの膜で覆い、ピースの10万ボルトを防いだ。

「シャドーボール！」

10万ボルトを防いだヘルは透すかさず反撃。両手で黒いエネルギー弾を作り出し、ピースに向けて放つ。

「……電光石火！」

ピースは電光石火で素早く動き、ヘルのシャドーボールを回避、そしてまたピースはヘルに急接近する。

「……雷の牙！」

ピースは自らの牙に電気を纏わせ、ヘルに噛みつきこうと飛び掛かる。

「ナメるな！ サイコキネシス！」

ヘルは右手を前に翳し、強く念じる。刹那せつな、ヘルの目が淡い水色あわ

に光り輝き、右手から衝撃波が放たれた。その衝撃波を受け、ピースは後方へ大きく吹き飛ばされた。

だがピースはすぐに体勢を立て直し、再び戦闘体勢に入る。

「……ミサイル針！」

ピースは全身から鋭く尖った針のようなエネルギー波を無数に放ち、ヘルを攻撃した。

「はあああ！」

再びヘルはサイコネシスを使い、今度は吹き飛ばすのではなく、ミサイル針をコントロールしてピースに向けてミサイル針を跳ね返した。

「……電光石火！」

ピースは電光石火で素早く動き、ミサイル針を回避、ヘルに向かって突っ込んでいく。

「……雷！」

「守る！」

ピースはヘルの目の前まで接近すると、身体から強力な電撃を放出、しかしヘルは守るを使いこれを防御した。

だがピースが放った雷は強力で、守るを使って防御したヘルは後方へ吹き飛ばされた。

(くっ守るを使っても、衝撃がはつきりと身体に伝わってくる!?)

ピースの雷の威力に驚愕するヘル。

「……しぶとい奴だな……はあ……はあ……」

(ん？ 奴の呼吸が荒くなった？ ……ふっそういう事か)

まだ戦い始めてそんなに時間は経過していない筈なのに、何故かピースの呼吸が乱れてきた。

それをヘルは見逃さなかった。

「どうやらお前のその力、体力を異常に消耗するらしいな？ かなり辛そうだが？」

勝機が見えたヘルは少し笑みを浮かべながらピースにそう言った。

「……はあ……はあ……うるさい……体力が無くなる前に貴様を倒せば良いだけの事だ……」

「俺を倒す……か……ふっ悪いがそれは無理だな。自己再生！」

ヘルの身体が突然光り輝き始めた。すると、ヘルの身体に出来た傷がどんどん治っていく。

「……なっ!？」

「レジギガスとの戦闘の後、新たに身につけた技だ。体力が残り少ないお前に、完全に回復した俺を倒す事は……不可能だ！」

そう言い放った刹那、ヘルは両手を左右に広げ、野球ボール程の

大きさのエネルギー弾を無数に作り出した。

「これで終わりだ……メテオ・インフィニティー！」

無数に作り出されたエネルギー弾は、まるで雨の如くピースに向かって降り注ぐ。

「……雷！」

それに対してピースは、自分に残っている全ての力を使って雷を放ち、ヘルメテオ・インフィニティーに対抗しようとした。しかし、完全に体力を回復したヘルメテオの攻撃に、疲労困憊ひきうけんぱいのピースの攻撃は対抗しきれず打ち消されてしまった。

メテオ・インフィニティーはピースに全弾命中。爆発が発生し、その場に爆煙が立ち込める。

しばらくすると立ち込めていた爆煙が収まった。そこには傷つき、倒れているピースの姿が……

「そんな……ピース君!？」

自分の怪我の痛みを耐えながら、テイルはピースの所へ急いで駆け寄る。

「ピース君!？　しっかりしてピース君!？」

ピースの事を必死に呼び掛けるテイル。だが、ピースは何も返事をしない。完全に意識を失ってしまったようだ。

その時、ピースの身体にまた変化が起き始めた。サンダーズの特徴である黄色い体色がどんどん茶色に染まっていき、鋭く尖った毛もふさふさとした毛に変わっていき、最後に身体が小さくなってい

った。

ピースはサンダーの姿から再びイーブイの姿に戻ったのだ。

「ほう……力を使い果たすと元の姿に戻るのか……まあ、今はそんな事どうでも良いがな」

ピースを倒したヘルはゆっくりとタワー内部に繋がる入口に向かって歩き出した。

「くっここから先には行かせん！」

ヘルの前に、傷だらけのサンダーが立ち塞がった。

「邪魔だ」

ヘルはサイコキネシスを使い、サンダーを軽く吹き飛ばした。サンダーは身体を壁に激しく打ちつけられた。

「がはっ……くそ……」

その場に倒れ込むサンダーだが、なんとか立ち上がろうとしている。

「まだ邪魔をする気か？　ならば……二度と邪魔が出来ないようにここで始末してやる！」

ヘルは先程ピースに放ったメテオ・インフィニティーの準備を始めた。

「くっ……」

「待ってくれ！」

その時、誰かがタワー内部から出てきた。

そのポケモンはテイルの父親であるライチュウだった。

「サンダー・オーブならここにある！ 頼むから、もうこれ以上は止めてくれ！」

ライチュウの右手にはサンダー・オーブが握られていた。

「ライチュウ……お前……！」

「ふっ探す手間が省けたな。最初から素直に渡していれば良かったんだ」

ヘルはゆっくりとライチュウに近づき、サンダー・オーブを受け取った。

「これで二つ……良いだろう、俺も無駄にエネルギーを消耗したくないのでな……命は助けてやる。サンダー、このライチュウに感謝するんだな？」

サンダーにそう言った刹那、ヘルは何処かへと飛び立ってしまった。

第9話 ピース&テイルVSヘル！ 秘められしピースの力、覚醒！

ピース

「負けちゃった〜（泣）これでヒトカゲさんにプレゼント貰えないよ〜（泣）」

いやそこっ!?!?（汗）

テイル

「ピース君頑張ったのにな〜」

ピース

「うえ〜ん（泣）」

もうほら泣かないの（汗）

第10話 新しい旅の仲間、テイル！（前書き）

まず最初に……更新遅れてすみません！m（　　）m

ピース

「何やってたの作者さん？」

HG・SSでずっとワールドチャンピオンシップに出すポケモンの育成をね（汗）

テイル

「まだ出れると決まった訳じゃないのに？」

今のうちにやっておかないと間に合わないのよ（汗）
ってこんな話は置いといて……本編をどうぞ！

ピース

「無理矢理！？」

第10話 新しい旅の仲間、テイル！

雷の国にある大きな病院……ヘルとの戦いに敗れ、傷ついたピースはこの病院の病室に用意されているベッドで眠っていた。

「ピース……」

ピースが眠っているベッドの隣で、心配そうな表情でピースを見つめるジグザグマ。

「お邪魔するよ」

その時、ジグザグマ達がいる病室にテイルがやってきた。テイルもヘルとの戦いで怪我をした為、身体には包帯が巻かれている。

「テイル……お前、身体はもう良いのかよ？」

「これくらいピース君に比べれば大した事ないよ……まだ起きないのピース君？」

ジグザグマの隣まで来て、ピースの事を見つめながらテイルはジグザグマに聞く。

「嗚呼……あれから丸一日経ったのにまだ起きないんだ……」

悲しい表情をしながらテイルの問いに答えるジグザグマ。ピースとヘルとの戦いからすでに一日が経過していたのだ。

「……この病院は雷の国で一番の病院なんだ。だから……きっとピ

「ス君は大丈夫だよ」

ジグザグマの肩に右手を当て、ピースはきつと大丈夫だとジグザグマに言い聞かすテイル。

「失礼するぞ。テイルはいるか？」

その時、病室にテイルの父親であるライチュウがやって来た。

「あつ父さん」

「やはりここだったか。サンダー様がお前に話があるみたいだぞ」

「サンダー様が？ なんだろ？」

首を傾げるテイル。

「大事な話みたいだぞ。その子には俺とこの子がついてるから、お前は行つてきなさい」

「う、うん解つたよ」

ライチュウとジグザグマにピースを任せ、テイルはサンダーがいる病室に向かう事にした。

「失礼します」

テイルがサンダーがいる病室の扉を開ける。

「来たか……」

「あの、サンダー様……話とはなんですか？」

病室に入り、テイルは単刀直入に質問した。

「……お前は知っているか？ 白きオーラを纏まといしポケモンの伝説の事を」

白きオーラを纏いしポケモン……それを聞かされたテイルは首を横に振る。

「なんなんですか？ その白きオーラを纏いしポケモンの伝説って？」

「古い伝承の一つだ。昔、とあるポケモンによって世界は破滅の危機に陥った事があってな……その危機を救ったのが、白きオーラを纏いしポケモンなんだ」

サンダーは簡単に白きオーラを纏いしポケモンについてテイルに説明した。

「その伝説と僕が呼ばれた事に何か関係があるんですか？」

「……気づかないか？ お前はもう見ている筈だぞ、白きオーラを纏いしポケモンを……」

「もしかして……ピース君？」

ティルの問いにサンダーは頷いて応える。

「昔世界を救ったポケモンがイーブイだったかは解らないが……あの白きオーラは間違いなく世界を救ったポケモンのそれと同じものだ。つまり、あのピースというポケモンはその末裔まっえいだ」

「あのピース君が世界を救ったポケモンの末裔……」

普段の優しいピースを見ていたティルは、少し信じられないといった表情を浮かべる。

「信じられないかもしれないが、あの白きオーラが何よりの証拠だ。だが、あの者はまだ力をコントロール出来ないようだ……あの力をコントロール出来るようになれば、あの者はヘルを倒し、奪われたオーブを取り返す事が出来る。お前には、ピースが強くなる為の手助けをしてやってほしいんだ」

「僕が……ですか？」

自分を指しながらティルは質問する。

その質問にサンダーは頷いて応える。

「……友達のピース君の手助けになるなら僕は良いですけど……でもなんで僕なんですか？ この国には僕よりも強いポケモンはたくさんいる筈です。その人達をピース君達と一緒に……」

「……いや、他の者ではダメだ。お前でなくてはな」

真剣な表情で答えるサンダー。

「あれから俺はこの伝説を詳しく調べてみたんだが……その白きオーラを纏いしポケモンには七人の仲間がいてな。その仲間と力を合わせる事で、初めてあの強力な力を発揮出来るらしいんだ……ティール、お前はその七人の仲間の一人である、電気タイプのポケモンの末裔だ」

自分が白きオーラを纏いしポケモンの仲間の末裔……サンダーのその言葉を聞いて驚くティール。

「ぼ、僕がですか!?!」

「そつだ。現にお前のすぐそばにいたピースはサンダースに進化しただろ?」

「そ、それはただの偶然なんじゃ……」

ティールのその問いに、首を横に振って応えるサンダー。

「ピースのあの力が発揮するのは、仲間が近くににいる時だけ……つまりティール、お前は間違いなくその仲間だ」

「僕が……」

「……本当は、俺自身の力でヘルからオーブを取り返したいんだが……王である俺がこの国を離れる訳にはいかない……それに、悔しいが俺の力ではヘルには勝てない……頼む、ティール」

頭を下げ、頼み込むサンダー。ティールは俯き、少し考え込む。

（僕が白きオーラを纏いしポケモンの仲間の末裔……まだ信じられないけど……でも僕はピース君の力になってあげたい。あのヘルをピース君一人で相手させるなんて出来ないよ……良し！）

しばらくして、決意したのかテイルは顔を上げ、しっかりとした眼差しでサンダーを見る。

「サンダー様……僕、やります！」

自分の決意をサンダーに伝えるテイル。

「そうか……ありがとう、テイル」

再び頭を下げるサンダー。

テイルとサンダーが話をしていたその時、ピース達がいる病室で

は……

「……うーん……あれ、ここ何処？」

今まで眠っていたピースが目を覚ました。

キョロキョロとして今何処にいるのかを確認している。

「ピースー！」

「うわっ！？」

ピースが目を覚ました事が嬉しくて、ジグザグマがピースに飛びついた。

「まったく心配させやがって〜！ 本当にすげー心配したんだからなピース！」

「ちょっ……く、苦しいよジグザグマ……」

キツく抱きしめられて苦しそうなピース。

「あつ悪いピース」

慌ててジグザグマはピースから離れる。

「あゝ苦しかった〜……ねえジグザグマ、ここ何処なの？」

「ここは雷の国で一番の病院だ。君はヘルに負けて気を失い、丸一日ここで眠っていたんだ」

ジグザグマの代わりにライチュウが答えた。

「そうだったんですか……僕……負けちゃったんだね……」

ヘルに負けたのが悔しいのか、ピースは俯いてしまう。

「落ち込むなよピース。負けちゃったんなら、今度は負けないように強くなれば良いだろ？ 今回、俺はお前と一緒にいてやれなかったけど……次は俺もお前と一緒に戦う。大丈夫、次はきつと勝てるさ」

ピースを励ます^{はげ}す為^{ため}に笑顔でそう言うジグザグマ。

「ジグザグマ……うん、そうだよね」

ジグザグマの励ましが嬉しくて、ピースの暗かった表情が明るくなる。

「二人は仲が良いんだな。ピース君、良かったらこれ食べてくれ」

ライチュウが一個のリンゴをピースに見せる。ピースの為に用意してきたみたいだ。

「リンゴッ!？」

「ん?」

ライチュウが右手に持っているリンゴをじーっと見つめるジグザグマ。

食べたいのか、口からは涎^{よだれ}が垂^たれている。

「……ほい」

ライチユウは右手に持っていたリンゴを左手に持ち替える。ジグザグマはリンゴから目を離さないでまだじーっと見つめる。

「……食べたいのかい？」

ライチユウにそう質問されたジグザグマは頷いて応える。

「でもこれはピース君に……」

「い、良いですよライチユウさん。僕、お腹空いてないですから……ジグザグマにあげて下さい」

苦笑いしながらそう言うピース。

「そ、そうかい？」

「よっしゃー いったただっきま〜す」

ジグザグマは素早い身の熟^{こな}してライチユウからリンゴを奪い取り、リンゴに齧^{かぶ}り付く。

「美味っ」

幸せそうな顔をするジグザグマ。

「あっピース君目を覚ましたの！」

ちょうどその時にテイルが病室に戻ってきた。

「戻ってきたか。サンダー様はなんだって？」

「あっうん。僕に、ピース君達の力になってやってってくれってさ」

サンダーに言われた事をライチュウに簡単に説明するテイル。

「それって……僕達と一緒にテイルも来るって事？」

首を傾げながらテイルに質問するピース。

「そういう事。でも、ピース君達が良ければだけど……」

「全然良いよ！ ねっジグザグマ？」

「おう！」

二人はテイルと一緒に来る事を快く承諾した。

「ありがとう二人共」

二人が承諾してくれた事が嬉しくて、笑顔になるテイル。

「じゃあそつと決まったら早速……」

ピースは立ち上がろうとしたが、足に上手く力が入らないのかその場で倒れてしまった。

「あれ……なんか上手く立てないよ？」

「まだ体力が回復してないんだよ。焦らないでよピース君。出発するのは、ピース君が万全な状態になってからにしよう?」

「うん、そだね」

それから次の日の朝。

すっかり元気になったピースはジグザグマ、テイルと一緒に雷の国の出入り口である門の近くに来ていた。テイルは肩にシヨルダーバッグを掛け、背中にはサンダーボルトを背負っている。

「じゃあ……行ってくるよ、父さん。それにリック」

見送りに来てくれたライチュウとコリンクのリックに別れを告げるテイル。

「身体には気をつけるよテイル」

テイルの右肩にポンと手を当て、体調には気をつけるように言うライチユウ。

「うん」

「テイル、もしヘルについて何か解ったら、すぐに知らせてやるからな……頑張れよ」

リックもテイルの事を応援する。

「ありがとうリック……じゃあ、行ってきます！」

テイルは元気良くそう言うと、ピース達と一緒に門を潜り、雷の国を出発した。

「あっそういえば次は何処に行けば良いんだろ？」

出発して早々にピースがそんな事を言い出す。

「サンダー様が言ってたんだけど、草の国には強いポケモンがいるみたいなんだ。だから、そのポケモンに会って鍛えてもらうっていうのはどうかな？」

テイルが草の国に行く事を提案する。

「強いポケモンか……じゃあその草の国に行ってみようか！」

「決まりだね」

目的地が草の国に決定、ピース達は改めて草の国目指して歩き始める。

「腹減った〜……なあ、どっかでなんか食わない?」

『ジグザグマ………』

……先行きに不安を感じたピースとテイルであった。

第10話 新しい旅の仲間、テイル！（後書き）

テイル

「改めて……ピース君の新しい仲間になりました、テイルです」

ピース

「わーい」

喜んでるね（笑）

ジグザグマ

「んで、次は草の国か……どんなところだ？」

田舎です。田んぼや畑があったり、緑豊かな自然で溢れてる場所。

テイル

「……田舎ってあまり好きじゃないんだよね」（汗）」

都会っ子だからね君（汗）

あっそうだ。現在主人公達の人気投票は順調に進んでおります。全員が主人公っただけあって、かなりの激戦になってるよ。

ピース

「僕先輩達に勝てるかな？」

まあ結果は10月に出るから待っててよ。

詳しくはバクフーン達の冒険・キャラクター紹介にて。

第11話 草の国目指して(前書き)

本当は昨日投稿する筈だったのに、何やらサーバーのトラブルとかでアクセス出来ず、投稿出来なかったという(泣)

ピース

「あー(汗)」

まあとにかく投稿出来て良かったです。

第11話 草の国目指して

新たにテイルを仲間に迎えたピースとジグザグマは雷の国を出発し、次の目的地である草の国を目指していた。

「なあテイル、草の国まであとの位なんだ？」

「ちよつと待つてて……コンピューター、検索開始」

テイルは顔に掛けていたゴーグルにあるボタンを押し、まるでゴーグルに話し掛けるように言う。すると、ゴーグルのガラス部分に地図のような画像と文字が映し出される。

「……解つたよ。ここから約一キロ先まで歩くと丘があつて、その丘を越えた先に草の国があるみたいだよ」

先程のジグザグマの問いに答えるテイル。

「そつか……つつかさ、そのゴーグルでそんな事まで調べられるなんて凄いよな」

「いや、このゴーグルには元々こういう機能は無かつたんだ。リックが新しい機能を追加してくれて、こういう事が出来るようになったんだよ。だから、凄いのは僕じゃなくてリックの方さ」

顔に掛けていたゴーグルを手に取り、自分よりもリックの方が凄いと笑顔で言うテイル。

「いやそれ作つたお前も充分凄いだろ……」

軽くツッコミをするジグザグマ。

「ねえ二人共。その丘がある場所まで皆で競争しない？」

突然ピースが丘まで競争しようとして二人に提案した。

「競争って……一キロ先の丘まで走るって事か？」

ジグザグマが質問すると、ピースは笑顔で頷いて応える。

「なんでまた急にそんな事をやろうと思ったんだピース？」

「だって、長い距離を走れば体力は付くでしょ？ 少しでも強くなつて、ヘルからオーブを取り返さないといけないからね」

競争をしようと思った理由をジグザグマ達に説明するピース。

「お前……良し解った！ だけど、勝負するからには負けないからな！」

やる気になったジグザグマはダッシュする体勢に入る。

「僕だって負けないよ！」

「じゃあいくぜ！ よーい……スタート！」

ジグザグマの合図と共にピース達は走り出した……一人を除いて。

「絶対俺が勝つからなピース！」

「僕だって、絶対ジグザグマには負けないよ！」

二人はほぼ横一線に並び、互角の勝負をしている。

「二人共頑張ってるね〜」

とその時、ピース達の隣にサンダーボルトに乗って走っているテイルがやって来た。

「あ〜！？ズルいぞテイル！ちゃんと自分の足で走れよ！」

「そうだよテイル！」

「だって競争するとは言ってたけど、サンダーボルトに乗っちゃいけないって言ってなかったでしょ？」

『うつ……』

確かにテイルがそう言うように、ピースはそういう事を言っていなかった為、二人はテイルに何も言い返せなかった。

「じゃあ、お先に〜」

テイルはスピードを上げ、一気に丘の所まで行こうとした。だがその時、何処からか大きな爆発音が。

「な、なんだよ今の!？」

いきなりの爆発音に驚いた三人はその場で急停止。爆発音が聞こえてきた方に振り向く。

爆発で発生したのか、煙が立ち上っている。

「行ってみよう!」

ピース達は急いで爆発音がした方向に向かう。

しばらくして、ピース達は爆発が起きた場所にたどり着いた。

「こ、これって……」

そこでピース達が見た光景、それは……

「ソーラービーム!」

「シグナルビーム！」

そこにはバトルフィールドがあり、バトルフィールドの周りにはたくさんのポケモン達が集まっている。どうやらここでバトル大会が行われているらしい。

「うわ〜……凄いたくさん集まってるな〜！」

たくさんのポケモン達がいる事に驚いているジグザグマ。

「……なるほどね……今コンピューターで調べただけど、どうやら年に一回に草の国と虫の国の二つの国でこのバトル大会を開いているみたいなんだ。今日がちょうどその日だったみたいだね」

テイルが調べた事をピース達に説明した。

草の国と虫の国は友好関係にあり、より親交を深める為にこうして年に一度のバトル大会を開いているのだ。

「へ〜……だから周りにいるポケモン達は皆、草タイプと虫タイプのポケモンしかないんだね」

辺りを見回しながらピースはそう呟く。

「あれ？ 兄ちゃん達、何処から来たの？」

その時、ピース達の所へ一人のポケモンがやって来た。体色は緑を基調とし、姿はカエルのように背中には大きな植物の種のような物があるポケモン……フシギダネだ。

「初めまして、僕はピースって言うんだ。こっちはジグザグマでそ
っちがテイル。僕とジグザグマはノーマルの国から、テイルは雷の
国から来たんだ」

ピースはフシギダネに丁寧に説明する。

「へー兄ちゃん達、余所の国から来たんだ。あっオイラはフシギダ
ネのシードって言うんだ。よろしくな」

フシギダネ……シードは笑顔で挨拶をする。

「よろしくね」

「それで、ピースの兄ちゃん達は何しに来たんだ？」

首を傾げながらシードはピース達に質問した。

「僕達は草の国に強いポケモンがいるって聞いて……そのポケモン
に会って、鍛えてもらおうと思って来たんだよ」

シードの問いにテイルが答える。

「草の国で強いポケモン……あーそれだったらジンの兄ちゃん的事
だね！」

どうやらシードはそのポケモンの事を何か知っているようだ。

「知ってんのか！ だったら話が早いや！ なあ、そのポケモンに
会いたいんだけどさ、何処にいるんだ？」

「ジン兄ちゃんなら……」

シードが説明しようとしたその時、突然周りのポケモン達が大きな歓声を上げる。

「あっもう最後のバトルが始まっちゃう！」

そう言っただけでシードは慌ててバトルフィールドが良く見える所に向かって走り出した。

「あっおい待てよ!?!」

ジグザグマ達は慌ててシードを追いかける。

「や、やっと追いついた……」

たくさんのポケモン達の間を通り抜け、ピース達はシードの所にとどろき着く。

「なあ、その強いポケモンは何処にいったよ?」

「ジン兄ちゃんならほら、彼処だよ」

シードが見つめる先をジグザグマ達も見てみる。バトルフィールドの中心に二人のポケモンが立っていて、お互いを睨み合っていた。一人は体色が緑で恐竜のラプトルに似たような姿をしており、頭

と両腕には葉っぱのような物があるポケモン……ジュプトル。もう一人の方も体色が緑で、昆虫のカマキリのような姿をしており、両腕の鋭いカマが特徴的なポケモン……ストライクである。

「あのジュプトルがジンって言うのかい？」

テイルがシードにそう質問すると、シードは頷いて応える。

「ジン兄ちゃんは強いんだぜ！ オイラの憧れなんだから！」

目をキラキラとさせながら、シードはジュプトル……ジンの事を見つめる。

「いや〜ようやくあんたと戦えるな〜ジンの旦那？」

ストライクが笑みを浮かべながらそうジンに言う。

「嗚呼……サスケ、悪いが今回は俺が勝たさせてもらうぜ」

戦闘体勢に入るジン。

「言ってくれるね〜ジンの旦那……。……だけど、今回勝つのはこの俺様だぜ？」

そう言ってサスケと呼ばれたストライクも戦闘体勢に入る。

それからしばらくの間、ジンとサスケはすぐには動かずに睨み合

う……互いに隙を窺すきっているようだ。

「……リーフブレード！」

「……シザークロス！」

両者同時に動き、攻撃を仕掛ける。

ジンは右腕にある葉っぱにエネルギーを集め、鋭いカマのようにしてサスケに斬りかかる。

サスケは自慢の鋭いカマでジンを攻撃。両者の攻撃はぶつかり合い、鏝つばせ競せりあいが始まった。

第11話 草の国目指して（後書き）

はいという訳で新キャラっすな（笑）

ピース

「フシギダネのシード君にジュプトルのジンさん、そしてストライクのサスケさんだね？」

うん。そして次回はジンとサスケのバトルですな。

ピース

「どっちが勝つのかな？」

……さて、そろそろ休憩時間が終わるから僕は仕事に戻るよ（汗）

ピース

「休憩時間に執筆してたの!？」

第12話 ジンVSサスケ！（前書き）

うん、改めて今回執筆してて思ったね。

ピース

「何を？」

ポケモンバトルを執筆するのが凄く楽しいって事さ。もちろんポケモン達の会話も執筆してて楽しいけどね。

第12話 ジンVSサスケ!

試合開始早々ジュプトルのジンとストライクのサスケは互いに技を仕掛ける。互いの技がぶつかり合って鏢競合あはせあひいを始める。

「へっ……相変わらず良い動きと切れのある技だなジンの旦那?」

鏢競合あはせあひいを続けながら、笑みを浮かべるサスケ。

「ふっ……そういうお前も良い攻撃じゃねえか」

ジンも笑みを浮かべる。

「……行くぜ旦那」

「嗚呼……かかってきな!」

二人の目つきが鋭くなる。その刹那せつな、ほぼ同時に二人はバックステップして後方に下がる。

「エナジーボール!」

先に攻撃を仕掛けたのはジンだ。両手を使って緑色のエネルギー弾を作り出し、サスケに向けて放つ。

「鎌鼬!」
かまいたち

サスケが技を使う体勢に入る。刹那、サスケを中心に風が渦巻き始める。その風は勢い良く渦巻き、まるで竜巻のようになって向か

ってきたエナジーボールを防いでしまう。

「くらえ！」

サスケは右手の鋭い鎌を振り下ろし、空気の刃をジンに向けて放つ。

「ちっ！」

ジンは鎌融を回避する為に空高くジャンプする。

「狙い通りだぜ旦那！」

ジンがジャンプする事を予測していたサスケ。ジンに向かって猛スピードで飛んでいく。

「シザークロス！」

サスケはシザークロスでジンに斬り掛かる。

「リーフブレード！」

それをジンはリーフブレードを使って受け止める。

「もう一発シザークロス！」

「くらっか！」

サスケが連続でシザークロスで攻撃を仕掛けてくるが、それをジンはリーフブレードで全て受け止めていく。それは空中から地上に

着地するまで続けられた。

「シザークロス！」

「リーフブレード！」

地上に着地した二人は再びシザークロスとリーフブレードで攻撃する。

お互いの技はぶつかり合い、その衝撃で二人は後方へ吹き飛ばされる。

「タネマシガン！」

すぐに体勢を立て直したジンは口から無数のエネルギー弾をマシンガンの如く吐き出し、サスケに向けて放つ。

「剣の舞い！」

サスケは身体を高速で回転させる。すると、先程の鎌鼬と同じように小規模の竜巻が発生、ジンのタネマシガンを全て防いでしまふ。

「んでもって、影分身！」

剣の舞いでタネマシガンを防御した後、サスケは影分身を発動した。

サスケの両サイドに、サスケの分身が二人出現する。

「さあ、ショータイムだぜ！」

三人のサスケはジンに向かって突っ込んでいく。

「シザークロス！」

三人のサスケはシザークロスでジンに斬り掛かる。

「きやがったな得意戦法……見切り！」

ジンは見切りを発動して自らの動体視力を強化、サスケのシザー
クロスを回避する。

「逃がすか！」

三人のサスケは連続で攻撃を仕掛ける。

本体がどれなのか解らないジンは見切りを使い続けて次々と攻撃
を回避していく。だが、見切りはかなりの集中力を使う為そう長く
は続けられない。ジンはこの悪い状況を打開出来る方法を考える。

「次で決めるぜ！」

三人のサスケはジンを囲むように三角形の陣形を取る。そして三
方向から一斉にジンに向かって突っ込んでいく。

「穴を掘る！」

ジンは穴を掘って地面に潜り、サスケの攻撃を回避した。

「ちっ地面に潜って避けやがったか！」

ジンが何処から攻撃を仕掛けてくるか解らない為、動きを止めて

周囲を警戒する。

「まずは……一人！」

三人の内の一人の足下からジンが現れ、両足を掴んで地面に引きずり込んだ。

「ぐあっ!?!」

地面に引きずり込まれた瞬間そのサスケは光の粒子となって消滅した。

「こいつは偽物か……なら次だ！」

もう一人のサスケに狙いを定めたジンは地面の中から一気に接近していく。

「攻撃が届かない地面の中から仕掛けてくるとは……さすがだぜ旦那。だが、俺様達が地面から離れたら、仕掛けられねえよな」

そう言っつて二人のサスケは空に飛んで地面から離れようとした。

「行かせねえぞ！」

地面から離れる前に、ジンはもう一人のサスケの両足をしっかりと掴んだ。そしてそのまま地面に引きずり込む。

その瞬間そのサスケもまた光の粒子となって消滅した。

「あゝ俺様の分身達が！」

分身全てを消された事を悔しがるサスケ。

「さあこれで邪魔な分身はいなくなったぜ」

地面から出てきたジンは空中に浮いているサスケを睨む。

「やってくれやがったなジンの旦那！ 鎌鼬！」

サスケは空中からジンに向けて鎌鼬を放つ。

「見切り！」

直撃する寸前でジンは見切りを使い、鎌鼬を回避した。

「もらったあああ！」

鎌鼬をおとすに、ジンに急接近してシザークロスで攻撃しようとするサスケ。

だがジンは冷静にこの攻撃をリーフブレードを使って受け止める。そしてサスケのシザークロスを弾き飛ばす。

「うおっ！？」

弾き飛ばされた事でサスケは体勢を崩される。

その隙にジンはサスケの背後に回り込み、逃げられないように抱き締める。

「は、放せ！？」

足掻くサスケだが、ジンは逃げられないように強く抱き締める。

「迂闊うがっに近づきすぎたなサスケ！ はっ！」

ジンはサスケを抱き締めたまま空高くジャンプ。そして逆さまになり、頭から地上に向かって落下していく。

「これで……どうだ！」

ジンはサスケを頭から地面に叩き付けた。

その瞬間、叩き付けた衝撃で土煙が立ち込める。そして土煙の中からジンは飛び出し、サスケから離れる。

(手応えはあった……だが、相手はサスケだ。油断出来ねえな……)

ジンは戦闘体勢を維持したまま、土煙が収まるのを待つ。

しばらくして土煙が少しずつ収まっていく。

「……やっぱりまだ倒れてなかったか……」

ジンはそう呟いた時、少しずつ収まってきた土煙の中からサスケがゆっくりと歩いてきた。

「……さすがだぞ旦那……今のはかなり効いた……」

笑みを浮かべながらサスケはそう言った。

「……タフな野郎だな」

そうは言うが、どこかジンは嬉しそうな笑みを浮かべる。まだバトルが出来る……それをまるで喜んでいようだ。

「さあ……続けようかサスケ！」

ジンはリーフブレードを発動する構えに入る。
だが、サスケは構えるのを止めてしまう。
それを不思議に思ったジンは首を傾げる。

「どうした？」

「悪い旦那……ギブアップさせてもらおう」

突然サスケはギブアップを宣言した。

「なっ！？ お前どういっつもりだ！」

明らかにまだバトルが出来る状態の筈のサスケがギブアップを宣言した事に納得がいかないジンは思わず声を上げる。

「まあ俺様にもいろいろと事情があんのよ。このバトル大会の後に、ちよいと一仕事しなきゃならねえからさ……じゃあ旦那」

そう言ってサスケはバトルフィールドから立ち去ってしまった。

「……えっ何？ これでバトル終わりなの？」

予想外の終わり方に啞然とするピース。

ピースだけでなく周りにいたポケモン達も同じように啞然として
いる。

「ちっ……なんだよあいつ……」

舌打ちをしてジンは不満そうにしながらバトルフィールドから離れていく。そして、今のジンとサスケのバトルで大会は最後だったので、他のポケモン達は帰宅準備を始めた。

「あつジン兄ちゃん！」

フシギダネのシードが大きな声を上げてジンに呼び掛ける。だが、ジンはシードの呼び掛けが聞こえていないようで、そのまま立ち去っていつてしまった。

「お、おい行っちゃったぞ？」

少し驚いた表情を浮かべるジグザグマ。

「よっぽど今のバトルが中途半端に終わったのが納得いかないみたいだね……ジン兄ちゃん、かなり機嫌が悪いみたい」

そう言っつてシードは苦笑いする。

「困ったなあ……僕達、あのジンさんに会わないといけないのに……」

困った表情を浮かべるテイル。

「バトル大会も今のジン兄ちゃんとサスケさんのバトルで終わりだ

し、オイラがジン兄ちゃんの家まで案内してあげようか？」

ジンの所へ案内してあげようかとピース達に提案するシード。

「えっ良いの？」

「もちろんさ。じゃ、オイラについてきな！」

ピース達はシードと一緒に草の国にある、ジンの家に向かう事にした。

第12話 ジンVSサスケ！（後書き）

ピース

「ジンさん不完全燃焼でご機嫌斜めみたい（汗）」

まあ楽しいバトルをあんな感じで終わらされたら不快感を抱くさ（汗）

ピース

「それで次は草の国にやっとなるんだよね？」

うん。長閑のちがで良い所だよ。

ピース

「長閑か、早く行ってみたいな」

あっそうだ。遅くなったけどピース、人気投票で第2位になれたね、おめでとう！

ピース

「ありがとうございます」でもまさかアスカ先輩やタクミ先輩よりも上位になれるなんてビックリしちゃいましたよ！」

やっぱりイーブイの君ギザ可愛いからね（笑）

それにふわふわのもこもこだし（笑）

ピース

「……それ関係あるのかな？（汗）」

第13話 草の国（前書き）

ピース

「久しぶりの更新だ〜」

テイル

「最後に更新したのいつでした？」

あれは確か……

ジグザグマ

「ってそんな昔か？（汗）」

第13話 草の国

「うわー、すっごい」

フシギダネのシードに連れられてここ、草の国にやってきたピース達。

辺りには田んぼや畑や果樹園などがあり、野菜や果物がたくさん育っている。

国に住むポケモン達の家はどこか和の雰囲気かもを醸し出しており、昔の日本を想像させてくれるような作りになっている。草の国に入っつてすぐにピースはこの景色を気に入ったようで、目をキラキラとさせている。

「へへ、どうだいピースの兄ちゃん、良い所だろこの国は？」

何故か自慢気に言うシード。

「うん 雷の国と違って、ここは長閑のどかで本当に良い所だね」

自分が思った事を正直に言うピース。

「……田舎だね」

ボソッとそんな事を呟いたのはテイルだ。

「田舎で悪かったな！」

田舎と言われてシードは怒り、膨れっ面になる。

「まあまあ……ティル、田舎だなんて言っちゃダメだよ。良い国だよここは、ジグザグマもそう思うでしょ?」

そう言ってピースは隣の方に顔を向ける。
だがそこにジグザグマの姿はなかった。

「ってあれ? ジグザグマ?」

ピース達は辺りを見回してジグザグマを捜す。

「あついた」

ティルが指差す方をピース達は見つめる。

「リンゴ美味っ」

ジグザグマは近くの果樹園にあるリンゴをむしゃむしゃと食べていた。

「ジグザグマ……」

呆れた表情を浮かべるピース。

「良いのかなあ? 勝手に果樹園のリンゴ食べて?」

「あゝあの果樹園はオイラの父ちゃんが所有してる物だから、別に構わないよ」

ティルの疑問にシードが答える。

「それより、ジン兄ちゃんの所には行かないのか？」

首を傾げながらシードはピース達に聞く。

「あっ行くよ。ほらジグザグマ、いつまでも食べてないで行くよ！」

「あっ待てよお前ら!？」

シードと一緒に行ってしまったピース達を慌てて追い掛けるジグザグマ。ジグザグマの口にはまだ食べかけのリンゴが銜くわえられたままだ。

それからしばらく歩き続けて、ピース達はジンが住む家にやって来た。

「ここがジンさんの家なの?」

ピースがシードに尋ねると、シードはそれに頷いて応える。

「もう帰ってる筈だから、中にいると思っただけど……」

シードはつるのムチを伸ばし、家の扉を軽く叩く。

「ジン兄ちゃん！ オイラだよー！」

大声を出してジンを呼ぼうとするシード。

しかし、いくら待っても中からジンは出て来なかった。

「……出て来ないね？」

首を傾げるピース。

「うーん、まだ帰ってなかったみたいだなあ……となると、いるとしたらいつもの彼処かな？」

「彼処って何処だよ？」

ジグザグマがシードに聞く。

「ジン兄ちゃんのお気に入りの場所さ。こっちだよ！」

そう言ってシードはジンの家とは逆方向に走り出す。ピース達は慌ててシードを追い掛ける。

ジンの家からしばらく走り続け、ピース達は一本の大きな木がある丘にやってきた。

「へー、こんな場所もあるんだね。うわー、良い眺めなが」

ピースは丘から見える景色に感動したのか、またまた目をキラキラさせる。丘からは草の国に住むポケモン達の家、田んぼや畑、そして果樹園などが見渡す事が出来る。

「あついた！」

シードが木を見上げながら声を上げる。

ピース達も木を見上げる。木の太い枝の所にジンが座っていた。片手には一升瓶いっしょうびんが握られている。どうやらお酒を飲んでいたようだ。

「ジン兄ちゃん！」

シードは大きな声を出してジンに呼び掛ける。その呼び掛けに気づいたジンは下に顔を向ける。

「なんだシードか……」

一言そう言うと、ジンはお酒を飲み始める。

「ジン兄ちゃん、まだ真っ昼間なのにもうお酒飲んでるの？」

「……うっせえな、これが飲まずにいられるかよ」

どうやらサスケが中途半端に試合を終わらせた事をまだ怒ってい

るようで、自棄酒じけしゅしているようだ。

「……そいつらは誰だ？ この国の奴らじゃねえみたいだが？」

ピース達を見つめながらシードに聞くジン。

「初めまして、僕はピース。ノーマルの国から来たんだ」

「俺はジグザグマ。同じくノーマルの国から来た」

「僕はテイル。雷の国から来ました」

ピース達はジンに簡単な挨拶をする。

「……余所者か」

またジンはお酒を飲み始める。

「あの、ジンさん。僕達……」

「帰りな。今俺は気分が悪いんだ」

ピースがここに来た理由を説明するのを遮りかきとぎ、ジンはピース達に
帰れと言う。

そしてまたお酒を飲む。

「そ、そうはいかないよ！ 僕達はジンにお願いしたい事があって
ここに来たんだ！ このまま帰る事なんか出来ないよ！」

真剣な眼差しでジンに言うピース。

「ジン兄ちゃん、ピースの兄ちゃんがこう言ってるんだから、聞いてあげたら？」

「……仕方ねえな。ただし、条件がある」

そう言った後、ジンは枝から飛び降り、地面に着地する。

「お前」

ジンはピースを指差す。

「ぼ、僕？」

「お前が俺とバトルして、一発でも俺に攻撃を当てる事が出来たら、お前らの頼みつてのを聞いてやる」

ジンは、自分に一発でも攻撃を当てる事が出来たら頼みを聞くと、お前らの頼みつてのを出した。

「一発でもって……ちょっとピース君の事を甘く見過ぎなんじゃありませんか？」

ちよつと怒り口調になるテイル。

「嫌なら良いんだぜ？俺は楽で助かる」

「……やります。一発でも攻撃が当たれば良いんですよ？」

ピースは戦闘体勢に入る。

「テイルにジグザグマ、それにシード。危ないからちょっと離れて」

「わ、解った……ピース、ジンさんにお前の強さ見せてやれよ！」

ジグザグマ達はピースとジンから離れる。

「俺はいつでも良いぞ。どっからでも来な」

お酒を飲みながらジンはそう言う。

「……それ、置いとかなくて良いんですか？」

「置く必要はねえよ、まだ中身が残ってるし……それに、酒飲みながらでもお前に負けないしな」

ピースを挑発するように言うジン。さすがのピースもこの発言には怒りを覚える。

ピースとジンがバトルを始めようとしている時、草の国から少し離れた場所にある虫の国。

そこである集団が集まっていた。その集団の中にはサスケもいた。「皆集まってるな？」

サスケが集まったポケモン達に聞く。ポケモン達は頷いてサスケの問いに応える。

「全員を集めるとは……今回はどんな仕事なんだサスケ？」

サスケに質問したのは蝉せみに似た姿をしたポケモン……テッカニンだ。

「ちよいと難度が高い仕事でな。ランクで言うならSってところかな？」

軽い口調で言うサスケ。だが、Sランクと聞いたポケモン達は皆驚いた表情をしている。

「ビークイン様、直々に依頼してきたんだ。ターゲットは最近噂になってるヘルって野郎だ。だが、こいつに関しては情報が少なすぎる。だからまずは情報収集から始める。一カ月後、またここに集合だ……じゃあ、ミッション開始だ！」

サスケがそう言った刹那せつな、集まっていたポケモン達は散り散りになって離れていった。

「サスケ……今回の任務、嫌な予感がする」

サスケの隣にいるテッカニンが不安そうな表情を浮かべながら言う。

「まゝたお前の嫌な予感か？　今まで当たった試しが無いだろ、お前の予感」

少し呆れた表情を浮かべながら言うサスケ。

「今回は本当に嫌な予感がするんだ……何か、とんでもない事が起きるような……」

「心配すんなハヤテ。今回もいつも通りに終わるさ」

第13話 草の国（後書き）

ピース

「草の国、本当に長閑だったな」

とりあえずジブリの作品であるとなりのトトロ……あれに登場する田舎町をイメージしたんだけど……あんまり上手く表現出来なかつたなあ（汗）

テイル

「ところでジンさんだけど、一升瓶片手に……どんだけ酒好きなんですかあの人（汗）」

ジン

「文句あんのか？」

つて来たのね（汗）
ねえ、あの一升瓶の中身は何？

ジン

「梅酒」

梅酒だったのあれ！？（汗）

ジン

「梅酒は美味いからな」

まあ僕も飲んだ事あるけど……梅酒サワーの方だけだね。美味い事は美味いよ。

ジン

「なんだ、あんたロックでいかないのか？」

ロックはまだ未体験だなあ。サワーで5杯とか6杯は体験したけど

……

ジン

「体験してみな。ロック、イけるぜ？」

マジっすか（汗）

テイル

「お酒の話は良いから最後のサスケさんについて触れようよ（汗）」

サスケ

「あつ触れないで良いぞ」

君まで来たんかい（汗）

サスケ

「あんまり俺様の事とか、知られたくないんだよなあ。秘密主義つてやつ」

あっそう（汗）

第14話 一撃を決める！ ピースVSジン！（前書き）

うん、最近は順調に小説を更新出来てるな。

ピース

「どしたの？ 急に調子良くなるなんて？」

……なんでだろうね？

自分でも解らんとですよ。

テイル

「解らんとですって……何処の方言？（汗）」

気にしちゃいけない（笑）

第14話 一撃を決める！ ピースVSジン！

「突進！」

ジンの態度の悪さに怒りを覚えたピースは、真っ直ぐジンに向かって突進していく。だがこの攻撃はジンにあっさり回避されてしま
う。

「どうした、ちゃんと狙わないと俺には当たらねえぞ？」

余裕の表情でピースに言い放ちながら、手に持っていた酒を飲む
ジン。

「だったらこれでどう！ 電光石火！」

ピースは素早い身の熟こなしでジンに接近していく。

「おっと」

ジンはまたしてもピースの攻撃をあっさり回避する。

「このっ！」

ピースは身を翻ひるがえし、もう一度電光石火でジンに突っ込む。

「影分身」

ジンは影分身を発動し、自分と同じ姿をした幻影を無数に出現さ
せる。

ピースは構わずそのまま攻撃を仕掛けるが、攻撃を受けたジンは消滅する……影分身で作り出した幻影だったようだ。

「残念だったな。叩く^{はた}攻撃！」

影分身を解き、本物のジンは頭にある葉っぱでピースを叩く。叩かれたピースは後方へ吹き飛ばされる。

「まだまだあ！」

すぐに起き上がったピースは素早い身の熟しでジンに向かっていくが、やはり簡単に回避されてしまう。

「攻撃が単調過ぎるんだよ、叩く！」

ピースの背後に回り込んだジンはもう一度叩く攻撃を直撃させ、ピースを吹き飛ばす。

「痛たたた……」

「もう終わりか？」

一口酒を飲んだ後、首を傾げながらピースに聞くジン。

「まだまだ！ 僕は諦めないよ！」

ピースは起き上がり、戦闘体勢に入る。

(こいつ……まだやるのか?)

すぐに諦めると思っていたジンは、中々諦めないピースに少しだけ驚いている。

「電光石火！」

ピースは再び電光石火でジンに向かっていく。

「また同じ攻撃か」

「同じじゃないですよ！」

ピースは目の前までジンに接近、飛びかかると見せかけて方向転換、ジンの背後に回り込む。

「ちっフェイクか！」

ジンはすぐに振り向きこうとする。

「それ砂掛け！」

ピースは後ろ足を使って地面を蹴り、ジンの顔に向けて砂を飛ばす。

「くっ!?!」

砂が目に入り、ジンは視界を奪われる。

「今だ！ 突進！」

動きを止めたジンに向かって突進していくピース。

「守る！」

突進が直撃する寸前で、ジンは自身の身体をエネルギーの膜で包み込み突進を弾く。

突進攻撃を弾かれたピースは後方へ軽く吹き飛ばされる。

「電光石火！」

弾かれたピースだがすぐに体勢を立て直し、電光石火でジンに向かっていく。ジンは再び守るを発動しようとしたが、この技は連続で使おうとすると失敗しやすくなる技……身体を包みかけていたエネルギーの膜は消滅してしまう。

「いつけえー！」

「ぐっ!?!」

ピース渾身の電光石火はジンの腹部に命中、ジンは後方へ軽く吹き飛ばされる。

「痛っ……油断したか」

「やったー」

自分の攻撃がジンに命中した事を喜ぶピース。余程嬉しかったのか、飛び跳ねて喜んでいる。

「やったねピース君！」

「さすがだぜピース！」

ピースの所にテイルとジグザグマが駆け寄る。

「ジン兄ちゃん、約束だよ？ 一発でも攻撃を当てる事が出来たら、ピースの兄ちゃん達の願いを聞くんだよね？」

フシギダネのシードがジンに言う。

「……………しょうがねえな、約束は守る。それでお前ら、俺に頼みつてなんだ？」

「あっうん、実はね……………」

ピースは今までの事をジンに説明する。

ヘルについて、自分達はヘルを追っている事、そしてヘルに負けないよう強くなる為にジンを訪ねた事……………全てをジンに話した。

「……………なるほどな」

腕組みをしながらピースの話を聞いていたジンは頷く。

「解った、お前達の頼み聞いてやる」

「ありがとうジンさん！」

頼みを聞いてくれると解り、ピースはお礼を言う。

「だが今日は無理だ。特訓するには色々準備があるから明日の朝、ここにもう一度来てくれ」

ピース達にそう言った後、ジンは何処かへと行ってしまった。

「行っちゃった……明日と言われても僕達、泊まる宿が無いんですけど」

苦笑いするテイル。

「だったらオイラの家に来る？」

シードがピース達に聞く。

「えっ良いの？」

「ピースの兄ちゃん達なら歓迎さ。来るかい？」

もう一度ピース達に聞くシード。

「じゃあ、お言葉に甘えようかな」

「解った！ オイラの家はこっちだよ！」

シードを先頭に、ピース達はシードの家に向かって歩き始める。

シードの家に向かってピース達が移動している時、一人ジンはある場所へとやってきていた。

そこは草の国を治める王が住む、大きな森だ。

「おい、何処にいるんだ？ 出てこいよ」

「そんなに大きな声を出さなくても、もうここにいるよ？」

ジンの背後から突然声が。ジンが振り向くとそこには大きな瞳に背中には小さな羽、頭には二本の触角がある妖精みたいなポケモン……セレビィがいた。

「いつの間に……」

「そろそろ来る頃だと思ってたからね。ちょっと気配を消して近寄ってみました」

とても王とは思えない程、子供のような笑顔で言うセレビィ。

「……また時渡りして未来を見てきたな？」

「当ったり〜 だってせっかく祭りで盛り上がったのにすぐ会議なんだもん。会議やってもつままないし」

「お前な、仮にも王だろ？ 会議つままないとかそついう事言つなよな」

呆れた表情を浮かべるジン。

「は〜い」

「……本当に解ってるのかよ？ まあ良い、それより頼みがある。例の場所、用意しといてくれないか？」

腕組みをしながらジンはセレビィに頼み事をする。

「オツケ〜、今回はどうする？ いつも通りで良いの？」

セレビィの問いに、ジンは頷いて応える。

「明日の朝には始めたい。それまでに用意出来るか？」

「僕を誰だと思ってるの？ すぐに用意出来るさ。じゃあ、明日待ってるよ」

そう言ってセレビィは森の奥に向かって飛んでいった。

第14話 一撃を決める！ ピースVSジン！（後書き）

セレビィ

「本編でようやく僕登場」

ジン

「本当にお前……」

セレビィ

「本当に王かよってツッコミは受け付けないよ（笑）」

ジン

「……（汗）」

王様っぽくないキャラにしたは良いけど……ちょっと子供過ぎたかな？（汗）

ピース

「でも仲良くなれそう よろしくねセレビィさん」

セレビィ

「うんよろしく〜」

もう仲良くなってる（汗）

テイル

「作者さん、今回はどうなるんです?」

今回はね、ジンがいつも使用しているとある場所でピース達の特訓

が始まるのさ。

セレビィ

「ふっふっふ、君達はあの特訓に耐えられるかなあ？」(笑)「

ティル

「一体どんな事されるんですか(汗)「

秘密(笑)

セレビィ

「秘密さ(笑)「

ジン

「秘密だな」

ティル

(なんなのこの人達は(汗)(

ピース

「気になるな」

ジグザグマ

「それよりリングゴ何処だよ？」

君って奴は(汗)

第15話 特訓開始！（前書き）

もう12月……今年も今月で終わりだねえ。

ピース

「そうですねえ」

ティル

「作者さん、元旦になったらお年玉くださいよっ」

ピース

「あっ僕も欲しい」

はいはい（汗）

第15話 特訓開始！

ジユプトルのジンと特訓の約束をする事が出来たピース達。特訓の準備に時間が掛かるといふ事で、ピース達はシードの自宅で準備が出来るまで一晩泊まる事に。

現在の時刻は午前七時……天気は雲一つ無い快晴だ。

「ふあ〜……うーん良く寝た〜」

欠伸あくびをしながら大きく伸びをし、ゆつくりと身体を起こすピース。

「……俺のリンゴ〜 ……むにゃむにゃ」

ピースの隣では口から涎よだれを流しながら気持ち良さそうに寝ているジグザグマが。

「夢の中でもリンゴ食べてるんだ……」

そんなジグザグマを見て苦笑いするピース。

「……うーん」

「あっおはようテイル」

すぐ近くで寝ていたテイルがゆつくりと上体を起こす。まだ眠いのか、目が完全に開かれていない。

「うっ、背中が痛い……やっぱりふかふかのベッドじゃないと良く寝れないよ……」

起きて早々文句を言うテイル。ピース達が泊まっている部屋には草で敷き詰められたベッドがあり、そこでピース達は眠っていたのだが……都会育ちのテイルには合わなかったようである。

「兄ちゃん達おはよう〜！」

とそこにシードが元気良く部屋に入ってきた。

「あっおはようシード」

「……おはよう」

笑顔で答えるピースとは対照的に、眠そうに答えるテイル。

「今ちようど朝食の準備が出来たんだ。特訓に行く前に腹^{はら}_いぢえしといた方が良いだろ？」

「飯っ!?!」

今まで寝ていたジグザグマが、朝食という言葉聞いて飛び起きる。

「本当に食いしん坊さんなんだからジグザグマは……」

苦笑いするしかないピースであった。

それからしばらくして、シードの家で朝食を済ませた。ピース達はジンと待ち合わせをした場所に向かって移動していた。

ちなみにピース達が食べた朝食は野菜を中心とした、なんとも身体に健康的な物であった。

そんな朝食を食べている時に、テイルが心の中で「朝食はやっぱりパンとコーヒーが良いよね」などと思っていた事はピース達はまだ知らない。

「ところでさ、なんでお前まで一緒に来るんだ？」

ジグザグマは隣にいるシードに聞く。

「兄ちゃん達の特訓が気になるからに決まってんじゃないか」

ジグザグマの問いに答えるシード。だが本当は、親の農作業を手伝うのが嫌でピース達についてきているだけだったりする。

「本当はご両親の農作業を手伝うのが嫌なだけだったりして？」

「ギクツ！？」

テイルの何気ない発言に身体をビクツとさせるシード。

「って凶星だった？」

適当に言った事が本当だったようで、テイルは少し驚いている。

「あつ皆見えてきたよ」

ピース達は昨日ジンと出会った場所にやって来た。もうすでにそこにはジンが待っていた。

「来たか。待ってたぞ」

「ってジン兄ちゃん、またお酒飲んでのの？」

ジンの右手には酒が入った一升瓶いっしょうびんが握られていた。すでに中身が半分になっている。

「好きな酒を飲みながら待ってちゃ悪いのか？」

「いや別に悪くないけどさ……でも飲みすぎには注意だよ？」

心配そうな表情をしながらシードは言う。

「解ってるさ……さて、じゃあ行くかお前ら」

そう言ってジンは歩き始める。

「ここでもやるんじゃないんですか？」

ジンに聞くピース。

「ここじゃない。まあついてきな」

ジンに言われるまま、ピース達はジンについていった。

しばらく歩いて、ピース達はセレビィが暮らす深い森の中にやって来た。

「この森ってこんなに深かったんだ……」

「あれ？ シードはこの森に来た事無いの？」

首を傾げるピース。

「当然だ。この森は王が住む森だからな。一般の奴はここに入る事を禁じられているんだ」

ジンがピース達にこの森の事を説明する。

「でも僕的には皆自由に入ってきてもらいたいんだけどね」

突然、ピース達の背後から声が。皆が振り向くとそこにはセレビィがいた。

「お前はまたいきなり……」

「へへへ、どう？ 驚いた？」

子供みtainな笑顔を浮かべるセレビィ。

「も、もしかして王様？」

ピースの問いにセレビィは頷いて応える。

「初めまして、僕はセレビィ。よろしくね皆」

「よ、よろしく……」

王とは思えない軽いセレビィに、少し戸惑うピース。

「おいセレビィ、ちゃんと準備は出来ているのか？」

（王様にタメ口！？）

王であるセレビィに向かってタメ口のジンに驚くティル。

「当然だよジン。さあ皆、特訓する場所はこの先だよ」

セレビィは森の奥に向かって飛んでいく。

あとを追いかけるようにジンが歩き出す。

「……この国の王って軽い奴だなあ」

「た、確かにそうだけどジグザグマ、そういう事言っちゃダメだつて」

苦笑いするピース。

「それより王様相手にタメ口のジンさんにビックリだよ」

「オイラもそれには驚いてるよ」

テイルとシードは王様にタメ口で話すジンに驚いているようだ。

「おいお前ら、早く来ないと置いていくぞ?」

ジンがピース達に呼び掛ける。ピース達は慌ててジン達を追いかける為に走り出す。

それからピース達はさらに森の奥へと進んでいき、ようやく目的地に到着した。

「これって……バトルフィールド?」

ピース達の目の前には周りを木々で囲まれたバトルフィールドが存在した。

「ここが特訓する場所だよ。いつもここでジンは特訓してるんだ。まあ、準備とかするのはいつも僕なんだけどね。」

隣にいるジンを横目で見ながらセレビィは言う。

「お前には感謝してるって。お前の協力が無ければ、今の俺はいないんだからな。」

「あの……ここでどんな特訓をするんですか？」

テイルがジン達に質問する。

「特訓は色々あるが……。」

「まあ百聞は一見に如かずっていうし、実際にやってみてもらった方が早いと思うよ?。」

笑みを浮かべながらセレビィは言う。

「確かにそうだな。じゃあピース、まずはお前からだ。バトルフィールドに入れ。」

「う、うん。」

ピースはバトルフィールドに入る。

「じゃあセレビィ、始めてくれ。」

「オッケー。」

セレビィは両手を合わせ、目を閉じて意識を集中し始める。刹那^{せつな}、セレビィの身体が光り輝き始めた。

「な、何してるの？」

「セレビィの事は気にするなピース。それより、そろそろ相手が現れるぞ」

「えっ？」

ジンがそう言った時、突然森の方から何かが向かってくるような足音が聞こえてきた。

ピースはじーっと目を凝らして森を見つめる。

そしてピースは足音を出していた正体を見つける。

「な、何あれ!？」

ピースが驚きの声を上げる。それと同時に森の中から足音を出していた者が姿を現す。

それはいくつもの植物の蔓が束になってまるで生き物みたいに動いている。姿はポケモンのフシギバナに近い。

「セレビィは森の守り神とも言われているポケモンだ。だから植物をああいう風にして操ったりする事も出来る」

「まさかあのお化けみたいな奴と戦うのが特訓!？」

「数多くある特訓のうちの一つだ」

淡々と答えるジン。

「今からそいつはお前を捕まえようとしてくる……ピース、お前はそいつに捕まらないように五分間逃げ切るんだ」

「逃げ切る……ってそれだけ？」

頷いて応えるジン。

「こいつはフットワークを鍛える為の特訓だ。お前は中々すばしっこいからな、それをさらに鍛えるんだ」

特訓の目的を説明するジン。

「フットワークを鍛える……解った、やってみる！」

ピースはいつでも回避出来るように構える。

「セレビィ、やってくれ」

ジンがそう言つと、セレビィの身体から放たれている光がさらに強くなる。刹那、お化けフシギバナがピースを捕まえようと突進してきた。

いよいよ特訓の始まりである。

第15話 特訓開始！（後書き）

ピース

「お化け出たーっ！（汗）」

落ち着きなさいって（汗）

テイル

「お化けとか、そんな非科学的なのがいる筈無いよ」

ピース

「お化けは絶対いるよ！」

テイル

「いないよ」

ピース

「いる！」

テイル

「いない！」

はいはいちょっと静かにしなさいって（汗）

えっと、今回はピースがあのお化けフシギバナから逃げ切る事が出来るのか解りますよ〜。

第16話 それぞれの課題（前書き）

昨日がアスカ&レオンでー昨日がアレク、そして今日はピース……
1日ピースで更新するの疲れるな（汗）

ピース

「頑張つてよ作者さん」

はっ、出来る限り頑張ってみるよ。

第16話 それぞれの課題

セレビィが植物を操って作り出した疑似フシギバナがピースを捕まえようと突進してくる……しかしそのスピードはお世辞にも速いとは言えず、ピースは楽に回避してしまう。

(なんか……思ったよりも動きが遅いね、あのお化けフシギバナ)

想像していたよりも遅いスピードに拍子抜けしてしまうピース。そして疑似フシギバナはUターンして再びピースに向かって突進していく。

「ほいっ」と

ピースは軽く横に向かってジャンプして、楽に疑似フシギバナを回避する。

「……ねえジンさん、これ本当にフットワークの特訓になるの?」

疑似フシギバナの遅さにさすがに疑問を感じたピースはジンに聞く。

「そんな事を聞く暇があるなら目の前の敵に集中しろピース。油断していたら捕まるぞ」

厳しい表情をしながらジンは答える。

「でもあんなに遅いんだったら捕まる訳……」

捕まる訳がないとピースが言いかけた時、ピースを捕まえようと疑似フシギバナが背中から二本つるのムチを伸ばしてきた。

「わっ!?!」

ピースは咄嗟とつぱにバックステップしてつるのムチを回避する。

「ビックリした〜……あれって技も使ってくるの!?!」

「当然だ、そうでなければ特訓にならないからな。ほらピース、そいつに集中しないと本当に捕まるぞ」

横目で疑似フシギバナを見ながらピースに言うジン。ピースが疑似フシギバナに視線を向けると、疑似フシギバナはつるのムチを伸ばそうとすでに構えていた。

「フットワークの特訓になるってこういう事だったんだ……よし、絶対捕まるもんか!」

やる気になったピースはいつでも回避出来るように身構える。

次の瞬間疑似フシギバナはつるのムチを二本、ピースに向かって伸ばしてきた。

「電光石火!」

ピースは向かってきたつるのムチを素早い身こなの熟しで回避する。

その後ピースは捕まらないように電光石火のスピードを維持したままフィールドを駆け回る。

疑似フシギバナはピースを捕まえようとつるのムチを伸ばすが、ピースは走りながら左右にステップして回避する。

「へー、結構すばしっこいねえ彼。じゃあ、こんなのはどうかな！」

疑似フシギバナを操っているセレビィは強く念じ始める。すると、疑似フシギバナの背中からさらにつるのムチが現れてピースに向かっ
つていく。

その数は十本。

「負けるもんか！」

ピースはさらにスピードを上げ、捕まらないように左右にステッ
プしながら次々とつるのムチを回避していく。

「良いぞピース！ その調子だぜ！」

ジグザグマはピースに声援を送る。

（どうやらスピードは問題ないようだ。あれだけの攻撃をしつ
かりと回避出来ている。だが……）

ジンは真剣な眼差しでピースを見つめる。

「はあ、はあ……」

特訓を始めて約二分が経過、ピースの表情が少し険しくなっ
てきた。

（体力に問題があるようだ。あの様子だと一分もしないうちに捕
まるな）

「わあっ!?!」

ジンがそう心の中で呟いた時、足に疲れが溜まっていたピースが転倒してしまう。

「今だ!」

セレビィは強く念じて疑似フシギバナにつるのムチを伸ばさせる。無数のつるのムチはピースに巻き付き、ピースを宙吊りにする。

「はい、捕まえた」

子供みたいに笑みを浮かべるセレビィ。

「はあ、はあ……あゝ捕まっちゃった」

悔しそうにしているピース。そんなピースにジンがゆっくりと歩み寄る。

「スピードは申し分ない。しっかりと攻撃を回避出来ているからな。だがお前は体力が無い。まずは体力を付ける事、それがお前の課題だ」

「はあ、はあ……わ、解ったよジンさん」

息切れしながらも頷いて応えるピース。

「よし、次はお前だ」

ジンはジグザグマを指差す。

「よっしゃー、気合い入れるぜ！」

気合い充分なジグザグマ。元気良くバトルフィールドへと入っていく。

「大丈夫ジグザグマ？ これ思ってた以上にキツイよ？」

「俺を甘く見んなよピース、俺の華麗な動きで五分間逃げ切ってるぜ！」

特訓が始まってから僅か十秒後、ジグザグマは見事に疑似フシギバナに捕まっていた。

「こ、こんな筈では……」

すぐに捕まってしまった事が恥ずかしいのか、顔を赤面させるジグザグマ。

「お前は遅すぎる。しっかりとフットワークを鍛える必要があるな」

「っ……」

遅すぎると断言されてしまい落ち込むジグザグマであった。

「次はお前だ」

ジンはテイルを指差す。呼ばれたテイルはジグザグマと入れ替わりでバトルフィールドへと入る。

「いつでも始めてくれて良いですよ」

そう言ってテイルはゴーグルを顔に掛ける。

「じゃあいくよ、それっ！」

セレビィが念じると、疑似フシギバナはつるのムチを二本テイルに向けて伸ばした。

「これ位なら余裕で避けられますよ」

テイルは軽くバックステップしてつるのムチを回避する。

「じゃあこれはどうかな！」

セレビィは疑似フシギバナに四本、つるのムチを伸ばさせる。

「コンピューター分析開始」

テイルはゴーグルにあるボタンを押し、コンピューターを作動させる。

「分析完了、右！」

テイルは右方向に素早く飛び、つるのムチを回避する。

「まだまだいくよ〜！」

四本だったつるのムチが八本に増え、テイルに襲いかかる。だがテイルは全ての攻撃を見事に回避していく。

「テイルの奴ズルいよなあ、コンピューター使って何処に攻撃が来るのか解るから簡単に避けられるんだからよお」

自分はすぐに捕まってしまったので、テイルが中々捕まらないのを見てふてくされているジグザグマ。

「……いや、例え攻撃が来る方向が解っていてもそれを回避出来る運動能力が無ければ意味が無い。あいつはそれが出来る程、運動能力が抜群のようだな」

テイルの運動神経が良い事をジンは見抜く。

それから五分が経過、テイルは疑似フシギバナの攻撃を全て回避

してしまった。

「よしそこまでだ。テイル、お前は合格だ」

「ふう〜、やっと終わった〜」

額から流れる汗を拭うテイル。

「凄いなあテイル！」

自分がクリア出来なかった特訓をクリアしたテイルを尊敬の眼差しで見つめるピース。

「テイル、次はお前のパワーを見せてくれないか？」

「パワー、ですか？」

首を傾げるテイル。

「セレビィ、頼む」

「はい」

セレビィはまた念じ始める。刹那^{せつな}、地面から太い木が生えてきた。

「さ、さすが森の神、なんでもありだね……」

苦笑いするピース。

「リーフブレード！」

ジンは両腕にある葉っぱにエネルギーを集める。すると葉っぱはエネルギーを帯びたまま鋭くなり、まるで鎌のようになる。そしてジンはリーフブレードで木を攻撃、それを丸太にしてしまう。

「これ位が良いだろう」

丸太はちょうどジンと同じ位の高さまでカットされた。

「さあテイル、この丸太をお前の攻撃で破壊してみる」

「解りました……アイアンテール！」

テイルは自分の尻尾を鋼のように硬くして丸太に叩きつける。しかし、丸太には傷一つ付かなかった。

「か、硬いなあこの丸太……」

自分の尻尾を押さえながら呟くテイル。

「どうした、終わりか？」

「ま、まだですよ！ 10万ボルト！」

テイルは丸太に向かって強力な電撃を放つ。しかし丸太は焦げるだけで、破壊する事は出来なかった。

「やはりな、お前はスピードはあるがパワーが無い。パワーを付ける事がお前の課題だな」

腕組みしながらジンは言う。

「よし、少し休憩してからお前達に合わせた特訓をする。まずピースはスタミナ、次にジグザグマはスピード、最後にテイルはパワー……それぞれを鍛える為の特訓をしてやる。言っておくが、俺は厳しくやるからそのつもりでな」

『はい！』

ピース達は元気良く返事をする。

「ねえジン兄ちゃん、オイラにもなんか手伝わせてよ」

「……じゃあ俺の家から酒を持ってきてくれ。これの中身が無くなつちまった」

「え、オイラパシリ？」

不満そうな顔をするシードであった。

第16話 それぞれの課題（後書き）

ピース

「ジグザグマがあっという間に（汗）」

まあ彼だから（笑）

ジグザグマ

「くそ〜っ！ 次は絶対逃げ切つてやるっ〜！」

テイル

「パワー不足って言われちゃったよ（汗）」

まあテイルはメカ開発とかサンダーボルトに乗ったりとか、力関係無い事しかやってないもんねえ（汗）

シード

「なんでオイラパシリ（汗）」

その枠しか出番なかったからね（汗）

さて次回はそれぞれの課題をクリアする為にジンの厳しい特訓が……

ピース

「あんまり厳しいのヤダ〜（汗）」

そんな事言わないの（汗）

第17話 草の国に迫る影（前書き）

ピース

「わっ、なんか意味深なタイトル！」

そろそろ進展があった方が良さだろーっと思っ
てね。

第17話 草の国に迫る影

ジンから言い渡された課題……ピースはスタミナ強化、ジグザグマはスピード強化、そしてテイルはパワー強化。

それぞれの課題をクリアする為、ジンによるピース達の特訓が開始された。まずピースは……

「はあ、はあ、はあ……ジ、ジンさん……あとどれ位走れば良いの？」

ピースは身体にパワーウエイトを付けた状態で広いバトルフィールドの周りを走らされている。

「あと十周だ」

「じ、十周!?!」

すでにピースはバトルフィールドの周りを十周走っていたが、ジンはさらに十周走れと言い出す。

「強くなりたいなら、これ位当たり前だ。ほら、喋ってる暇があるならさっさと走れ!」

「は、はい!」

ピースは走るペースを上げる。それを見たジンは、次にテイルの所へと向かう。テイルはセレビィと技の力比べをしていた。

「10万ボルト!」

「ソーラービーム！」

テイルは身体から電撃を放出、セレビィは両手を使ってビームを放つ。

二つの技はぶつかり合う。

「くっ！」

「さあ、頑張って僕の攻撃を押し返してごらん」

必死にソーラービームを押し返そうと踏ん張るテイル。それに比べセレビィは余裕の表情だ。

「く、くそっ……うわあ!？」

頑張っていたテイルだが、ここでついに力負け。10万ボルトは弾かれ、ソーラービームがテイルの真上を通過する。

「まだまだだねえテイル君」

「だ、だって僕の10万ボルトに対して草タイプの大技ソーラービームを使ってるじゃないですか！ 力負けするに決まって……」

「僕半分以下の力で撃ってるけど？」

半分以下……その言葉を聞き、テイルは反論出来なくなる。

「ほらテイル君、次いくよ」

セレビィはソーラービームのチャージを始める。

「もう……解りましたよ！」

テイルも再び10万ボルトを放つ体勢に入る。

「……こっちはセレビィに任せて問題は無さそうだな。さてあいつは……」

ジンはジグザグマの方に視線を向ける。

「ほら、オイラはこっちだよ！」

「待てこらーっ！」

足首にパワーアングルを付けたジグザグマがシードを捕まえようと必死になっていた。

シードは何か手伝いたいとジんに頼み込み、ジグザグマの特訓に付き合う事になったのだ。

「もらったあ！」

ジグザグマはシードを捕まえようと飛びかかる。

「あらよっつ！」

だがシードは横にステップしてジグザグマを避ける。ジグザグマは顔から地面にぶつかる。

「痛たたた……」

両手で鼻を押さえ、痛みに耐えるジグザグマ。

「ジグザグマの兄ちゃん、オイラはこっちだよ！ 鬼さんこっちら、手の鳴る方へ」

シードは完全に遊んでいる。

「あんにやる〜……ぜってー捕まえたる！」

ジグザグマはシードを捕まえようと全速力で突っ込んでいく……だが、パワーアングルが重たいせいかスピードが遅い。またあっさりとシードに避けられてしまう。

「……あいつ完全にシードに遊ばれてんな……」

少々呆れ顔になりながら、ジンは手に持っていた酒が入った一升瓶を口に運び、酒を飲む。

「ジ、ジンさん……終わったよ〜……」

そこへ合計二十周走り終えたピースがやってくる。かなり疲れたようで、その場に座り込んでしまう。

「思ったたよりも早かったな。よし、次の特訓を始めるぞ」

「え〜、もう次〜!？」

凄く嫌そうな顔をするピース。

「強くなりてえんだろ？」

「それは……そうですけど……」

「なら特訓あるのみだ。次はそのパワーウエイトを付けたまま、俺とバトルして五分間耐えきるんだ。早速始めるぞ」

ジンは戦闘体勢に入る。ピースも渋々戦闘体勢に。

それからしばらくして……

「も、もう限界……」

特訓を終えたピース達は疲れ果ててその場に倒れ込む。結局ティルはセレビィの攻撃を押し返す事が出来ず、ジグザグマはシードに遊ばれ、ピースはジンとの五分間耐久バトルに耐える事が出来なかった。

「これでバテているようじゃ、強くなれねえぞお前達」

腕組みしながらジンは言う。

「まあでも、初日にはは頑張った方だと思っよ？ それに楽しかったし」

「オイラも楽しかったぜ」

特訓を楽しんでいたようで、セレビィとシードは笑みを浮かべている。

『こっちはちつとも楽しくない……』

口を揃えて言うピース達。

「とりあえず今日の特訓はここまでだな。明日も厳しくやるから、覚悟しなよ？」

ピース達にそう言うと、ジンはその場から離れていく。

「あれ、ジン兄ちゃん何処行くの？」

「酒が無くなった。新しいの買いに行くんだよ」

シードにそう言うと、ジンは行ってしまった。

「またジン兄ちゃんはお酒かよ……」

呆れた表情をするシード。

「ジンらしいよね。さあ君達、もうすぐ日が暮れるから家に帰った方が良いでしょう」

「解ったよセレビィ様。ピースの兄ちゃん達、帰ろうぜ」

『は〜い……』

疲れ果てたピース達は、シードと一緒にシードの家へと向かっていった。セレビィはピース達の姿が見えなくなるまで見つめていた。

「さて、これから忙しくなるね……今夜は騒がしくなるよ」

何かを決意したような表情をして、セレビィは森の奥に飛んでいた。

完全に太陽は沈み、代わりに月の光が照らす夜の時間。草の国に住むポケモン達は皆寝静まっている。もちろんピース達も……

「……ここが“リーフ・オーブ”がある草の国か……」

上空から草の国を見下ろす一人のポケモンが。そのポケモンは“サンダー・オーブ”と“ノーマル・オーブ”を奪い取ったヘルだった。

「噂通り、田舎の国だなここは……」

「でも良い国だよ？」

突然ヘルの後から声が。ヘルが振り向くと、そこにはセレビイがいた。

「そろそろ来る頃だと思ってたよ。ミュウツীরヘル」

「お前は……この国の王か」

「そういう事」

子供みtainな笑顔で答えるセレビイ。

「……さっきの口振りからすると、俺が来る事を知っていたようだな？」

「まあね。僕は過去や未来にタイムスリップする事が出来るからね」

「ほう……ならば、これから何が起きるのかも知っているのか？」

セレビィに質問しながらヘルは戦闘体勢に入る。

「もちろん……君の敗北する未来をね！」

第17話 草の国に迫る影（後書き）

ピース

「またヘルが来た」(汗)「

テイル

「寝てる時に来るとかタイミング悪いよ」(汗)「

まあヘルだし(汗)

今回はセレビイとヘルが対決だよ。

シード

「セレビイ様負けないよね?」

……それは次回のお楽しみさ(笑)

第18話 セレビィVSヘル(前書き)

ピース

「セレビィ、勝てるかなあ？」

セレビィ

「解んない」

いや解んないって(汗)

第18話 セレビィVSヘル

「俺が敗北する未来だと？ ふつ、虚仮威こけあひしだな」

「虚仮威しかどうか、試してみるかい？」

ヘルを挑発するセレビィ。

「……そうさせてもらおう！」

そう言った刹那せつな、ヘルは素早い動きでセレビィに接近していく。

「シャドーボール！」

接近しながらヘルは両手で黒いエネルギー弾を作り出し、セレビィに向けて放つ。

「エネルギーボール！」

向かってきたシャドーボールに対して、セレビィは両手で緑色をしたエネルギー弾を作り出して放ち、シャドーボールにぶつける。

エネルギーボールとシャドーボールがぶつかり合った瞬間爆発が発生する。爆発と同時に発生した爆煙によりセレビィはヘルの姿が見えなくなる。

「炎のパンチ！」

爆煙の中を突っ切ってきたヘルは右手に炎を纏まとわせ、セレビィに殴りかかる。

「守る！」

セレビィは自身をエネルギーの膜で包み込み、炎のパンチから身を守る。しかし、ヘルは攻撃は強力でセレビィは大きく後方へ吹き飛ばされる。

「マジカルリーフ！」

すぐに体勢を立て直したセレビィは無数の葉っぱみたいな形をしたエネルギー弾を作り出し、ヘルに向けて放つ。

「そしてサイコネシス！」

さらにセレビィは強く念じる事でマジカルリーフをコントロール、サイコネシスの力でコントロールされたマジカルリーフはまるで生き物みたいな動きをしながらヘルに向かっていく。

「ならば俺も似た攻撃で対抗しよう、シャドーボール！ サイコネシス！」

ヘルはシャドーボールを数発放ち、さらにそれをサイコネシスでコントロールする。

お互いがコントロールしたシャドーボールとマジカルリーフはぶつかり合い爆煙が発生する。

「ならこれはどうかな？ チャージビーム！」

セレビィは人差し指の先に電気エネルギーを集め、それを一気に放出。

「サイコキネシス！」

チャージビームにサイコキネシスを使うセレビィ、チャージビームはまるでムチのように撓^{しな}り始める。

「完成　いくよ、チャージウィップ！」

チャージビームをムチに変化させてヘルを攻撃するセレビィ。

「守る！」

ヘルは守るを使い、これを防御する。

「守って正解だよ。このチャージウィップ、触れるだけで身体に電流が流れるからね。それ、もう一本！」

セレビィは左手でもチャージビームを放ち、それをサイコキネシスでコントロール……二本のチャージウィップが完成した。

「面白い攻撃方法だが……その攻撃が届かない範囲にいれば問題無い。シャドーボール」

セレビィから離れたヘルは両手でピンポン玉程の小さなシャドーボールを無数に作り出す。

（何か仕掛けてくるね）

そう思ったセレビィは二本のチャージウィップを維持したまま身構える。

「この小さなシャドーボール一つ一つが通常のシャドーボールと同じ威力を持っている。お前に防ぐ事が出来るか……シャドーガトリング！」

小さなシャドーボールをまさにガトリングの如く連射してセレビイを攻撃する。

「全部撃ち落とす！」

セレビイは二本のチャージウィップを素早く操り、向かってくるシャドーボールをどんどん撃ち落とすいく。

シャドーボールがチャージウィップに撃ち落とされる度、小規模の爆発が発生する。

それと共に夜の草の国に爆発音が鳴り響く。
爆発音に気づいた国の住人達は目を覚まし、家から飛び出して何事かと慌てた様子で周囲を見回している。その中にはピース達もいた。

「なんなのこの爆発音!？」

辺りを見回して爆発音がする場所を探すピース。そしてまた爆発音が国中に鳴り響く。

「あつ、ピース君上！」

テイルは上の方を指差す。ピース達はテイルが指差した方を見つめる。

「へ、へル!？」

「セレビイ様もいるよ!？」

空中でバトルを繰り広げているセレビイ達を見て驚くピースとシード。

そして同じ頃、自宅にいたジンもまた、セレビイがヘルとバトルしている姿を目撃する。

「あいつがヘルか……確か奴はオーブを狙ってるんだっただな。セレビイが負けるとは思えないが……念の為、行つとくか」

そう言つてジンはセレビイが住んでいる森に向かつていった。

一方のセレビイは、ヘルが放つたシャドーガトリングを見事に全て撃ち落とす事が出来た。

「ほう、攻撃を防ぎきつたか」

「僕を見縊^{みくび}つてもらつちゃ困るね。これでも王なんだから」

子供みたいに無邪気な笑みを浮かべるセレビイ。

「さて、そろそろ終わらせようか。もうすぐ君が敗北する未来が待ってるよ!」

セレビィはヘルに向かって突っ込んでいく。

「チャージウィップ!」

「調子に乗るな! サイコネシス!」

ヘルはサイコネシスを使い、セレビィのチャージウィップを掻き消してしまった。

「俺が敗北するなどありえん! シャドーボール!」

「ぐっ!?!」

ヘルが放ったシャドーボールはセレビィに直撃、セレビィは後方へ吹き飛ばされるがなんとか耐えて体勢を立て直す。

「ふっ、どうやら俺の敗北ではなく貴様の敗北が待っているようだな」

ヘルはゆっくりとセレビィに近づいていく。

そして両手に炎を纏わせ、炎のパンチを準備する。

「良い物を見せてやる。貴様のチャージウィップ……それを強力にした攻撃方法だ。サイコネシス」

ヘルはサイコネシスを使って両手に纏わせた炎をコントロール、炎は徐々に形を変えてまるで剣のようになっていく。

「フレイムソード……そう呼ぶのでしょうか。これで貴様を倒す」

「そう……簡単にはやられないよ……チャージウィップ!」

セレビィはヘルに向かって再びチャージウィップを放つ。

「もうその技は見切った!」

ヘルは双剣のフレイムソードでチャージウィップを切り裂く、そして一気にセレビィとの距離をつめる。

「……散れ!」

ヘルはフレイムソードでセレビィを斬りつける……刹那、セレビィは炎に包まれその身を焼かれる。そしてセレビィはそのまま地上へ落下していった……

「俺が敗北する未来……ふん、やはり虚仮威しだったな。さて、この国のオーブをいただくとするか」

ヘルはオーブがある森に向かって飛んでいった。

「そんな……セレビィ様が、負けた……」

セレビィが敗北したのを見て呆然とするシード。

「許せない……今度こそヘルを倒す!」

ピースはヘルが飛んでいった森に向かって走り出した。

「あっ、待てピース!?」

ジグザグマとテイルは慌ててピースを追いかける。

「……ここか」

ヘルは森の一番奥へとやってきた……そこには、“リーフ・オーブ”が収められている小さな祠があった。だがその祠の前に立ち塞がるポケモンがいた……ジンである。

「セレビィを……倒したのか？」

「だとしたらなんだ？ 雑魚に用は無い、そこを退け」

ジンを睨みつけるヘル。だがジンはそれに全く動じず、手に持っていた小さな瓢箪ひょうたんの蓋を開けて中にある酒を飲み始める。

「退けと言われて退く程、俺は素直じゃねえんだよ。悪いが、お前にオーブは渡さねえ」

ジンは戦闘体勢に入る。

「……俺の邪魔をするか……ならば仕方ない、貴様を倒す」

第18話 セレビィVSヘル（後書き）

セレビィ

「ごめん、負けた」

ピース

「負けたのになんで笑ってんの？（汗）」

セレビィ

「でもヘルが敗北する未来があるのは本当だよ？
それがいつなの
かは……」

ネタバレ禁止ーっ！（汗）

セレビィ

「やっぱこ？（笑）」

当然でしょうに（汗）

第19話 リーフ・オーブを守れ！ 前編（前書き）

ピース

「作者さん、お年玉」

あゝ、はいはい（汗）

そういえばまだ渡してなかったね。ほい。

ピース

「わ〜い」

お年玉、ちゃんと考えて使いなよ？

ピース

「うん」

第19話 リーフ・オーブを守れ！ 前編

「一瞬で終わらせてやる。波動弾！」

ヘルは両手でエネルギー弾を作り出し、ジンに向けて放つ。

「リーフブレード！」

ジンは右腕にある葉っぱにエネルギーを集め、剣のように鋭く尖らせる。そして向かってきた波動弾をリーフブレードで一刀両断にする。

「……一瞬で終わらせるんじゃないかったのか？」

リーフブレードを維持したままヘルを睨むジン。

「ほう……雑魚だと思っていたが、少しはやるようだな？」

「人を見た目だけで判断してんじゃないやねえよ。いくぜ！」

素早い身の熟^{こな}してヘルに接近していくジン。

「リーフブレード！」

「守る！」

ヘルは自身をエネルギーの膜で覆う。構わずジンはリーフブレードで攻撃するが、リーフブレードは守るに弾かれてしまう。

「ちっ、タネマシンガン！」

素早くバックステップしてヘルから離れたジンは、反撃で口から無数のエネルギー弾をマシンガンの如く吐き出し、ヘルに向けて放つ。

「サイコキネシス！」

ヘルは右手を前に翳^{かき}して強く念じ始める。すると、ヘルに向かってきていたタネマシンガンがまるで時が停まったかのようにその場で静止する。

「これは返すぞ」

また強く念じ始めるヘル。刹那^{せつな}、静止していたタネマシンガンはジンの方に向かっていく。

「リーフブレード！」

ジンは両腕にある葉っぱにエネルギーを集めてリーフブレードを発動、二刀流で向かってきたタネマシンガンを全て打ち消してしまふ。

「炎のパンチ！」

いつの間にか接近していたヘルは右手に炎を纏^{まと}わせ、ジンを殴るうとする。

「くっ！」

ジンはリーフブレードを交差させる事で炎のパンチを受け止める。

「苦手なタイプの技を受け止めたか……だが、いつまで耐えられるかな？」

ヘルは炎のパンチの火力を上げる。少しずつだが、リーフブレードが押し負け始める。

「野郎……これでどうだ！ 嫌な音！」

ジンは耳を塞ぎたくなるような音を発する。

その音を聴いたヘルは思わず技を中断し、両手で耳を押さえつけてしまう。

「もらった、エネルギーボール！」

一気にヘルに接近したジンは両手で緑色のエネルギー弾を作り出し、超至近距離で放ちヘルの腹部に直撃させる。

直撃した瞬間爆発が発生、爆発に巻き込まれないようにジンは高速移動を使って素早く動き、ヘルから離れる。

「……嫌な音で動きを止め、その間に攻撃を叩き込む……良い戦法だが、俺を倒すには力が足りないな」

爆煙の中からヘルが現れ、ゆっくりと歩いてくる。腹部に若干傷があるが、ヘルは平気な顔をしている。

「お前、強いじゃねえか……ふっ」

自分の技があまり効いていないにも拘らず、かかわ何故か笑みを浮かべ

るジン。

（まったく……俺もどうしようもない奴だな。こんな時にワクワクしてきやがったぜ……）

ジンはヘルとのバトルを楽しんでいるようだ。

「何故笑う？ 気でも触れたか？」

「てめえが気にする事じゃねえよ、リーフブレード！」

ジンは二刀流のリーフブレードを発動する。

「……そろそろケリを付けようぜ」

「良いだろ……これで終わらせる、フレイムソード！」

ヘルは両手に炎を纏わせてそれをサイコキネシスでコントロール、炎は剣のように鋭くなる。

「……いくぜー」

ジンは高速移動でヘルに接近、リーフブレードで攻撃する。

「お前の動き、すでに見切っているー！」

ジンが繰り出したリーフブレードをフレイムソードで受け止めたヘル。

そして力任せにリーフブレードを弾き、ジンの体勢を崩させる。

「しまっ」

「終わりだ！」

ヘルがフレイムソードがジンに直撃する。

刹那、ジンは炎に包まれてその身を焼かれてしまっ。ジンはこれに耐える事が出来ず、その場に倒れてしまっ。

「思った以上に時間が掛かったが……まあ良い、これでオーブは俺の……」

「ヘル！」

ヘルがオーブが収められた祠に近づこうとした時に背後から声が振り向くとそこにはピースとテイル、そしてジグザグマがいた。

「あっ、ジンさん!？」

ピースは倒れているジンを見て、思わず声を上げる。

「また貴様らか……お前達もそいつのようになりたいか？」

「よくもジンさんを……」

怒りで身体を震わせるピース。その時、緑色をした今まで見た事がないオーラがピースの身体から出現した。

「許さない……」

オーラの光が増してくる。そしてピースの身体に変化が。茶色の

体色からクリーム色と緑色を基調とした体色に変わり、身体も一回り大きくなり首周りにあったふわふわの毛が無くなってスマートな体型に。

頭には葉っぱのような物が生え、尻尾も葉っぱに近い形に変わる……そこまできてピースの変化は終わる。そこにいたのはリーフィアとなったピースだった。

「僕はあなたを絶対に許さない。ここであなたを倒します！」

戦闘体勢に入るピース。

「ピース君、僕も戦うよ！」

テイルもサンダーボルトに乗り、戦闘体勢に入る。

「俺だってやるぜ！」

ジグザグマも戦闘体勢に。三人でヘルに挑むつもりだ。

「どつちやらこいつと同じ目に遭いたいらしいな……望み通りにしてやる……」

第19話 リーフ・オーブを守れ！ 前編（後書き）

テイル

「ピース君が今度はリーファイアに進化したね」

ピース

「ふわふわのもこもこじゃなくなっちゃった……それと作者さん、なんかこの姿になった途端に寒くなっただけだ（汗）」

まあリーファイアは草タイプだから、寒いのは苦手だからねえ（汗）

ピース

「うう、寒い（汗）作者さん、ちょっと失礼」

あつ、コタツの中に潜り込んだ（汗）

ジグザグマ

「リーファイアになった途端に寒がりになったな（汗）」

まあ仕方ないさ。

あつ、そうだ。

現在Linoさんとの共同合作を連載中ですので、そちらも応援よろしくお願いします。

テイル

「あの主人公、もはや変態ですよね（汗）」

そういう事言わないの（汗）

第20話 リーフ・オーブを守れ！ 後編（前書き）

ピースの冒険、話数がやっと20までできました。

ピース

「この小説、何処まで話数が増えるんです？」

あつ、リーフィアのピースだ。何処までと言われてもわからないよ。でも目標はあるよ。

ピース

「それはズバリ？」

100話を超える！

ピース

「という事はあと80……遠い（汗）」

まあでも、気長にマイペースで更新していったらいつかは出来るさ
（笑）

第20話 リーフ・オーブを守れ！ 後編

「いきます、エネルギーボール！」

リーフィアとなったピースは口から緑のエネルギー弾を吐き出し、ヘルに向けて放つ。

「波動弾！」

それに対してヘルは両手で作り出した青いエネルギー弾を放ち、エネルギーボールにぶつける。

2つの技がぶつかり合った刹那、せうな爆発が発生して爆煙が立ち込める。

「コンピューター作動、目標をセンシング」

テイルはゴーグルに付いていつボタンを押してシステムを起動させる。

すると爆煙で見えなかったヘルにセンサーに反応、ヘルの姿は赤く表示されてテイルには見えるようになる。

「よし！ サンダーボルト、出力全開！」

ヘルの姿を確認したテイルは乗っていたサンダーボルトに電気を送り込み、出力を最大にして爆煙の中へと突っ込んでいく。

「くられ、10万ボルト！」

爆煙の中を突っ切ったテイルは体から強力な電撃を放出し、ヘル

に向かって放つ。

「守る！」

不意を突かれたヘルだが、自身をエネルギーの膜で包み込んで10万ボルトを防御。冷静に対処する。

「まだ俺が残ってるぜ、頭突き！」

いつの間にかヘルに接近していたジグザグマは頭からヘルに突進していく。しかし、この攻撃はヘルが右へステップした事によって回避されてしまう。

「隙あります！」

電光石火で素早く移動していたピースがヘルの背後に回り込んだ。そして尻尾にエネルギーを集め、まるで剣のように鋭く尖^{とが}らせる。

「リーフブレード！」

「アイアンテール！」

ピースは体を回転させてリーフブレードを繰り出すが、ヘルは尻尾を鋼のように硬くしてこれを受け止めてしまう。

「ふん！」

ヘルは尻尾に力を込め、ピースを大きく後方へ吹き飛ばす。吹き飛ばされたピースだが、すぐに体勢を立て直して着地する。

「電光石火！」

すぐさまピースは電光石火で素早く動く。

凄いスピードで真っ直ぐヘルに突っ込んでいく。そのまま突っ込んでくると予想したヘルはピースの攻撃に備えて身構える。

「影分身！」

だが、ピースはヘルの目の前まで来るとそこで方向転換。ヘルの周囲をぐるぐると走り始め、影分身を発動して無数の幻影を作り出してヘルを包囲する。

(ほう……以前より少しは成長したか。何処から攻めてくる?)

焦らずにピースが攻撃を仕掛けてくるのを待つヘル。

「相手はピース君だけじゃないんだよヘル！」

突如頭上から響き渡る声。ヘルが上を見上げるとそこには、サンダーボルトで上昇していたテイルの姿があった。

「離れてるんだピース君！ 雷！」

テイルが10万ボルトよりも強力な電撃を放つと共にヘルから離れるピース。刹那、テイルが放った強力な雷はヘルに直撃する。

「ジグザグマ！ 僕達も攻撃を仕掛けますよ！」

「おう！ シャドーボール！」

「エナジーボール！」

ピースとジグザグマはそれぞれエナジーボールとシャドーボールを放ちヘルに直撃させる。

刹那、凄まじい爆発が発生して爆煙が立ち込める。ヘルは姿は爆煙に包まれて見えなくなる。

だが、ピース達は戦闘体勢を維持したまま爆煙の中にいるヘルを睨み続ける。これ位でヘルを倒せる筈がない……全員そう思っていたからだ。

……ゆつくりと爆煙が晴れていく。

「……少しは出来るようになったようだな」

ヘルはやはり倒れてはいなかった。体にはピース達の攻撃を受けて若干傷が出来てはいるが、平気そうな顔をしている。

「やはり、あれだけじゃ倒れませんか」

「当然だな」

余裕の笑みを浮かべるヘル。刹那、ヘルの体からバチバチとおびただしい量の電気が放出され始めた。その異様な光景を見て、思わずピース達は怯んでしまう。

「俺に攻撃を当てた褒美だ。“サンダー・オーブ”を取り込んだ俺の力を見せてやる」

そう言ってヘルは右手をジグザグマに向けて翳す。

「……散れ」

ヘルの右手から電気を帯びた膨大なエネルギー波が放たれる。それは凄いスピードで向かっていき、ジグザグマは回避する暇もなくそれを受けてしまう。

「ぐっ……あああああ!？」

ジグザグマは耐える事が出来ずその場に倒れてしまう。放たれた攻撃が強力だった為に、ジグザグマの体は所々焦げている。

「ジグザグマ!？」

ピースはジグザグマの名を呼ぶが、ジグザグマはピクリとも動かない。

完全に意識を失っているようだ。

「雷の膨大なエネルギーを圧縮して放った攻撃、まだ名は無いが強力だ。あいつでは耐えれなかったようだな」

倒れているジグザグマを見てヘルは笑みを浮かべる。

「よくもジグザグマを……許さない!」

ピースは電光石火で素早く動き、怒りに任せてヘルに突っ込んでいく。

「マズい!？」

一人で突っ込んでしまったピースを援護する為、テイルはサンダーボルトの出力を全開にして急降下していく。

「リーフブレード！」

一気にヘルに接近したピースはリーフブレードを放つ。しかしその攻撃をヘルは片手で弾き飛ばしてしまふ。

それにより体勢を崩すピース。ヘルはすかさず右手でピースの首を掴み、ピースは宙吊りになる。

「ぐっ!？」

もかくピースだが、ヘルの右手が首から放れる事はない。

「ピース君を放せ！ アイアンテール！」

サンダーボルトから飛び降りたテイルは体を回転させながらヘルの右手にアイアンテールを直撃させる。それによりピースを掴んでいた右手は放れ、ピースは解放される。テイルはピースを抱え、急いでヘルから離れる。

「大丈夫かいピース君？」

「ゲホツゲホツ!？ た、助かったよテイル……」

余程苦しかったようで嘔せ^むてしまふピース。

「……そろそろ終わらせてやろう」

ヘルは右手に膨大な雷のエネルギーを集め始める。さっきジグザグマを倒した技でこの戦いを終わらせるつもりだ。

「……散れ！」

ヘルはピース達に向けて強力な光線を放つ。

攻撃を回避出来ない……そう感じたピース達は思わず目を瞑ってしまふ。だが、いつまで経っても自分達に攻撃が来ない。妙だと思つたピース達は閉じていた目を開ける。

「な、何これ？」

目を開けたピース達が見た光景……それは地面から生えた植物の蔓つるが何本も絡み合つて太い大木のようになり、ヘルが放つた攻撃を防いでいる光景だつた。

「危なかつたねえ2人共。でももう大丈夫だよ」

ピース達の後ろから聞こえてくる声。2人はその声に聞き覚えがあつた。まさかと思ひながら2人はゆっくりと後ろに振り向く。

『セ、セレビイ!?!』

「やあ」

そこにいたのはヘルに倒された筈のセレビイだつた。セレビイがいた事に2人は驚いて思わず声を上げるが、セレビイはいつもと変わらずに子供のよふな笑みを浮かべながら軽く挨拶する。

「お前……何故お前がここにいる？ お前は確かに倒した筈だ」

「確かに倒されたよ、僕の分身が」

子供みたいに無邪気な笑顔を見せながらセレビィはヘルの問いに答える。

「分身……だと？」

「そつ　君が倒したのは僕が身代わりで作り出した分身だったんだよ。良く出来てたでしょ」

ヘルが倒したセレビィ……それは身代わりで作り出した分身だったらしい。それを聞いたヘル、そしてピースやテイルも驚きの表情を浮かべる。

「な、なんで身代わりで作り出した分身をヘルと戦わせたんですか？」

「良い質問だねえピース　僕は過去や未来にタイムスリップする事が出来るんだ。それで僕は未来にタイムスリップして、未来で起きる事を見てきたんだ。その未来では、僕はヘルに敗れ、ピースは力を目覚めさせてリーフィアになるんだけど……結局負けちゃって、ヘルに“リーフ・オーブ”を盗られちゃうんだ」

セレビィは自分が見てきた未来での出来事をピース達に話し始める。

その未来ではやはりセレビィは敗れ、ピースも力を目覚めさせて進化するも結局は敗北してしまうらしい。

「だから僕はその未来を変える為に身代わりで分身を作り、ヘルと戦わせたんだ。結局分身は負けちゃったけどね」

「ならなんですぐに姿を現さなかったんですか？」

今度はテイルがセレビィに尋ねる。

「まあピースの力を目覚めさせたかったというのもあるけど、1番はこれだね」

そう言った刹那、セレビィの体から緑色のオーラが出現した。

「僕は森の神と呼ばれているポケモン。僕は森から力を借りて、自身の力を高める事が出来るんだ。姿をすぐに出さなかったのは、エネルギーを蓄えていたからなんだ。ヘルを倒す為にね」

セレビィはヘルを倒す為にエネルギーを蓄え、自身をパワーアップしていたらしい。

森から力を借りたセレビィの体からはエネルギーが満ち溢れている。

「言っておくけどヘル、今の僕は凄く強いよ」

無邪気な笑顔から一変、真剣な表情に変わりヘルを睨むセレビィ。

(……奴が言っている事は本当のようだな。凄まじいエネルギーを奴から感じる……それに、さっき俺が放った攻撃でかなりエネルギーを消費してしまった。このまま奴と戦えば俺は負ける……ここは退いた方が賢明だな)

セレビィのパワーを感じて、戦えば自分が負けると判断。今回は“リーフ・オーブ”を奪う事を諦める事にしたヘル。

「俺はまだ倒される訳にはいかない。今回はこの国の“リーフ・オ

「ブ」は諦めてやる。だが、いずれかは必ず奪ってやるからな。フ
ラッシュユ！」

いつか“リーフ・オーブ”を奪う……そう宣言した刹那、ヘルは
両手でエネルギー弾を作り出す。するとそのエネルギー弾は目映い
光を発する。あまりに眩しいその光にセレビィやピース達は目を開
けていられず、目を瞑ってしまふ。

ピース達が目を瞑っている間にヘルは空高く舞い上がり、何処か
遠くに向かって飛んでいってしまった。

第20話 リーフ・オーブを守れ！ 後編（後書き）

ピース

「わっ、ヘル逃げた！（汗）」

セレビィ

「うーん残念、僕の本当の力を見せる事が出来なかったよ」

でも現在のヘルを追い返しちゃう力を持つセレビィは十分強いと思うんだけど（汗）

セレビィ

「まあホームグラウンドだったからねえ。森の中だったら負けないよ」

ピース

「さすが王様（汗）あつ、作者さん。ヘルが使ってた新技、あれ何かのアニメやマンガで似たようなのを見た事があるんだけど」

気づいたか。

ヘルが放った雷のエネルギーを圧縮して巨大な光線のように放つ技……あれ、ワースに出てくるキャラが使ってた技を参考にしたんだ。

ティル

「……もしかして、空島編で語尾に“ヤハハ”とか言う耳たぶがやたら長い人？」

正解（笑）

そのキャラが使っていた技、神の裁き（エル・ツール）を参考にしました。

ピース

「出たチート技（汗）」

テイル

「でも、ヘルはあの技には名前がまだ無いって言ってたよね？」

そりゃエル・ツールってまんまやる訳にはいかんでしょ（汗）

だから現在考え中。

ちなみに、ヘルは“オーブ”奪う度に新しい技を使えるようになるから。

ピース

「……さらにチートにしてどうするんですか（汗）」

気にしちゃいけない（笑）

第21話 不穩（前書き）

ピース

「うわっ、なんかまた意味深なタイトルだ！」

あっ、イーブイのピース君じゃないか。

ピース

「作者さーん、今回どうなるの〜？」

それは本編にて（笑）

第21話 不穩

ヘルヘルの襲撃を受け、危うく“リーフ・オーブ”を奪われそうになったピース達ピース達。しかし、王であるセレビイセレビイの力でなんとかヘルを撃退し、“リーフ・オーブ”を守る事が出来た。

そしてヘル襲撃から数日後。ヘルとのバトルで傷ついてしまったピース達はすっかり回復。今はセレビイセレビイに呼ばれ、森の中にあるトレーニング場にやってきていた。

「あの、セレビイ様？ 話ってなんですか？」

自分達が呼ばれた理由がわからないピースは、セレビイセレビイに尋ねる。

「うん。実はね、彼を君達の旅に同行させてほしいなあって思ったんだ」

そう言ってセレビイセレビイは隣にいたジュプトルを見つめる。

「なっ！？ おいセレビイ、そんな事聞いてないぞ！」

セレビイセレビイからは何も聞かされていなかったジンは今の言葉を聞いて驚きの声を上げる。

そしてピース達もまた、セレビイセレビイの言葉を聞いて驚きの表情を浮かべている。

「良いじゃん。どうせジンはヘルに負けたのが悔しいから、ヘルにリベンジする為にこの国から旅立とうと考えてたんでしょ？」

セレビイセレビイはジンの足下に置かれているバックを見つめながら言う。

「そ、それは……」

凶星だったジンはセレビィに言い返す事が出来ない。

「だったら、ヘルを追い掛けるピース達と一緒に同行した方が良いでしょう？ それに、まだ完全に力が目覚めてないピースをジンに鍛えてもらいたいからね」

ピースを見つめながら、彼を鍛えてほしいとジンに頼むセレビィ。

「ピース達はどうか？ ジンを同行させても良いかな？」

「僕は構いませんけど……ジグザグマやテイルは？」

ピースはジグザグマとテイルに問い掛ける。

2人はジンが同行しても良いと考えたようで、頷いて応える。

「2人も良いみたいです」

「だって、ジン」

「……はあ、わかった。ピース達に同行すりゃ良いんだろ」

右手で後頭部を掻きながら、ジンはピース達に同行する事を決める。

「さすがジン　そう言ってくれと思ったよ」

ジンが同行する事を決めてくれて、セレビィは子供みたいな笑み

を浮かべながら喜ぶ。

「これからは、僕達仲間になるんだね？ よろしくね、ジンさん」
旅の仲間になるジンをピースは笑顔で迎える。

「嗚呼ああ。さて、じゃあさっさと出発するか。お前達、これを付ける」

ジンは徐おそにバックからトレーニングに使う重りであるパワーアングルやパワーリスト、そしてパワーウエイトを取り出す。それらを見たピース達は表情が引きつる。

「ジ、ジンさん？ まさかそれを付けたまま旅するんですか？」

恐る恐るピースはジンに尋ねる。その問いにジンは「当然だ」と即答で答える。

「俺達は今よりもっと強くならなくちゃならねえ。でないとヘルには勝てねえからな。ほら、付けてやるからじつとしてる」

ジンはピース達全員の手首と足首にパワーアングルとパワーリストを、そして腰にパワーウエイトを付ける。

その後自分も同じように重りを付ける。

「皆、次は火の国に向かうと良いよ。彼処ではバトル大会を頻繁に開催してるし結構強いポケモンもいるから、鍛えるには打って付けだよ」

セレビィはピース達に火の国へ向かう事を提案する。

「火の国が……よし、じゃあそこに向かうぞ」

「わかったよジンさん。セレビィ様、今までお世話になりました」

そう言いながらピースはセレビィに頭を下げてお辞儀する。

ジグザグマやテイルもピースと一緒に お辞儀する。

「また遊びに来て良いからね　いつでも待ってるから」

「はい。それじゃ、行ってきます」

セレビィに別れを告げ、ピース達は火の国目指して歩き始めた。

ピース達が火の国目指して出発した同時刻。
草の国から遙か離れた場所にある土の国。そこで事件が起きていた。

「……こりゃ、酷いな」

ヘルを調べる為に各地に飛び回っていたストライクのサスケは、土の国で事件が起きているという情報を聞きつけてやってきていた。土の国では民家が破壊され、住人であるたくさんのポケモン達は怪我をして倒れている。

「おいあんた、一体何があったんだ？」

サスケは近くで倒れていたポケモンに話し掛ける。茶色を基調とした体色に鋭い爪、背中にはたくさんの太いトゲがある。顔はネズミに近いそのポケモンはサンドパンと呼ばれるポケモンである。

「い、いきなり変な連中がやって来て……無差別に攻撃してきたんだ……」

「無差別攻撃……なあ、そいつらは一体何処へ？」

「お、王が住む地底に……がはっ……」

近くにある地底に繋がっている大きな洞窟を指差すと、サンドパンは気を失ってしまう。

「お、おいあんた!？」

サスケはサンドパンに呼び掛けるが、サンドパンの意識が戻る事はなかった。

「……王が住む地底って言ってたな。それに変な連中……連中って事は複数いるって事だな？ ヘルとはまた違う奴らって事か」

土の国を襲った謎の集団が何者かを考えていた時、突然大きな地震が発生する。それと同時に、洞窟からは爆発音が聞こえてくる。

「王が誰かと戦闘してるみたいだな……うーん、ヘルじゃないなら俺様には関係ない事なんだが……一応、調べておくか」

サスケは戦闘が行われている地底に向かって走り出す。

第21話 不穩（後書き）

サスケ

「久しぶりに俺様に出番がきたな」

ピース達だけじゃなく、彼にもスポットライトを当てる事にしました。

サスケ

「主人公だけが活躍してる訳じゃないからなあ。さて、次回は俺様
が中心になって物語が進むんだぜ」

土の国で一体何が起きているのか……

サスケ

「そいつは次回を見ればわかる、だろ？ 作者の旦那」

言われた（汗）

第22話 謎の敵

「ここが王が住むっていう地底か……」

土の国、王が住むという地底にやってきたストライクのサスケ。地底には所々にマグマが流れており、太陽の光がないにも拘らず^{かかわ}中は明るい。

そして温度も相当高く、サスケの額からは汗が流れ落ちる。

「暑いなここ……早いところ、調べるもん調べてここから出ないと、俺様の体が持たねえな……」

額から流れる汗を右腕で拭い、サスケは周囲を見回す。しかし、今サスケがいる場所には彼以外誰もいない。

「ここにはいない……もうちょい奥か？」

まだ地底には奥があり、サスケは奥に向かって歩き出そうとする。その時、奥から凄まじい爆発音が鳴り響いた。それと同時に地面が激しく揺れる。

「やっば奥か！」

すぐさまサスケは爆発音が鳴り響いた場所に向かって走り出す。

地底、最深部。そこには1人の巨大なポケモンが複数いる相手のポケモンと戦闘を繰り返していた。

「貴様ら……何故この国を襲う！ 何が目的だ!？」

強い口調で怒鳴っているのは赤を基調とした体色で、ところどころに黒い曲線の模様がある。まるで怪獣のような姿をしたポケモンの名はグラードン。土の国を治める王である。

「簡単な理由さ。この国にある“ガイア・オーブ”を奪いにきた」

グラードンの問いに答えたポケモン 紫と黒を基調とした体色、尻尾はバナミみたいな形をしていて胸や頭部には黒真珠があり、顔は豚に近い。ブーピッグと呼ばれるポケモンだ。

そしてブーピッグの周りにはユンゲラーやネイティオなど、エスパーティプのポケモン達が数人いた。

「ガイア・オーブ”……だと!？」

ブーピッグが言った“ガイア・オーブ”という言葉聞き、驚きの表情を浮かべるグラードン。

「質問には答えた。さあ、戦いを続けようか……さつさと王であるあんたを倒し、“ガイア・オーブ”を探さないといけないからね。戦え、僕の人形達!」

両手を合わせて、意識を集中させるブーピッグ。すると、彼の周りにいた虚ろな表情をした数人のポケモン達は一齐にグラードンに襲いかかる。

「貴様らに“ガイア・オーブ”を渡す訳にはいかん！ ソーラービーム！」

グラードンは口から強力なエネルギー波を吐き出し、襲いかかってきたポケモン達に向けて放つ。

「回避しろ！」

ブーピッグが指示を出すとポケモン達は全員回避行動を取る。

放たれたエネルギー波はポケモン達には当たらず地面に直撃するが、直撃したと同時に凄まじい爆発が発生、その時の衝撃でポケモン達は大きく後方へ吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ばされたポケモン達は壁に体を打ちつけ、その場に倒れる。

（ずいぶん派手にやってるなあ……あのでっかいのが王って訳か。んで、あっちにいる奴らがこの国を襲った連中か……エスパークタイプばかりしかいなえな）

グラードンとブーピッグ達が戦闘をしている時、現場に到着していたサスケは岩の後ろに隠れて状況を確認していた。

（しかしすげー威力のソーラービームだな……直撃しなくても、あの衝撃ならあいつらはもう立てないだろ。こりゃ王の圧勝だな）

サスケはグラードンの实力を知り、ブーピッグ達が負けると予想する。

一方のブーピッグは不利な状況にも拘らず、何故か余裕の表情を浮かべている。

「さすが土の国を治める王、凄いパワーだ。だけど、僕の人形達はそれだけじゃやられないよ」

余裕の表情を崩さないブーピッグがそう言うと、倒れていたポケモン達は何事もなかったかのようにゆっくりと起き上がる。

(なっ、立ち上がった!?)

もう立てないと予想していたサスケは彼らが立ち上がったのを見て驚きの表情を浮かべる。

「貴様、催眠術を使ってその者達を操っているのか?」

体にかかなりのダメージがあるにも拘らず、何事もなかったように立ち上がったポケモン達に疑問を感じたグラードンはブーピッグを睨みつけながら尋ねる。

「そうだよ、僕の手で彼らは操り人形になっているのさ。ついでに痛みを感じなくしてるんだ」

グラードンの問いにブーピッグは表情を変えずに淡々と答える。

「……もう1つ聞く。他人を操ってまで、何故貴様は“ガイア・オーブ”を狙う?」

もう1つ疑問に感じていた事をグラードンは尋ねる。

「僕が忠誠を誓った人が各国に存在する“オーブ”を必要としている……だから、僕はその人の為に“オーブ”を集める。僕が忠誠を誓った人……ヘル様の為にね」

(ヘルだと!?)

ブーピッグが忠誠を誓った相手がヘル……それを聞いたサスケは驚きの表情を浮かべる。

サスケだけでなく、グライドンもまたヘルの名を聞いて驚きの表情を浮かべる。

「お喋りは終わりだよ。この戦闘にも飽きた……そろそろ終わらせるよ。やれ、僕の人形」

「おっと、ちょっと待った!」

ブーピッグが操っているポケモン達に指示を出そうとした時、物陰に隠れていたサスケが素早い身の熟しこなでブーピッグの背後から接近かま。

鎌かまになっている右手をブーピッグの首に当て、動きを制限する。

「戦闘中に失礼、ちょっと俺様も混ぜてもらっぜ」

「何者だ?」

サスケの事を知らないグライドンはサスケに尋ねる。

「お初ですネグライドン様。虫の国、忍隊の隊長をしているサスケと申します」

普段と違い礼儀正しい口調でグライドンに自己紹介するサスケ。

「まあ、挨拶はこのくらいにしといて……ちょいとお前さんに聞き

たい事があるんだ、ブーピッグの旦那。あんたヘルと関係があるんだろ？ ヘルは一体何者なのか、何処に潜んでいるのか……知ってる事全部教えてもらおうか。でないとあんた、痛い目に合う事になるぜ？」

サスケは右手の鎌を少し強くブーピッグの首に押しつけ、脅すような口調で知っている事全てを言えと問い質す。ただ

「……仕方ないなあ、わかった。知ってる事を教え……る訳ないだろ！ ネイティオ！」

ブーピッグがネイティオの名を叫ぶと、一瞬にしてブーピッグがサスケの前から消えてしまった。

「な、何！？」

何が起きたかわからないサスケは思わず驚きの声を上げる。

「残念だったね。人形達の中にはテレポートを使える奴がいたんだよ」

サスケの背後から声が。振り向くと、そこにはブーピッグとテレポートを使用したネイティオがいた。

「テレポート……瞬間移動ってやつか」

「そういう事。さて、よくも僕を脅してくれたね……君も王と一緒にやられてもらおうか」

不気味な笑みを浮かべながらブーピッグは両手を合わせて意識を

集中させ、ポケモン達を操ってグラードンとサスケの所に向かわせようとする。

「待てブーピッグ、戦闘は中止だ。狙っていた物は手に入れた」

その時、何処からかテレポートしてきた1人のポケモンが突如現れ、ブーピッグに戦闘を中止するように言う。

緑と白を基調とした体色、人型に近くシャープな体型、頭部と両肘には鋭利な刃のような物が備わっている エルレイドと呼ばれるポケモンだ。

そのエルレイドの手にはある物が握られていた。それを見たグラードンは驚きの表情を浮かべる。

「それは“ガイア・オーブ”！？ バカな、警備の者が数人それを守っていた筈！？」

「確かに警備の者はいましたが、私の相手ではありませんでした。ブーピッグ、目当ての物は手に入れたんだ。もうここに用はないだろう？ 撤退しよう」

エルレイドはブーピッグに“ガイア・オーブ”を手渡し、撤退しようとする。

「これが“ガイア・オーブ”か……さすが、良い仕事してくれるじゃないかウィル。これさえ手に入れば、確かにここにはもう用はない……じゃ、撤退しようか」

狙っていた“ガイア・オーブ”を手に入れる事が出来たブーピッグは笑みを浮かべながらエルレイド ウィルの提案を承諾する。

「そうはさせん！ ソーラービーム！」

奪われた“ガイア・オーブ”を取り戻す為、グライードンは口から強力なエネルギー波を吐き出してブーピッグ達を攻撃する。

「リーフブレード！」

ウィルは右肘に備わっている刃にエネルギーを集める。そして放たれたエネルギー波に向かってウィルは突っ込み、エネルギーを集めた刃で攻撃。グライードンが放ったエネルギー波を一刀両断にしよう。

「何！？」

まさか自分が放った攻撃を一刀両断にされてしまうとは思っても見なかったグライードンは驚愕する。

「私が時間を稼ぐ。ブーピッグ達はそれを持って早く撤退を」

「そうはさせないぜ！」

ウィルが喋りきる前にサスケは素早い身の熟しでブーピッグに接近、その鋭い鎌で攻撃を仕掛ける。

「テレポート！」

ウィルは強く念じる事でテレポートを発動させ、サスケの前まで瞬間移動する。そして先程グライードンが放った攻撃を切り裂いた技でサスケの攻撃を受け止め、つはせりあ鏢競合いを始める。

「こ、こいつ！」

「甘いな。ブーピッグ、早く撤退しろ」

「じゃあお言葉に甘えて……」

ウィルがサスケを止めている間にブーピッグは操っているポケモン達にレポートを使わせ、その場から消え去った。

「……すまない」

ブーピッグ達が撤退した事を確認したウィルは、何故か申し訳なさそうにしながらそんな事を呟く。そしてすぐにウィルはレポートを発動させてその場から消え去る。

相手がいなくなった事でサスケはバランスを崩し、両手の鎌は地面に刺さる。

「ちっ、逃げられたか……」

地面に刺さった鎌を引き抜き、舌打ちするサスケ。

「くっ……あのような者達に“ガイア・オーブ”を奪われるとは……くそっ！」

“ガイア・オーブ”を簡単に奪われてしまった自分が許せないグラードンは悔しそうな表情を浮かべ、右手で作った握り拳を壁に叩きつける。

一方サスケは下を向いたまま、何か考え事をしていた。

(ブーピッグにエルレイド、そしてヘル……全員がエスパークタイプ

のポケモン達。こりゃ、一度あの国に行って調べてみる必要がある
そうだ。ハヤテ達と合流して、行ってみるか……超の国に)

第22話 謎の敵（後書き）

ピース

「ヘルに部下いたの!？」

いたりしたんですなあ。

テイル

「いや何故他人事みたいに?（汗）」

気にしたら負けさ（笑）

さて、次回はピース君達の出番だよ。

ピース

「どうなっちゃうの?」

ジンの厳しい特訓で誰かが倒れたり倒れなかったり……

テイル

「いやどっちですか（汗）」

第23話 火の国（前書き）

久しぶりの更新ですな（汗）

ピース

「遅いよ〜」

ごめんごめん（汗）

第23話 火の国

草の国を出発してから数日が経過。

現在ピース達は火の国を目指して太陽が照りつける炎天下の中、草木などが全く生えていない荒野を歩いていた。

「暑いよ……」

暑いのが苦手なピースは額から汗が流れ、ぐったりとしながらゆっくりと歩いている。

体にはジンに付けてもらったパワーアンクルなどの重りがあるから余計ぐったりとなる。

ピースのすぐ近くを歩いているテイルとジグザグマは暑さと疲労で疲れきった表情を浮かべている。

「おいお前ら、このペースじゃいつまで経っても火の国には着かねえぞ。もっと速く歩け」

ゆっくりと歩くピース達にジンは苛立ちを覚え、つい怒り口調になってしまう。しかし彼がイライラしてるのはピース達が遅いからというだけでなく、暑さや手持ちにある酒を飲み干してしまった事にもあるようだ。

「ちょっと休憩しようよジンさん、朝からずっと歩きっぱなしで疲れたよ……」

『同じく……』

歩き疲れたピース達はその場に座り込み、休憩しようとジンに提

案ずる。そんなピース達を見てジンは右手を額に当てながら1つため息を吐き、呆れた表情を浮かべる。

「お前らなあ……」

「おや、あんたらこないな所で何してるん？」

近くを通りかかった荷物を乗せた荷車を引っ張っているとあるポケモンがピース達に話し掛ける。

橙色を基調とした体色で竜を思わせるような顔をしており頭部には角が2本、首はやや長い。背中には一組みの立派な翼、そして長い尻尾もあり、尻尾の先端には炎が灯っている。リザードンと呼ばれるポケモンだ。

「あの、あなたは？」

「俺か？俺は“運び屋”をやってるリザードンのジークや。ほんで、あんたらこないな所で何してるんや？」

ピースの問いに答えた喋り方に特徴があるリザードン。ジークは腕組みをしながらここで一体何をしているのかとピース達に尋ねる。尋ねられたピースはまず自分達の名前をジークに名乗り、それから火の国には頻繁に開催されているというバトル大会に出場する為に向かっている事を教える。

「なんやあんたら火の国に向かったんかいな。せやったら俺と目的地は同じやな、どや？荷車で良かったら火の国まで乗せてつたるか？」

ジークは荷車を指差しながら乗っていくかとピース達に尋ねる。

荷車はちょうどピース達全員が乗れる程の大きさだ。

「俺達は重りを付けて歩く事で鍛えているんだ。悪いがその誘いは断らせて」

『よろしくお願いしま〜す』

ジークからの誘いを断ろうとしたジンだったが、いつの間にか荷車に乗っていたピース達が満面な笑みを浮かべ、声を揃えて誘いを受ける事を告げる。

「お、お前ら……」

「よっしゃ、任しとき！ それであんたはどないするんや？ 乗らんか？」

荷車をいつでも引つ張れるよう準備出来ているジークは一緒に乗るのかとジンに尋ねる。

「……いや、俺は走るからいい」

「そうか？ ほんなら早速出発やな、俺についてきいや！」

そう言うとジークは背中にある翼を羽ばたかせて少し地面から浮かび上がり、荷車を引つ張りながら低空飛行で火の国に向かう。それに続いてジンも走り出す。

重りを付けているにも拘らず、^{かかわ}ジンはピッタリとジークの真横を走っている。

（は〜、ジンはんパワーアンクルとか付けたまんまよう走れんな〜

……)

スピードには自信があったジークは重りを付けた状態で自分と同じスピードで走るジンに驚いている。

「ねえジークさん、これには何が入ってるんですか？」

ピースは荷車に乗っている何かが袋詰めされている荷物を指しながらジークに尋ねる。

「あつ、それには触らんといてよ？ 依頼人から預かった大事なもんが入ってるんや。まあ、俺も中身がなんなのかは知らんけどな」

中身を知らない……ジークのその言葉を聞き、ピースは不思議そうな表情をしながら首を傾げる。

「なんで中身を知らないんですか？」

「それは俺が運び屋として決めたルールがあるからや。1つは依頼者の名前は聞かない、もう1つは運ぶ依頼品を開けない、そして最後に、契約した事は絶対に守る……せやから、俺はその袋に入ってるもんは何も知らんねん」

ジークは運び屋として自分で決めたルールを1つずつピース達に説明する。その説明を聞き、ピース達はうんうんと頷いて納得したような表情を浮かべる。

「しっかりと自分で決めたルールを守る……ジークさんは優秀なトランスポーターなんですね？」

「ん？ トラ、なんやて？」

あまり聞き慣れない言葉を言うテイルに思わずジークは聞き直す。

「トランスポーターですよ、意味は輸送するものです。ジークさんは運び屋だからピッタリな名前だと思ったんで」

「トランスポーター……お、なんかカッコエエやん！ トランスポーター・ジークか……気に入ったわ」

テイルが言ったトランスポーターという名をすっかり気に入ったジークは満面の笑みを浮かべる。

「名前を気に入ったのは良いが……ジーク、もう少しペースを上げてくれないか？ 俺達は早く火の国に行きたいんだ」

ジークの隣で走っているジンがペースを上げてくれと言い出す。

早く火の国に行きたいとは言っているジンだが、本当は酒が飲みたくてしょうがないというのが本音だったりする。

「ペースアップでつか？ まあええけど……でもジンはん、大丈夫なんか？」

「俺は大丈夫だ、いいからペースを上げてくれ」

「そこまで言うんなら……ほな、行きまっせ！」

ジークはジンの要求通り、飛行するスピードを上げる。思った以上にスピードが上がったのでピース達は振り落とされないよう必死に荷車にしがみつく。

一方ジンはまだピツタリとジークの真横を走っている。

それからしばらくして、長距離を移動してきたピース達はようやく火の国へ到着する。国は大きな山の麓ふもとにあり、家は全て石造りで出来ている。

そして山の頂上付近には何か神聖な雰囲気を感じさせる神殿が建っていた。

「着いたで、ここが火の国や」

「ここが……」

荷車からひょいっと降りたピースは初めて来た火の国に建ち並ぶ家や街中を歩くポケモン達を眺める。

火の国だけあって、街中を歩くポケモン達は全員が炎タイプだ。

「うっ……ここも田舎っぽい感じがする……」

目を細め、明らかに嫌そうな表情を浮かべながらテイルは思わず田舎っぽいと言ってしまう。

「あ、テイルはんは雷の国出身やったな？ そりゃここが田舎に思ってしまうんは無理ないわな」

火の国を田舎と言われ、ジークは苦笑いしながら右手の人差し指で頬を軽く掻く。

「ちょ、ちょっとテイル失礼だよ!? 」「ごめんなさいジークさん」

「別にピースはんが謝る事あらへんで、實際この国は田舎やから……ってのんびりしてる場合じゃなかったんや、そろそろ依頼品を届けに行かな! ほなピースはん、俺はこれで!」

ジークは軽く右手を上げてそう言つと、大急ぎで街中へと走り出す。

しかし何か思い出したのか急に立ち止まり、ピース達の方へ振り向く。

「せや! この国を観光したいんやつたら俺に言いや、案内したるさかい。“コータスの宿” っちゅう宿屋におるから、ほなな!」

最後にそう言つて、ジークは走り去っていった。

「行っちゃつた……さて、これからどうするジンさん……ってあれ?」

これからどうするかジンに尋ねようとしたピースだが、振り向いた先にジンはいなかった。

「ねえジグザグマ、ジンさんは?」

「ジンさんなら、酒屋を探すつて言つてどっか行つちまつたぞ?」

「……またお酒なのね」

ジンが酒屋を探しに行ったという事を知り、ピースは呆れた表情を浮かべる。

「じゃあどうしようか？ ジンさん戻ってくるまで下手に動けないし……」

「うーん……」

ジンが戻ってくるまでどうするか考えるピースとテイル。

「ん？ くんくん……」

2人が考えている時、ジグザグマは何か食べ物の良い匂いがする事に気づき、鼻をひくひくとさせる。

(この匂いは……肉が焼ける匂い！)

ジグザグマは匂いがする方向に向かって走り出す。

「ちょ、ジグザグマ！？ 何処に行くの！？」

走り出したジグザグマに気づき、ピースとテイルは慌ててジグザグマを追いかける。

「……酒屋は何処だ？」

一方のジンは酒屋を探してあちこちを歩き回っていたのだが、ま

だ酒屋を見つけられずにいた。

「まったく、なんで酒屋がすぐ見つからねえんだよ……ん？」

なかなか酒屋が見つからずイライラしたジンの目にある光景が飛び込んできた。

大勢のポケモン達が集まり、何かを見つめながら大きな歓声をあげている。

「なんだ？」

気になったジンはポケモン達の間を掻い潜かいくぐっていく。

そして掻い潜る事が出来たジンは、ようやくポケモン達が見ていたものがなんだったのかがわかった。

『火炎放射！』

そこにあつたのはバトルフィールド、そしてそこでは2人のポケモンがバトルをしていた。

1人は黄色と橙色を基調とした体色、人型で鳥を思わせるような顔をしており、頭には立派な羽がある　ワカシャモと呼ばれるポケモンだ。

そしてもう1人は全身が煮えたぎるような赤を基調とした体色、足首と首には鉄で出来たリングのような物を装着している　ブーバーと呼ばれるポケモンだ。

「これで決める！　受けてみよ、紅蓮烈脚くれんれつきゃく！」

ワカシャモは空高くジャンプ、右足に炎を纏まとわせブーバーに向かって強力な蹴りを連続で繰り出す。

その蹴りは目にも留まらぬ速さで直撃し、ブーバーは大きく後方へ吹き飛ばされ仰向けになって倒れる。

倒れたブーバーはピクリとも動かない、どうやら気を失ったようだ。

「……ほう、あのワカシャモなかなかやるじゃないか。あのわずかな間に10発以上の蹴りを決めやがった」

ワカシャモの実力を知り、彼に興味を持ったジン。ワカシャモというポケモンは1秒間に10発以上の蹴りを繰り出す事が出来るポケモンなのだ。

「今年もホルスの奴絶好調だな。こりゃ3日後の大会もホルスの優勝で決まりだな」

「だな、つてかホルスに勝てる奴なんてそうはいないだろ？」

(ホルス……あのワカシャモはホルスっていつのか)

バトルを観戦していたポケモン達の会話を耳にするジン。

あのワカシャモはホルスという名で、3日後にはこの国で大きな大会が開かれるらしい。

「さあ、次の相手はいないのか!? 俺はまだバトルしたくてたまらないんだ、誰でもいい! 俺と勝負しろ!」

興奮しているワカシャモ　ホルスは大きな声を出して次の相手を求める。

「俺が相手してやるよ」

ホルスとバトルする為、ジンはバトルフィールドに入る。

「あんたは？ この国にいる奴じゃないみたいだが？」

「確かにそうだが、そんな事はバトルに関係ないだろ？ とつとつバトルを始めようぜ」

そう言っつてジンは戦闘体勢に入る。

「確かに………相手が誰であろうとそんな事は関係ない、全力でぶつかるのみ。勝負だ！」

第23話 火の国（後書き）

ピース

「なんか新キャラが2人も出てきましたね」

ジークにホルスね。

いや〜、キャラの名前考えるのに手こずったよ（汗）

ピース

「でもなんでジークさんは関西弁なの？」

いやね、今まで関西弁喋るキャラをやった事がなかったからやってみたいなあって思ってたね。

ピース

「ふ〜ん……」

第24話 2つの戦い！ 熱血バトルに大食いバトル！？（前書き）

遅くなりました（汗）

ようやく更新です。

第24話 2つの戦い！ 熱血バトルに大食いバトル！？

「くられ、火炎放射！」

ワカシャモのホルスは口から強力な炎を勢い良く吐き出し、ジンに向けて放つ。

草タイプのジンにとって、ホルスが放った火炎放射は効果抜群の技、受けたら大きなダメージを受けてしまう。

だがジンは回避しようとせず、体内エネルギーを右腕に生えている葉っぱに集める。

集められたエネルギーは葉っぱを覆い、まるで鋭い剣のようになる。

「リーフブレード！」

ジンは剣のように変化した葉っぱでホルスが放った火炎放射を攻撃、一瞬で一刀両断にしてしまった。

苦手である炎技を一刀両断にしたジンは素早い動きで一気にホルスに接近、両腕でリーフブレードを発動して攻撃を仕掛ける。

「炎のパンチ！」

ジンのリーフブレードに、ホルスは拳に炎を纏まとわせたパンチで對抗。互いのパワーは互角で、何度も何度もリーフブレードと炎のパンチをぶつけ合う。

技がぶつかり合う度に火花がほとばしる。

「なかなかやるな……だがこれならどうだ！ 紅蓮烈脚！」

ここでホルスは一旦炎のパンチをやめ、後方へ素早くバックステップしてジンから離れる。

そしてすぐさま両足に炎を纏わせてジンに向かってジャンプ、空中から高速の炎の蹴りを連続で繰り出す。

これにジンはリーフブレードで対抗しようとするがホルスの攻撃スピードに対応仕切れず、数発の蹴りを顔や腹部に受けて後方へ軽く吹き飛ばされる。

「ちっ、くらっちまったか」

苦手な炎技を受けたジンだが平気そうなしている。それどころか、攻撃を受けた事を悔しがっている。

「……いい加減その重りを外したらどうだ？」

ジンが体にパワーアングルなどの重りを付けている事に気づいたホルス。全力でバトルする事を望んでいたホルスは、ハンデを付けてバトルするジンを怒りの眼差しで睨みつける。

「バレたか……だが、お前さんには悪いがこれを外すつもりはねえぜ」

「そうか……なら、力づくで外させてやるぞ！」

ジンに重りを外させ、本気を出させる為にホルスは一気にジンに接近して猛攻を仕掛ける。

一方その頃、ピース達はというと……

「まだまだ食えるぜ！ おかわり！」

とある店で開かれている大食い大会。

店を出されていた料理の美味しそうな匂いに釣られてやってきたジグザグマは、料理をどうしても食べたいという欲望を抑えきれずに勢いで大食い大会に参加してしまったのだ。

ピース達は仕方なく、大食い大会が終わるまで待つ事にして見物していた。

「ははは……相変わらず凄いや、ジグザグマの食欲……」

ジグザグマの食欲を見て思わずピースは苦笑いを浮かべる。

ジグザグマの前には積み重なった皿のタワーが2つ出来上がっている。

「ちょ、ちょっとピース君、あっちの人も凄いよ……」

ジグザグマの隣の席に座っているポケモンも凄いという事を指差しながらピースに伝えるテイル。ピースはジグザグマの隣にいたポケモンに視線を向ける。

「……凄っ」

そのポケモンが食べた量を見て思わず驚きの声を上げてしまうピース。

フサフサとした体毛を持ち、深緑色をした背中にクリーム色をした腹、三角形の小さな耳があり、顔は何処かネズミに近い。そしてまるで炎みたいに赤い瞳を持っている　バクフーンという種族の

ポケモンだ。

バクフーンはジグザグマが積み上げた皿のタワーの倍以上を積み上げていた。

「美味っ　マジここの料理最高だぜ、おかわり」

すでに大量の料理を食べている筈なのに、バクフーンは全く苦しそうな顔をせずに次々と料理をおかわりしていく。

「ま、負けてられねえ……ペースを上げるぜ！」

バクフーンに触発されたジグザグマは食べるペースを上げ、バクフーンに追いつこうとする。

「おっ、頑張るじゃんか。だけど俺は負けねえぞ」

ジグザグマがペースを上げたのを見て、バクフーンも食べるペースを上げる。

「おらおらおらあーっ！」

一方ジンとホルスの戦いは激しさを増していた。ホルスは両手両足に炎を纏わせた状態でジンに接近戦を仕掛ける。

ジンはこれにリーフブレードで対抗するが、重りを付けた状態では全ての攻撃を相殺する事が出来ずに何発か攻撃を受けてしまう。

「うおらあーっ！ 紅蓮脚！」

ホルスは炎を纏わせた渾身の蹴りを1発、ジンの腹部に向けて打ち込もうとする。

しかしジンはリーフブレードをクロスする事でホルスの攻撃を防御する。だがホルスのパワーが強く、防御した時の衝撃でジンは軽く後方へ吹き飛ばされる。

（まだこの重りを付けた状態じゃバトルに勝つ事は難しいのか……ちっ、仕方ねえな……）

最初は重りを外すつもりはなかったジンだったが、バトルに負けたくないという気持ちが強くなり、体に付けていた重りを外し始める。

実はジン、かなりの負けず嫌いなのである。

外した重りをジンは乱暴に地面に落とす。

地面に重りが落ちた瞬間ポツと鈍い音が辺りに響き、落ちた重りは地面に少しめり込んでしまっている。

重りを外したジンは軽く準備運動を始める。

「やっと外したな。さあ見せてみな、あんたの本気」

「言われなくても見せてやるよ。だが見た時にはお前はバトルに負けてるがな」

ホルスが喋り終わる前に、先程まで準備運動をしていたジンが一瞬にしてホルスの背後に回り込んでいた。すでに両腕でリーフブレードを発動し、攻撃体勢に入っている。

(なっ、いつの間に!?)

ジンが背後に回り込んでいた事に気づけなかったホルスは、ジンのスピードに驚愕する。

「くっ、紅蓮脚!」

ジンに攻撃される前に、ホルスは右足に炎を纏わせた回し蹴りでジンの腹部を攻撃しようとする。だが攻撃を仕掛けた時すでにジンはそこにいなく、ホルスの回し蹴りは空を切る。

「遅えよ、リーフブレード!」

超高速で再び背後に回り込んだジンは、ホルスの背中にリーフブレードをクロスさせた斬撃を決める。

背中にリーフブレードを受けたホルスは前方に吹き飛ばされる。

「これで、終わりだ!」

前方に吹き飛ばされまだ体が宙に浮いたままのホルスにジンは素早く接近し、目にも留まらぬ早さでリーフブレードを連続でホルスに直撃させる。

リーフブレードを連続で受けたホルスは錐揉み状態きじもで吹き飛び、背中から地面に倒れる。

「これがお前が見たがっていた俺の本気だ。疾風のジンは伊達じゃねえ、わかったか鳥野郎」

倒れているホルスにそう言うと、ジンは地面に落としていた重りを拾い上げてバトルフィールドから離れようとする。

「ま、待てよ……まだバトルは終わっちゃ、いねえ……！」

「ん？」

声が出た方にジンが振り向くと、リーフブレードの連続攻撃によりかなりダメージを受け、ふらふらになりながらも立っているホルスの姿があった。

（あいつ……あの攻撃でもまだ立ち上がれんのか？）

確実に倒したと思っていたジンは、まだ倒れていないホルスを見て少し驚いたような表情をする。

「そんなボロボロの状態で、まだ戦う気か？」

「はあ、はあ、あ、当たり前だ！ この胸に宿る熱き魂が燃え尽きない限り、俺は戦う！」

「暑苦しい野郎だぜ……仕方ねえ、次で確実に終わらせてやる」

いつ倒れてもおかしくない状態でもまだ戦うつもりでいるホルスを見て、ジンは少し呆れたような表情を浮かべながらも、リーフブレードを発動させて攻撃体勢に入る。

「そのバトル待った！」

再びバトルが始まるうとしたその時、1人のポケモンがバトルフィールドに入ってきてバトルを中断させる。

燃えるような赤を基調とした体色、人型に近いスマートな体格を

して、顔は鳥のようで額からはV字型の鶏冠けいかんが伸びているポケモン　バシャーモと呼ばれる種族だ。

「お、お館様!？」

突然乱入してきたバシャーモを「お館様」と呼び、驚いた表情をするホルス。

「誰だおっさん？」

「ワシはバシャーモ、このホルスの……まあ師匠みたいな者じゃ。若者よ、このバトルは御主の勝ちじゃ。見ての通りあのバカ者はすでにボロボロ、これ以上バトルする事は出来ん」

ホルスの師匠と名乗るバシャーモは、腕組みをしながらホルスはこれ以上バトルする事は出来ないと行ってジンの勝ちだと告げる。だがこれに納得がいかないホルスはふらふらになりながらもバシャーモに歩み寄る。

「ま、待ってくださいお館様！　俺はまだ負けては」

「見苦しいぞホルス！」

ホルスが喋っている途中でバシャーモに一喝されてしまう。

一喝されたホルスは「す、すみません……」と一言謝り、肩を落としてしょんぼりしてしまう。

「ホルスよ、時には敗北を認める事も大切だ。その敗北が、お前をまたさらに強くする……良いか、今日敗北したのなら、次は勝利出来るよう努力するんじゃ」

しょんぼりとしているホルスの肩にポンと手を置き、今度は優しく話し掛けるバシャーモ。

「お、お館様……はい！ 頑張ります！」

(……復活早えなおい)

優しく話し掛けられ、しょんぼりしていたホルスはたちまち明るい表情に変わり元気になる。

そんな復活が早いホルスに心の中でジンは思わずツッコミを入れる。

「ジン、て言ったなあんだ。俺は今よりもっと強くなる！ 3日後のバトル大会……そこで必ずリベンジしてやるからな！ 俺と当たるまで絶対負けるなよな！ お館様、早速今日から特訓に付き合ってください！」

「良かるう！ ならばいつもの場所で早速特訓開始じゃ！」

絶対にリベンジする……そうジンに宣言したホルスはバシャーモと共に何処かへと走り去っていった。

「……本当、暑苦しい野郎だなおい……」

ホルス達が走り去るのを見届けた後ジンは再び重りを体に付け、酒屋探しを再開した……またすぐに道に迷う事になるのだが。

「も、もう食えねえ……」

ジン達のバトルに決着がついた時、こちらの大食いバトルもついに決着がつく。

お腹がパンパンに膨らんでいるジグザグマは両手でお腹を押さえながら仰向けになって倒れている。

「よっしゃ、俺の勝ち」

倒れているジグザグマの隣ではバクフーンが嬉しそうに満面な笑みを浮かべている。

バクフーンの前には積み重ねられた皿のタワーがいくつも出来上がっている。

「やっと終わったね……ジグザグマ、大丈夫？」

倒れているジグザグマに歩み寄るピースとテイル。ピースが大丈夫かと尋ねると「食い過ぎて動けねえ……」と苦しそうにジグザグマは答える。

「仕方ないなあ……ピース君、彼をサンダーボルトに乗せて運ぶからちょっと手伝ってくれる？」

「あっ、うん」

テイルは電気を軽く流してサンダーボルトを宙に浮かばせ、それ

にピースと協力して満腹で動けないジグザグマを乗せる。

「それでこれからどうしようテイル？」

「とりあえず、ジークさんが言ってた“コータスの宿”って場所に行ってみようよ。もしかしたら途中でジンさんと合流出来るかもしれないし」

「コータスの宿か……うん、そうだね。じゃあそこに行ってみようか」

ジグザグマの大食い大会が終わり、ピース達はジンを捜しつつコータスの宿という場所を目指す事にした。

「うし、次はあの店に行くか」

今さっき大量に料理を食べたばかりのバクフーンは、また別の大食い大会が開かれている店に向かって走っていった。

コータスの宿を目指して歩き続ける事数十分、もう陽は沈んですっかり暗くなってしまったがピース達はようやく目的地に到着する。さほど大きくない二階建ての建物で、まるで亀をイメージさせるような形をしていた。

「ここがコータスの宿……うわぁ、面白い形だなぁ」

亀に似た形をした建物に興味を持ったピースは目をキラキラとさせながらじつくりと建物を見つめている。

「……おかしいなあ、ちつとも酒屋が見つからねえ……ん？ おう、ピース達じゃねえか」

ピースがコータスの宿を見つめていた時、ちょうど良くジンがやってきた。道に迷ってずっと歩いていたら偶然ここに到着したようである。

「ジンさん、もしかして今まで道に迷ってたんじゃない……」

「……べ、別に迷ってなんかねえよ」

ピースに凶星を突かれてしまったジンだが、素直になれなず外方を向いて迷ってないと強がり言う。

「おつ、やっと来たんかいなピースはん達、待ちくたびれたで」

不意に誰かがピース達に話し掛けてきた。

声が出た方にピース達が振り向くと、この国まで案内してくれたリザードンのジークがいた。

ピース達の声を聞きつけて、建物から出てきたようだ。

「あつ、ジークさん」

「こないな所で突つ立つとらんで、早よ中に入りや。宿のおっちゃんに頼んで、美味しいメシ用意してもらたで」

「よっしゃ今行くぜ」

美味しいメシという言葉聞き、今までダウンしていたジグザグマが急に元気になり、駆け足で宿の中へ入っていった。

「さっき大食い大会で食べたばかりだよね彼……」

「あはは……」

ジグザグマの食欲にテイルは呆れ顔、ピースは苦笑いを浮かべながら彼を追いかけるようにして宿に入っていく。

「あとジンはん、美味しい酒もしっかり用意してまっせ」

「……ジーク、あんた最高だぜ」

酒を用意してある……それを聞きジンは少し笑みを浮かべ、ジークと共に宿の中へと入っていった。

第24話 2つの戦い！ 熱血バトルに大食いバトル！？（後書き）

ピース

「ジンさん、その重りってどの位重いの？」

ジン

「これか？ それぞれイシツブテと同じ位の重さだが？」

テイル

「1個約20Kg……それ体にずっと付けてたんですか（汗）」

ジン

「強くなるにはこれ位やるのは当たり前だ」

テイル

「……真似出来ない（汗）」

ジグザグマ

「なあ、それより俺と戦ったあの人って……」

ピース

「先輩しかいないでしょ（汗）」

はい、プチ出張でこっちに来ました（笑）

テイル

「出張って……ただ料理食べに来ただけじゃ（汗）」

それは気にしたら負けさ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2695h/>

ピースの冒険

2011年10月4日20時26分発行